

金沢大学資料館紀要  
創基 150 年記念別冊

# 金沢大学の淵源

加賀藩医学館から甲種医学校まで、および  
石川県啓明学校・石川県専門学校の歴史

金沢大学名誉教授

板垣英治

金沢大学資料館

2012. 10



金沢大学資料館紀要  
創基 150 年記念別冊

# 金沢大学の淵源

加賀藩医学館から甲種医学校まで、および  
石川県啓明学校・石川県専門学校の歴史

金沢大学名誉教授

板垣英治

金沢大学資料館

2012. 10



## 紀要の創基 150 年記念別冊の刊行にあたって

本年（2012）は、金沢大学の創基とされる加賀藩彦三種痘所の開設から 150 年の記念の年にあたり、数々の記念行事が行われています。

本資料館では、この記念の年を見据えて、4 年前より本学の歴史をさかのぼるテーマで秋の特別展を企画し、昨年は『金大事始—加賀藩種痘所から学都金沢へ—』というタイトルで幕末・明治初期の金沢大学の源流校に関する展示を行いました。これに合わせて年 1 回で実施している資料館講演会も企画し、板垣英治先生に「金沢大学 150 年の歴史をふりかえる。金沢医学館，甲種医学校，石川県専門学校」というタイトルでお話しいただきました。その際、私どもの方より、本講演を金沢大学資料館紀要に掲載させてもらえないかとのお話を持ち出したところ、既に講演テーマに対応する大部の原稿があるとのこと、その場でその原稿をデータでお預かりしました。内容を開けてみると、とても紀要に掲載できる分量ではなく、これは一冊の冊子として刊行した方がよかろうと考え、創基 150 年の記念の形で刊行できないかという模索を始めました。幸いに、創基 150 年記念事業準備委員会の方から、記念にふさわしい事業なので補助をしてもよい旨のお話を伺い、創基 150 年の「自主企画」募集の時まで刊行を待つことにいたしました。

その結果、原稿をいただいて半年以上たった本年 6 月に「自主企画」に採用された旨の連絡を受け、やっと刊行に向けて始動することになりました。しかし、すでに半年以上の時が経っておりましたので、板垣先生からは改めて修正の手を入れられた原稿データが届けられ、これに若干の点検作業をさせていただき、やっと印刷所に回せる段となりましたのが 9 月初めのことでございました。また、刊行の経緯もありましたので、これを『金沢大学資料館紀要』の記念別冊の形にし、タイトルを最終決定しましたのも、同じ時期でした。

この間、板垣先生にはいつまでも刊行を引き延ばしまして大変ご迷惑をおかけしましたが、その分、より良いものになったような気もしております。板垣先生の「はじめに」にもありますように、金沢大学 50 年史の段階では不明確であった源流校の時代のさまざまな事柄が、本冊子では明らかになっており、その意味で本冊子は金沢大学の 150 年記念に真にふさわしい刊行物であるのみならず、本学という枠を超えて大学史・学問史・地域史などのうえでも非常に高い価値を有するものになっていると思っております。

どうか読者の皆様には、本冊子をじっくりお読みいただき、100 年以上も前の先達たちがどのような所でどのような学びをしていたかに、思いを馳せていただければ幸いに存じます。

平成 24 年（2012）10 月

金沢大学資料館長  
古 畑 徹



はじめに

金沢大学創基150周年記念行事の一つとして、本学資料館では特別展「金大事始・加賀藩種痘所から学都金沢へ」を開催し、本学の歴史に貢献した先輩達の業績を紹介した。さらの同展に協賛して特別講演「金沢大学150年の歴史をふりかえる。金沢医学館，甲種医学校，石川県専門学校」を筆者が，平成23年10月20日に行った。この講演をまとめて資料館紀要に掲載することであったが，この機会に，以前から考えて居た次の構想を実現することを撰ぶことにした。

「金沢大学50年史通史編」(平成13年刊)には，本学の前身校に関して十分に記載されていないこと，また，他に前身校の歴史を記載した書籍も無く，不自由を感じている方々が多くいるのではと想っていた。実は筆者もその一人であった。金沢大学資料館において，本学に保存されている旧第四高等学校物理機器の整理に携わった際に，前身校の知識無しには作業を進める事が出来なくなった。そのために先ず，石川県専門学校について調査・研究を行い，その結果を金沢大学資料館資料目録2「石川県専門学校洋書目録」(2004)及び同資料目録3「石川県専門学校物理機器図録」(2005)として刊行した。これらの資料目録は，石川県啓明学校，石川県中学師範学校，石川県専門学校に関係した教育史的事柄を記述した初めてのものである。一方，筆者は加賀藩の火薬関係の史料の調査・研究を行ってきた。その時に，金沢市立玉川図書館近世史料館に於いて，「スロイス口述，藤本純吉筆記，『舎密学』」と記載した一枚の図書カードを見つけた。実は，これが筆者にとって記念すべき時—加賀藩のオランダ医学との関わりの出発点—であった。スロイスは加賀藩が雇用したオランダ陸軍一等軍医であり，明治4年3月に金沢に着き，加賀藩医学館で医学教育と患者の診療を行った所謂「お雇い外人」である。彼の真剣にして精力的なオランダ医学の教育の結果，9名の若い医師が誕生して，他に先駆けて北陸三県に西洋医学の華を開くこと出来たのである。このスロイスの医学教育は幸いにして，生徒の一人，藤本純吉の筆記した講義記録(金沢市立近世史料館に架蔵)により，我々はその総てを読みとり学ぶ事が出来るのである。さらに，スロイスの後任としてホルトルマンが金沢医学所に医学教師として明治8年に着任した。彼の講義記録も総て保存されている。筆者はこれらを解読して，これまで

に多数の論文を出版してきた。それに合わせて、金沢藩医学館、石川県金沢医学所、石川県金沢医学校、石川県甲種医学校について史料を調査・研究してきた。この150周年記念には金沢大学医学部では「創基150周年記念誌」を編纂し、平成24年に発行の予定となっている。筆者も医学通史の部分を担当して筆稿している。この様な訳で全ての前身校の歴史を出来るかぎり詳細に記述したものを作成するよい機会と考え、これまでに収集してきた資料をもとに、金沢大学の150年の歴史をたどり、前身校を訪れることにした。本稿では、金沢藩医学館を初めとする医学関係については、主要なことがらを中心に触れる事にした。もしもより詳しい事柄を学ぶことを望む方があれば、「医学部創基150周年記念誌」をぜひご覧頂くことを御願います。石川県立啓明学校、石川県中学師範学校、および石川県専門学校に関しては本稿に詳述した。本稿により、明治初期の金沢での高等教育の実態とその成果—多数の優秀な人材を育てて社会に送り出したことを一層ご理解できると確信する。これはまた驚きともなるものである。

平成二十四年八月

筆者

## 目次

### はじめに

#### 第1編 加賀藩医学館から石川県甲種医学校まで

第1章	加賀藩の医学	
第1項	前史	1
第2項	加賀藩藩校・明倫堂での医学教育	3
第3項	西洋医学のあけぼの	5
第4項	壮猶館. 加賀藩の蘭学の中心施設	6
第5項	黒川良安の生涯. 本学医学部創基の最功労者	9
第6項	藩立種痘所	18
第7項	卯辰山養生所. 金沢での病院のはじまり	20
第2章	金沢藩医学館	
第1項	オランダ医師スロイスによる本格的西洋医学教育	27
第2項	スロイス. その経歴と御雇い外国人医師としての勤め 注記	34 36
第3項	スロイスの医学講義 注記	40 55
第3章	石川県立金沢病院とホルトルマンの医学教育	
第1項	石川県立金沢病院の開院	59
第2項	ホルトルマンの着任と金沢医学所および金沢病院	61
第3項	ホルトルマンの医学講義	64
第4章	金沢病院の落成と金沢医学校から石川県甲種医学校へ	
第1項	石川県立金沢病院と金沢医学校	74
第2項	石川県甲種医学校の開校とドイツ医学教育	78
第3項	石川県甲種医学校の教科書	80
第4項	石川県甲種医学校から第四高等学校医学部へ	86
第5章	私立尾山病院の開院	91
第6章	金沢での薬学教育	
第1項	金沢医学所の薬学教育	94
第2項	石川県甲種医学校での薬学教育 注記	95 96
第2編	石川県啓明学校	
第1項	石川県の高等教育の前史、旧藩時代から明治5年まで	99
第2項	石川県立啓明学校から石川県立中学師範学校へ	99
第3項	文部省交付物理機器	106
第4項	啓明学校、中学師範学校の卒業生	110
第3編	石川県専門学校	
第1項	石川県専門学校の開校	113
第2項	学則、教則、教科	115
第3項	書籍	122
第4項	物理教育と物理学器機	125
第5項	化学教育と化学器機および薬品	127
第6項	教科書	129
第7項	生徒数と卒業生の動向	130
	史料及び文献	135
	後記	149
		以上



## 第1編. 加賀藩医学館から石川県甲種医学校まで

### 第1章. 加賀藩の医学.

#### 第1項. 前史.

加賀藩・第五代藩主前田綱紀<sup>つなのり</sup>は学問・文芸の振興に力を注ぎ、多くの和漢書を蒐集していた。江戸時代に本草学は医学の一大分野をなすものであり、天和二年(1682)に『ドドネウス草本誌』(アントワープ版)を和蘭・長崎商館長より入手した\* (1)。さらに、元禄六年(1693)には、綱紀は京都の本草学者稲生若水<sup>いのうじくすい</sup>を召し抱えて、博物書『庶物類纂』の編纂を命じた。これは当時の本草学の主要書籍であった漢書、李時珍著『本草綱目』を上回る博物書の編纂を目的としたものであった。稲生は中国の174種の典籍の鉱物・動植物関係の記述を広く収集・整理・分類して、元禄十年(1697)に執筆を始め、三百六十二巻を書き上げたが、完成を待たずして正徳五年(1715)に京都・北大路の家で死去した。享年61であった。徳川吉宗は享保十九年(1734)にこれを続けることを下命して、若水の子、稲生新助や高弟・内山覚仲<sup>みくちゆう</sup>\*, 幕医丹羽正伯らを江戸に召して、続編の編纂を行わせた。元文三年(1738)より続編六百三十八巻の書き上げが行われ、総計一千巻にわたる大著が完成した。本書には3590種の動物、植物、鉱物が二十六属に分類されて記載されている。完成した本書は幕府に献納されたが、その後、加賀藩による写本作りが許された。現在、この写本は金沢市立玉川図書館近世史料館に架蔵されている(2)。幕府に献納された『庶物類纂』は「国の重要文化財」に指定され国立公文書館に保存されている。本書は従来の中国から伝えられた本草学の考えを改めて、博物学的思考で編纂されたものであり、その後の江戸期の本草学に大きな影響を与えた本草学史上の最大の著作である。なお、本書には絵図は全くないので、安永八年(1779)に幕臣戸田祐之が描いた「薬草類写生図集」が幕府に献上され、これが『庶物類纂』の参考図録とされて、『庶物類纂図翼』と名付けられた。なお、稲生の孫弟子に江戸期の代表的な本草学者・小野蘭山があり、銘著『本草綱目啓蒙』はわが国の本草学を確立したものである。

\* 『ドドネウス草本誌』 アントワープ、

1644年版, 1492p, 39 x 25cm, 金沢大学医学部記念館蔵。

天和二年(1682)に本書は前田綱紀の求めにより、長崎商館長アンドリース・クレウエルにより贈られた。文化五年(1808)には前田斉広の命により宇田川玄真により

翻訳され、「宇田川玄真本草書和解」が刊行された。

\* 内山覚仲

生年不詳～寛保二年(1742)

加賀藩士で本草学者であり、医師でもあった。初名は覚順。初代覚仲は毛利家の家臣、慶長十一年に前田利長に召され富山に住む。覚仲は稲生若水の高弟で本草学に詳しかった。

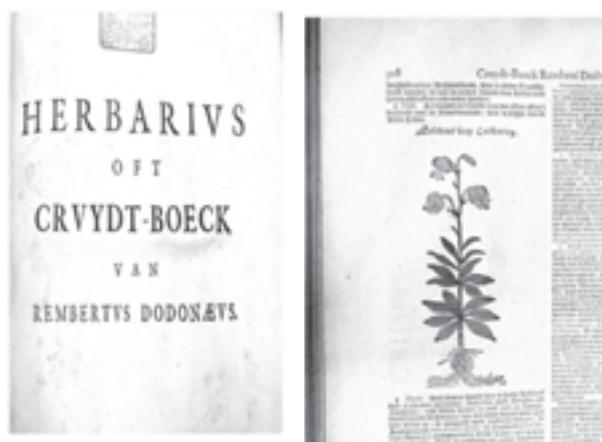


図1. ドドネウス草本誌の標題頁と同書のユリの挿絵のある頁(1).

金沢大学医学部記念館蔵.

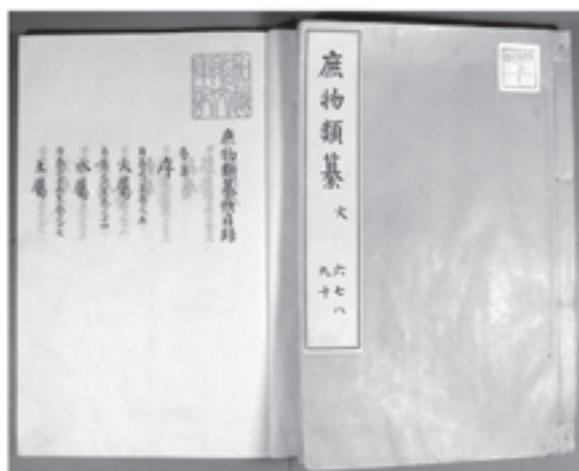


図2. 庶物類纂 全 1054 卷, 稲生若水 編纂 (2)

火属 6-10 卷(右), 惣目録, 最初の頁(左)

金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.

## 第2項. 加賀藩藩校・明倫堂での医学教育

前田治脩<sup>はるなが</sup>が綱紀の意志を継いで、寛政三年(1791)十月に京都の儒学者新井白蛾(祐登)を招き、文武の学校を兼六園の南隅、長谷川邸跡に設置したのが「藩校」の始まりであった。文学所を「明倫堂」(図3.(3), 図4(4))と呼び、翌年七月二日より、文学, 皇学, 漢学, 医学, 天文学, 易学, 算学, 法学, 武学を教授した。演武場を「経武館」とよび、両者とともに「学校」と呼んでいた(図5)。「明倫堂稽古割」(5)には、毎月稽古割があり、三日, 十三日, 廿三日に夕九時半(午後三時)より、句読師会読, 同医学, 同算学の授業が行われていた(図6)。医学は医学本草であり、「明倫堂御書物目録」(6)によれば、医家類に内経素問, 靈樞, 難経本義, 傷寒論, 金匱要略, 本草綱目啓蒙(小野蘭山), 本草綱目啓蒙名疏(小野職孝), 本草綱目(李時珍)の8部136冊が架蔵されていた。学校は文政五年(1822)に、仙石町(現・金沢中央公園内)に移転して、明治三年(1870)に閉校した\*。その後この地には後に触れる様に、明治九年に県立学校「啓明学校」(後に石川県中学師範学校に校名を改称)が建ち、さらに石川県専門学校(明治十四年), さらに第四高等中学校(明治二十年)と移り変わった。なお、新井白蛾は寛政四年(1792)に金沢で死去した。白蛾の位牌は寺町一丁目・宝勝寺に祀られ、墓所は野田山墓地にある。



図3. 明倫堂扁額, 新井白蛾書, 寛政四年(1792), 金沢大学資料館蔵.

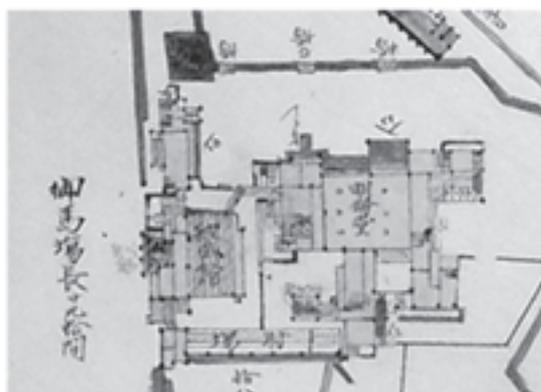
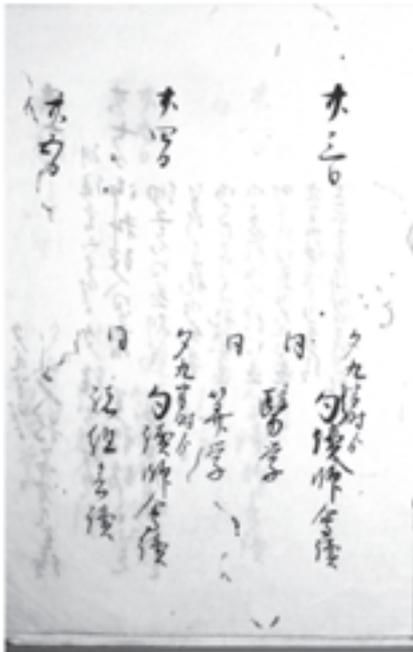


図4. 明倫堂, 経武館の図面。「天保九年学校図 但御建物地形図」の一部, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵(4).



図5. 藩校の蔵書印の印影.  
明倫堂と経武館を総称して「学校」と呼んでいた。そのため蔵書印は「学校」であった。

図6. 「明倫堂経武館記録」の明倫堂稽古割より。金沢市立玉川図書館近世史料館蔵(5).



二十三日の授業は、夕九半時(午後3時)より、句読師会読、同医学、同算学が行われていた。

\* 伍堂卓爾は安政四年に12才で明倫堂の生徒であった。高峰讓吉も明倫堂で学んだ生徒の一人であった。

注:

内経素問: 中国古典医学書、素問は王冰が唐代(762)に編纂したものであり、医学的(科学的)な事象を基礎的に問答形式に記載した書籍。

靈樞: 医学古典書「鍼経」の別名であり、医療を実践的、技術的に記述した書籍。

難経本義: 中国三大古典医学書の一つであり、鍼灸医学大系を臨床的に記述した基本

的医学全書。前漢後期(BC106,または 190 年)に成立した,扁鵲学派の医学集団により編著された書籍と見られる。

傷寒論 : 中国三大古典医学書の一つであり,後漢時代に張仲景によって著されたとされる。疾病への対応の仕方,処置法を教えた経験的医学書。

金匱要略きんきょうようりやく: 林億編集,全25巻,北宋の仁宗の時代,原著は張仲景「傷寒雜病論」(後漢),でこのダイジェスト版である。

本草綱目: 李時珍著,五二巻,付図二巻,中国・明代,万歴廿四年(1596)に初版刊行。その後各地で刊行された版が色々ある。慶長十二年(1607)にわが国に舶載されていた。

本草綱目啓蒙: 小野蘭山著,全48巻,享和三年(1803)~文化三年(1806)刊行。  
自然物の名称,異名,産地,産出,形態,利用等を詳細に和文で記述。各地を歩き,精力的に収集した資料を基に記述したもので,蘭山が口述して,孫の小野職孝が記述した。

本草綱目啓蒙名疏: 小野蘭山鑑定,小野職孝もとたか編輯,全8巻,文化六年(1809)刊,衆芳軒蔵,須原屋善五郎。

### 第3項. 西洋医学のあけぼの。

文化五年(1808)に十一代藩主前田治脩はるながの疾病治療のために蘭法医宇田川玄眞\*を江戸から金沢に招きいれて治療したのが,加賀藩における西洋(蘭法)医学の正式な試みの初めとされている。玄眞はこの年十二月八日に随員として門人藤井方亭\*\*,吉田長淑\*\*\*等10数名と共に金沢に着いた。藩主の治療の後に,翌年六年二月に津山に,次いで五月に江戸に戻った。第十二代藩主前田齋広なりながは藤井方亭と吉田長淑ちようしゆくを藩医として採用することを強く望み,二名の蘭法医は江戸詰侍医となった。文政七年七月(1824)に金沢で齋広がにわかに発病して急逝した。この時吉田長淑が江戸から急ぎ駆けつけたが齋広の治療には間に合わなかった。吉田は旅の途中に発病して重篤となり,金沢に着いた後の八月十日に客死した。享年四十六。金沢・棟岳寺に葬られた(7)。

\* 宇田川玄眞(1769-1834)号榛齋。伊勢国安岡家に生まれる。杉田玄白,大槻玄沢の「芝蘭堂」で学ぶ。宇田川玄随の養子としてその跡を継いだ。内分泌器官の「腺」や膀胱の「膀」の文字を造字した。日蘭辞書ハルマ和解の編纂,遠西医範(和蘭解剖学書の翻

訳), 和蘭内景医範提綱(本学記念館蔵), 医範提綱内象銅版図(石川県立図書館蔵), 和蘭薬鏡, 遠西医方名物考(金沢市立玉川図書館蔵), 内外要論, 篤爾, ショメル百科事典の翻訳書「厚生新編」等の著作, 訳述がある。

\*\* 藤井方亭( ー1845)名 俊, 伊勢の人, 江戸に出て, 宇田川玄眞に医学を学ぶ。文化七年(1810)より前田齋広に仕える。江戸在住の侍医となる。天保三年(1832)に吉田長淑とともに蘭書(玉函涅槃挫我爾徳児著「増補重訂内科撰要」全十八卷)(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)の翻訳を行う。弘化二年(1845)八月に没す。

\*\*\* 吉田長淑(1779-1824)諱成徳, 字直心, 号駒谷, 蘭馨とした。幕府医官土岐長元に漢法を学び, 次いで桂川甫周に蘭学を学ぶ。蘭医書で内科を研修することにより, 良医の名を挙げる。文化七年(1810)前田齋広は宇田川玄眞の推薦により, 吉田を藩医とした。訳本「泰西熱病論」七卷, 同後編五卷, 「内科解環」全十五卷, 「蘭訳鏡原」を訳述した。

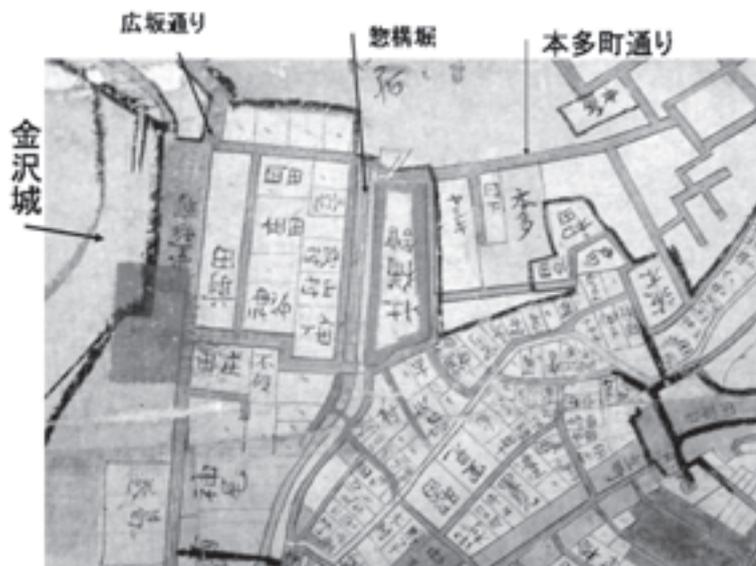
#### 第4項. 壮猶館. 加賀藩の蘭学の中心施設.

文政十一年(1828)から長崎で蘭学, 医術を学んでいた黒川良安は, 天保十一年八月(1840)に富山に帰国する途中に金沢に立ち寄った。金沢の蘭学同好の士達は黒川を引き留め, 洋学の教授を請うた。さらに, 黒川は加賀藩大夫青山将監の御手医師として召し抱えられた。当時は蘭医学より兵学が優先する時代であり, 黒川は弘化元年(1844)に金沢藩に召し抱えられて蘭医師として更に蘭書(兵学)の調査・研究を担当した。黒川のもとには蘭学を学ぶ大田美農里(蘭法医学), 渡辺知行(蘭法医学), 河野通義(兵学), 加藤九八郎(兵学)らが集まった。嘉永年間(1848~)に加賀藩は異国船の来襲に備えて, より進んだ洋式軍備をめざして, オランダ兵書の解説・研究が始まった。大橋作之進は自宅(三社)に私的な西洋砲術の研究所を設け, 大砲の鋳造などを行っていた。当時, 加賀藩は河北郡鈴見村(現・金沢市杜の里)に「鋳造所」を建設して, 釜屋弥吉を鋳造場の棟取に迎えて, 嘉永六年(1853)には鉄製野戦砲(鋳物製)の生産を始めていた。この大橋の私的研究所が藩主により認められ, これを公的な機関とすることになり, 安政元年(1854)五月に藩主齋泰(第十三代)は上柿の木畠一番地(現・知事公舎の地. 広坂1丁目)の篋倉的場の跡地に「西洋流火術方役所」を開設した。大橋作之進が初代の主付に就任した(図7)。

図7. 加賀藩壮猶館の位置を描いた地図.

「金沢町絵図(明治初年)」より.

金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.



大橋作之進らによる洋式砲術の研究がはじまり、黒川良安、大田美農里、津田淳三、鹿田文平等の蘭学者は翻訳方に採用された。これが同年八月には名を「壮猶館」と改めて、敷地を三千六百八十七坪余に拡張した(図8)。安政二年に成瀬正居が主付(責任者)に就き、弾薬奉行、筒奉行、製造奉行、銃卒奉行、軍艦奉行が置かれ、さらに翻訳・校合方、舎密局が置かれた(史料1)。壮猶館では西洋砲術の研究に始まり、洋学、兵学、医学、航海学、測量学の蘭書を用いての研究および教授がされた。さらに、加賀藩の軍事的に重要な施設—土清水薬合所、鈴見鑄造所、上野村、野村および田上村弾薬所、所口及び西町軍艦所、泉野調練場等—の管理・運営も壮猶館で行った。

「旧加賀藩立壮猶館取調要項、旧加賀藩立医学校取調要項」の「壮猶館沿革要略」には

創立ハ安政元年ニシテ、前田家十三世正二位斎泰公時勢ヲ洞察シ洋法ノ最務ナルヲ知り、該館ヲ設ケ藩士ヲシテ練兵ニ従事セシムルニヨリ、大イニ砲術ノ盛ヲ見ルニ至レリ。又該館設立ニ盡力セシ人物ハ大橋作之進ニシテ、夙ニ自邸ニ於テ西洋砲術ノ研究所ヲ設ケ、長大隅守家臣河野久太郎、菊池大学家臣加藤九八郎ト共ニ翻訳書ニ就キテ講究シ、黒川良安ヲシテ原書ヲ調査セシム。其後、松

下謙作ナルモノヲ江戸ヨリ聘シ其術ヲ練習ス。是ニ於テ藩主小川群吾郎，同権之助，同兵左衛門，河野久太郎，加藤九八郎ニ命シテ，其術ヲ学ハシメ，遂ニ壮猶館ヲ設クルニ至レリト云ウ（史料2）。

と記され，学士として鹿田文平（勤斎）\*を蘭学の鼻祖として，安達幸之助，三宅複一，岡田秀之助らが英学を生徒に教授した。その一方では，上記の軍事施設の点検・監督も重要な任務であり，成瀬正居は度々これらの施設に赴いていた。壮猶館での兵学授業では蘭書を翻訳したカルテン砲術書「舶砲新編」等を使用した。兵学では初期はオランダ式であったが，中期にはイギリス式の改まり，後期にはフランス式となった。

安政二年に

壮猶館・翻訳方，一 金二百疋宛御医師黒川良安，同 津田順三，右翻訳方校合御用相勤候ニ付，昨年之通右金高被下候様仕度奉存候。一 銀一枚，定番御徒鹿田文平，右翻訳方御用相勤候ニ付，如昨年右通被下候様仕度奉存候（史料3）。

とあり，安政二年には壮猶館より翻訳方校合御用には金二百疋が支給されていた。同年の壮猶館の職員名簿には，翻訳方鹿田文平，翻訳校合方黒川良安，津田淳三，舎密方松原小四郎，高峰元<sup>げんりく</sup>種の名前が見られる（史料4）。高峰は土清水薬合所御用も兼ね，松原とともに洋式火薬や雷管作成の研究についていた（8）。

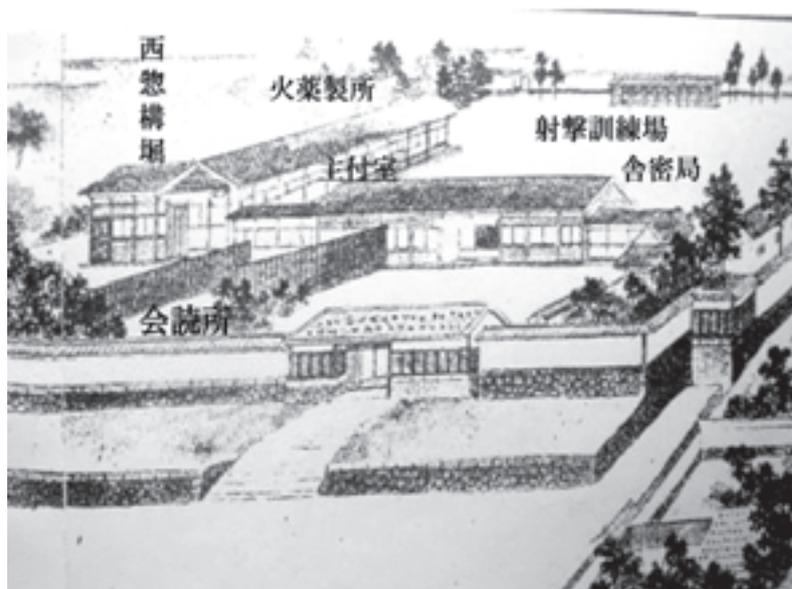


図8. 加賀藩壮猶館絵図.  
(9)

会読所で蘭書の会読が行われた。舎密局に高峰元種が勤めていた。

\* 鹿田文平(1814-1871) 諱は正明, 父正復は加賀藩の足輕小頭. 故あって自刀を為して籍を削取された. 文平は十七才で京都に小石元瑞に医学を学び, また蘭書を読んだ. 爾後, 大阪, 江戸に学び, 金沢に帰り医を業とした. 嘉永六年に永原久兵衛に仕え禄を得た. この年に再度江戸に出る途中に, 松代藩で佐久間象山のところで西洋兵書の翻訳を行った. 加賀藩は鹿田を呼び戻して西洋流火術方役所に雇い, 翻訳方に就けた. 安政元年閏七月に藩は鹿田を土籍に加え, 秩六十石を与え, 壮猶館教師とした. 砲台築造のための能登海岸の調査, 軍艦発機丸の機械調理方に転じ, 元治元年に大砲方裁許となる. 慶應二年九月大砲歩小頭に, 明治二年十月陣営次長に, 三年十二月文学三等教諭となったが, 四年一月六日に没した. 享年五十七. 訳述した書籍は戦闘紀事, 攻守略説, 比較中外貨幣篇, 天象解等がある (10).

第5項. 黒川良安の生涯. 本学医学部創基の最功労者.

黒川は名<sup>たすく</sup>弼, 字良安, 号静淵, 医顛. 自然(十三代加賀藩主前田齋泰から下賜)であり, 加賀藩前田齋泰の侍医にして, 金沢医学館総督医であった. 黒川は当に本学医学部創基の最功労者である.

良安<sup>まさやす</sup>は文化十四年二月四日(1817)に越中国新川郡黒川村(現富山県上市町黒川)に父親・次助(玄竜, 元達), 母親ますの長男として生まれた. 父親は富山藩御目見医師で, 母は富山藩肝煎・石川源右衛門の娘であった. 幼時は真言宗寺院本覚院の寺子屋で小学教育を受けた. 文政十一年三月(1828)に父親(40才)は妻と良安(12才)を伴い長崎への医学修行に旅立った. 良安は和蘭通詞吉雄権之助\*に入門して, 蘭学と医術を学んだ. 六年後の天保五年(1834)に父親は修業を終えて帰国したが, 良安は一人長崎に残って更に六年間の医学修業を続けた(11, 12).

注. シーボルトは1823年6月から1828年まで長崎に居た. 従って良安は医学を彼について直接学ぶ事は無かった. (シーボルトについて医学を学んだとするものがあるが誤りである.)

当時, 長崎では天保七年の飢饉のために, 長崎奉行は他国人を帰郷させて, 米の節約を行っていた. しかし, この様な状況でも良安は苦学力行して学業に励み, 大いに成果を挙げることが出来た. さらに, 長崎在住の与力・高島四郎太夫(秋帆)等とも深く交流して, 新しい西欧の情報を学んでいた.

黒川は動物の骨より燐を作る実験を行っていたと, 嵯峨寿安識「自然翁伝」に「曾テ

在崎ノ日、燐ヲ製シ又移東ノ時、人腦ヲ解剖セリ是レ蓋シ皇国製燐、剖腦ノ嚙矢ナラム」と記載されている。長崎では燐の製造を、江戸では人脳の解剖を人に先んじて行っていたとのことである(13)。さらに、本邦初の製リンは黒川良安であったとの書き込みが、宇田川榕菴の「舎密開宗手摺本」巻六、第二百二十九章燐の頭注に次の様にある。

『余知ル所ニシテ本邦ニテ創テ燐ヲ製スル者ハ加州藩黒川良安ナリ 天保壬寅十月中坪井塾ニテ八角石ヲ以テ酸ヲ製シタルニヨリ得タリ』

とある(14)。坪井塾とは江戸の坪井信道の日習堂である。天保十三年(1842)にこの実験を行っていた。頭注にあった『八角石』は、同書第三篇・第三百三十二章・燐酸の製法に『獸骨灰或ハ鹿角焼灰細末十二分ニ硫酸十一分・・・』とルビを付け、記してあることから、『八角石』は『鹿角焼灰』の略(誤)記である。いずれにしても、坪井信道(1795-1848)の塾生であった25歳の黒川良安が1842年に、獸骨を処理してリン酸をつくる過程でリンを得たものと推測される。

十二年間の長崎留学を終え、天保十一年(1840)六月に長崎を発ち帰郷の途にいた。長門(萩)では青木周弼(青木周蔵の父)を訪ね教鞭を執った。道中、腸チフスに罹り、大阪・緒方洪庵塾に世話になり、臥床四十余日の救療を受けて全快することができた。天保十一年八月に富山に帰国する途中、金沢に江間雀々翁を訪ねた。加賀藩の蘭学同好の士河野久太郎は長谷川源右衛門、加藤九八郎、大橋作之進等と謀って、黒川を寺町に住まわして洋学の教授を勧めた。同年十月には長谷川の推薦で加賀藩太夫青山将監の御手医師として抱えられて六人扶持を受けた。将監は自禄から五十石を分贈して黒川を召し抱えた(15,16)。

黒川良安は天保十二年(1841)春に緒方洪庵の推薦で、江戸の蘭方医坪井信道(1795-1848)に入門、日習塾(江戸・冬木町)の塾頭となり五年間勤めた。弘化三年(1846)に蘭学者・緒方洪庵、青木周弼、杉田成卿、赤沢寛堂らは黒川と共に坪井信道の門で学んだために親しい間柄であった。弘化元年(1844)八月二十三日に黒川は江戸より長谷川源右衛門への書簡を送っていた(史料5)。この書簡には、「蘭学医青山殿合力当時江戸遊学罷越居候由、長谷川源右衛門口指越候紙面之内之由」とあり、内容は「扱諸国險敷事と申候は第一和蘭より皇国江使者之事。第二フランス国より琉球之土地ヲ借受申度様願出申候事。(中略)右ニ付近来西国九州之御大名方洋学者御召抱被成候。(以下略)」あり、諸外国のわが国への働きかけが激しくなり、これに備え「日々火術之洋書和解いたし居候」者が増えていることを長谷川に伝えていた。

先に触れたが、黒川は江戸で本邦初の脳の解剖を行った。天保十五年(1844)十一月二十四日付の伊東玄朴から良安あての書簡には、

「過日解剖之節は寒中終日御苦勞被成下難有仕合奉存候。然者明後廿六日又々解剖仕候間 御出席可被成下候。是は兼而榊原甫眞依与相願居候解剖に御坐候。此度は社中一同大兄を目当に相願居候間。寒中誠に御迷惑に可被思召候得共、是非共御繰合被下 払暁与御出席被下、ヘルセン御見せ可被下。私も此度は早暁より参上、尊兄江相願ヘルセンを十分御教示を請度候間。是非共に払暁ヨリ之御出席偏に相願候。御門生中様御引連御出可被下候。此段相願度如此御座候。」

ヘルセン=hersenen(蘭), 脳

とあり、人体解剖があり是非良安に出席を願い、脳を解剖して説明して欲しいとの願いであった。黒川良安による脳の解剖に大きな期待が集まっていた(17)。

江戸では黒川は次の蘭書を翻訳・出版していた。

『医理学源』堀内寛(忠龍・素堂), 黒川良安, 青木研造共訳

仏国・<sup>リシェランド</sup>理施蘭度 著, 弘化四年(1847), 本文 115 頁 卷之 I, 64 頁, 卷之二, 51 頁. 武田科学財団杏雨書屋所蔵.

原典:A. B. Baron Richerand. (1779-1840), Noveaus elemente de Physiologie, 1801.

(和蘭語版) (内容:一般生理, 感覚, 運動生理, 生理機能)

天保十五年十一月に良安(28才)はリシェランの生理学書を翻訳して、『医理学源』を完成していた。出版は弘化四年(1847)となった。さらに次の書籍を翻訳・出版した。

越<sup>エルジキ</sup>爾<sup>モル</sup>実<sup>モル</sup>幾 模<sup>モル</sup>兒 両先生「経験書」全14巻。黒川良安, 大槻俊斎, 林洞海, 青木研造 共訳。

原典: Anthonie Moll (1786, March, 8-1843, June, 16)

Cornelis van Eldik (1791, March, 5-1857, October 29)

Practisch Tijdschrift voor de Geneeskunde in al haren Omvang, Gorinchen, Jacobus Noorduyn, 1831.

(「新医学臨床雑誌」, 京都大学図書館富士川文庫所蔵)

「論英吉利斯病並治法, 二家日記抜萃」(史料6)

坪井安懷堂で知り合った信州松代の藩士佐久間象山の塾に天保十五年(1844)六月二十一日移り, 弘化元年(1844)にかけて佐久間象山に蘭学を教えた\*。一方, 象

山および幕臣杉原平助より漢学を学んだ。(漢学を学ぶ時間は殆どなかったとも云われている。)年長の佐久間からメース(先生の意)と呼ばれ尊敬されていた。弘化二年(1845)二月十七日に父母の要請により金沢に帰国した(18)。

\* 黒川は象山に次に示すカステレインの蘭書 2冊を用いて口授して教えた。

本書の第四章「土類」に記述された鉄鉱石、緑礬、緑礬油、明礬および礬石、灰汁塩、硝石など16項目にわたり取り上げて解説していた。

Kasteleijn, P. J., Beschouwende en Werkende Pharmaceutische,  
Oeconomische, en Natuurkundige Chemie.

Eerste deel, 1786. Willem Holtrop, Amsterdam.

Tweede deel, 1788. Willem Holtrop, Amsterdam.

本書には「壮猶館文庫」「養生所医局蔵」「金沢藩医学館」の印影があり、現在、本学付属図書館に架蔵されている。

同年秋に佐久間象山は良安を松代藩主に推薦して、坪井信道の辞も添えて江戸に招こうとした。しかし、長谷川がこの事を知って加賀藩庁に進言した。この事を知った青山は加賀藩藩庁へ推薦して、弘化三年(1846)七月二十九日に御医者(侍医)に召し出され新知八十石を賜ることになった(史料7)。

弘化三年(1846)七月二十三日に、

一、当時青山將監手医師黒川良安与申者本越中御郡方出生之者之由ニ候所蘭学宜いたし、当時諸国ニも算へし程之者之由御聴立居候。御用ニも可相立義ニ候間、被召出候而も御宜哉之御内慮ニ候間、御内々年寄中御詮議可有之旨被仰出候ニ付、右御内慮之趣今日御用番遠江守へ主税以別席相達、兪議之趣被申上げ候様こと申達置。(中略) 右蘭学宜医術も相応之由ニ付、御医者ニ可被召抱候間、御宛行等之義逐詮議可被相伺旨仰出候。

七月 (史料7)

とあり、黒川を加賀藩御医者(侍医)に召抱えることが詮議された。

「側用人又藩主ノ命ヲ執政ニ致ス。既ニ之ヲ禄スルニ決ス。故ニ更ニ命シテ其禄額ヲ議定セシム」(史料8) おして黒川を侍医に召上げその禄高を詮議した。その結果、

弘化三年七月二十九日

新知 青山將監手医師 八拾石被下 黒川良安

御医者ニ被召出

右ハ蘭学宜医術モ相応ニイタシ候間ニ付被召出候由」(史料9)

黒川良安の加賀藩御医者(侍医)として御召出しが決まった。黒川は弘化三年に金沢・木倉町で開業して、翌年に両親を富山より呼び寄せた。翌嘉永元年(1848)に御算用場付藤沢順之助の姉小銀と結婚した。

大田美農里、津田淳三、渡辺卯三郎(大聖寺藩医)等が黒川のもとで医学を学んだ。

史料10には「嘉永元年8月13日ノ条」

一 珍敷医書之蘭書出候ニ付、外へ行而も如何付、御用にも可有之哉と筑前守様被仰進候由、御内々之事故大方主膳ホも承知罷在り申間敷旨御定付御取上可然。然上ハ此表へ取寄、良安へ拝見被仰付可然と申上。依而代料十二両御奥通り可被遣旨 御意見段執筆申渡置事。「大野織人手留」とあり、珍しい医学書が領内で発見され、藩で取り上げとなり、本書を良安に読ませることになった。

嘉永二-三年(1849-50)に松代藩の村上義茂(英俊)の訳著「舎密明原」が完成した。本書はベルゼリウス著『化学提要』から、雷酸関係の項をフランス語版から抄訳したものであった。佐久間象山は本書を黒川良安に贈呈していた。加賀藩壮猶館文庫に架蔵されていた本書は舎密方の高峰らによる雷管の製造に使用されたと見られる。さらに村上の編集したわが国最初の仏語辞書『三語便覧』も壮猶館文庫に架蔵されていた(19)。

嘉永二年二月(1849)に越中の弁財船長者丸(六百五十石、十人乗組、富山・西岩瀬港所属)が天保九年十一月に三陸沖で暴風雨に遇い漂流した。乗員は嘉永元年十月に帰村した。加賀藩は翌年二月から乗員の尋問調査を行ったが、黒川は調査記録作成係として参加した(詳細は略す)(20)。

嘉永三年(1850)二月十六日に黒川は福井藩笠原良策より痘苗をもらい受けて、長男誠一郎に種痘を行い成功した。さらに藩主前田慶寧も幼い多慶若に接種させた。嘉永四年には自宅を河原町に移して、明石昭斎、黒川元良、津田随分齋らとともに患者の治療と若者の教育を行った。

嘉永五年(1852)八月二十八日に干拓中の蓮湖(河北潟)で魚が浮上して、その魚を食べて死亡する人も出る事故が起きた。

この事業を進めていた銭屋五兵衛が毒物を流したとの容疑で藩により逮捕された。この時に黒川良安は現場に赴き、視察した。その時の状況を『蓮湖魚毒説』嘉永五年に記して、

「今此蓮湖此ノ如ク大ニシテ其海ニ注ク所至テ浅ク甚タ狭シ。而シテ大小河川ヨリ毎歳輸贈スル所ノ汚穢腐敗ノ物ヲ除クノ道ナシ。奚ソ数百年間其水質壊敗セサル事保タンヤ、是レ此蓮湖亨保六年六月異事アリ、而シテ今年又タ此如キ大異而アル所以ナリ。(以下略)」

(史料11)

と説いている。河北潟の水の腐敗の原因を西洋の資料をもとに科学的に説いて銭屋五兵衛の冤罪を証言した。

嘉永六年(1853)十一月には加賀藩の江戸御下屋敷御庭(江戸・板橋平尾邸屋敷)において西洋流大筒鑄造のため、御台所奉行、鑄物師等とともに江戸表に出かけていた(史料12)。

「都鄙ノ嵐 一抄」

一. 左之人々大筒鑄造方江仰付御下屋敷御雇入江仰付ニ而小川権之助も右御用江仰付先達而御雇入之義江仰渡之由御勘定奉行岡田喜内、御医者蘭学黒川良安、村井又兵衛手医者明石昭斎および鑄物師、手伝い等 (以下略)

江戸・板橋の平尾屋敷では、この年から約 20 挺の大砲の鑄造を行っていた(21)。

また、大橋作之進が「煩鉄全書訳本」の研究をしていたが、翻訳の間違いで理解出来ないとのことで原書を借り受けて、黒川に読ませた(史料13)。

史料13. 諸事惣用日記十抄 嘉永六年 大村口次郎

十一月十六日

一. 大橋作之進義鉄製筒鑄造方煩鉄全書訳本を以研究いたし候得共、中ニハ訳之間違も多い様子ニ付き、何卒原書取出様黒川良安口足口 作之進申含越候連、明日伊藤玄朴ニ申ニ此之旨ニ口 原了安相願候処(中略)下曾根殿へ当時小川権之助稽古ニ被越之義ニ候而、右御挨拶申述時、(中略)右



図9. 黒川良安著

「蓮湖魚毒説」(史料11).  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.

書物之義御借用之義相願候而(以下略)

十一月廿日

一. 下曾根殿より御借用之煩鉄全書之原書式冊黒川良安江御渡之事.

嘉永七年(1854)

「煩鉄全書」訳本の原書はオランダのヒューゲニン著『ロイク王立鉄製大砲鑄造所における鑄造書』(1826)であり、翻訳書には伊東玄朴、後藤又二郎、池田才八、杉谷雍介らにより翻訳された『鉄煩全書』(煩鉄全書と同じ書)、さらに金森錦蔵訳『鉄煩鑄鑑』や手塚謙蔵、大島高任による『西洋鉄煩鑄造篇』が知られている。大橋はこの伊東玄朴らの『鉄煩全書』を入手して調査・研究をしていた。しかし誤訳があり理解不能となり、原書式冊(本文1冊と反射炉や錐鑽機絵図のある図版1冊)を江戸・下曾根金三郎から借り上げ、黒川が誤訳を調べることになった。

正月に旧弓術練習場「筥倉的場」(柿の木島, 現 広坂1丁目 8 番 19-27)に「西洋火術方役所」が設置され、大橋作之進が主付に就いた。

史料14. 嘉永七年四月

一. 御医者黒川良安 並 村井又兵衛 手医師明石昭斎 私共手先御用被仰付折ニ 火術方役所江罷出 漸々翻訳書も被仰付候様仕度左候得者 新發明之品々等多可有御座奉候

とあり、火術方役所での仕事が始まった。西洋火術方役所では藩命により和蘭書(兵学)を調査・翻訳を行った。この年八月に火術方役所は「壮猶館」と名称を改めた。

安政四年(1857)に藩主斎泰の幕府に参上に従い黒川は江戸に至り、江戸詰めとなった。この時に幕府蕃書調所に調役(教授手伝)となり慰労金を賜った。爾後の藩侯の江戸参上には必ず同行して、江戸在住の天下の名士達と交遊していた。

安政五年父親玄竜が病死した。行年65才。両親の墓は大乗寺山墓地にある。

万延元年(1860)に黒川は江戸蕃書調所教授方御用となった。

文久元年(1861)に加賀藩は良安らに種痘接種を認可した。それ以来種痘の普及の先導者となった。文久元年八月「触留帳」(史料15)には、医師黒川良安に種痘を行うことを許可すると記されている。

史料15. 定番頭江

痘難之儀は小兒大厄に候処、致種痘候者は伝染痘を遁候法之由に付、今度御医師黒川良安等申談、右種痘苗断絶無之様永続之仕法相立度旨、願之

通承届候条，種痘相望候者は右仕法方，並罷出候ヶ所等之儀良安江示合  
可申候 右之趣一統可申談候事

酉八月

文久二年に，後に触れる様に金沢・彦三八番地の元「反求舎」で加賀藩種痘所が開  
設され黒川らによる種痘が始まった(22)。

同年に壮猶館翻訳方では黒川良安，津田淳三，大田美農里，田中信吾，高峰元  
稔らは蘭書会読を始めた。(オランダ医学書の勉強会)当時，壮猶館に架蔵されていた  
医学書は次のものであった(23)。

表 1. 壮猶館に架蔵されていた医学書

- Lehmann, C. G. Handboek der Physiologische Scheikunde. (1856)
- Anton, K. C. Volledig Pathologisch Geordend Zakboek der Meest  
Beproefde Geneeskundige Voorschriften. (1852)
- Anton, K. C. Volledig Pathologisch Geordend Zakboek der Meest  
Beproefde Geneeskundige Voorschriften. (1853)
- Wunderlich, C. A. Handboek der Pathologie en Therapie. 1-3. (1849-1855)
- Mess, P. M. Handboek over de Beenbreuken en Ontwrichtingen. (1853)
- Most, G. F. Encyclopedisch Woordenboek der Praktische Genees-, Heel-,  
en Verloskunde, 1-5, (1835-1838)
- Most, G. F. Supplement op het Encyclopedisch Woordenboek der  
Practische Genees-, Heel- en Verloskunde. 1-2. (1838)

蘭書会読には Lehmann の生理化学書(図 10)  
が使用されたと見られる。黒川は基礎医学，特に  
生理学に強い関心があった。

図10. C. G. Lehmann, Handboek der  
Physiologische Scheikunde. 1854.

「壮猶館文庫」の印影がある。

金沢大学附属図書館蔵。



文久二年に黒川は錢屋五兵衛八代目喜多郎二女・千賀の右下腹部腫瘍を診療した。その記録が「錢五の館」に所蔵されている。文久三年(1863)には加賀藩軍艦所の藩軍艦御用兼務を仰付けられた。元治元年(1864)に黒川は藩主慶寧に随行して京都に行き、すでに滞在していた佐久間象山に合い開港説を耳にした。その翌日(七月十一日)に佐久間は三条木屋町の路上で尊皇攘夷派の一味と思われる暴漢らに襲われ殺害された。藩主前田慶寧は朝廷と長州藩との調停に奔走したが不調に終わり、家老奥村榮通てらみちに任せて金沢に帰った。

黒川は帰国後、彦三種痘所が手狭となったために、南町に種痘所を移して棟取となった。元治元年(1864)八月十七日一十二月二日に藩主第十四代慶寧は病気となり、総勢十数名で、主に漢方医からなる治療医師団が結成され、黒川、高峰らもこれに加わった。九月一日には高峰と黒川が組となり藩主の診察をした。藩主の治療には漢方医により主に「抑肝散加芍薬羚羊角」が処方されていたが、十月八日に黒川は目薬沃顛眼水モジロウの処方をした。これは「拝診日記」に記載された唯一の西洋薬であった(史料16)(24)。

慶應二年(1866)四月、藩主前田齋泰が致仕して、嗣子慶寧よしやすが第十四代藩主となる。慶應三年十月に卯辰山養生所が開院して黒川は棟取に就いた。慶應四年に戊辰戦争が始まり、新政府より加賀藩は参戦の命を受けて、養生所からも医師らが野戦病院に出向いた。

明治二年(1869)八月七日執政本多政均の暗殺事件が起き、御医師黒川良安らは本多を診察したが、傷深くして存命の可能性は無かった。その結果「診察致し候処、前条深手に而存命之程難計旨申聞候事」と記した(史料17)。

明治元年十月長崎へ学校、病院設置のための制度調査及び教育・診療等の機材購入のために赴き、二年三月に着いた。この時の長崎滞在中の写真がある(図11)。



図11. 長崎で撮影した黒川良安の写真  
(明治二年)(25)。

黒川自然翁の小照, 明治2年長崎・  
上野彦馬写真館で写す。

明治三年二月金沢藩医学館を大手町に開設し、黒川は総督医に就任した。同四年(1871)三月にオランダより医学教師スロイスが着任した(スロイスの項参照)。明治四年七月に廃藩置県となり、前田慶寧は藩知事を解任された。これを請けて黒川良安も医学館総督医を辞任した。

以後、古寺町の自宅で「新々堂」の堂号で患者の治療を行っていたが、明治七年以後医業を閉じた。(この建物は金沢市横川町 5-78, 加藤家に現存する。)地方衛生会委員医務取締役はつづけて勤めていた。明治十八年(1885)に東京の子息誠一郎氏宅に移ったが、明治二十三年(1890)九月二十八日に脳溢血で卒去した。享年74, 法名良安院釈静淵居士。青山墓地に葬られた。

明治四十二年(1909)に朝廷は正五位を追贈した。明治四十三年に金沢医師会は拠金して黒川良安の銅牌を建牌し、その功績を後世に伝えた。(現在、金沢大学医学部玄関に本銅牌は展示されている(図12)(26)。



図12. 黒川良安の功績を讃える記念銅牌

「翁の面貌は写真と寸分違わざるほど

酷似し、温容髭鬚としていけるが如く、又像の上なる題字の『黒川自然翁』の隸書五字は前田侯の揮毫にかかり、又像の下なる略伝は四高教授宮川熊三郎氏の撰なるが、文字彫刻共に配合宜しきを得たるのみならず、額縁には美麗なる大理石を用い両々相俟って頗る見事なる出来栄え一(以下略)」

明治四十四年十一月十五日北国新聞の記事。(金沢の医学百年より)(27)。

#### 第6項. 藩立種痘所

安政二年(1855)十月に津田淳三ら道学の士九名(今村兔朔, 田中大玄, 島崎元鼎, 津田随分齋, 伏田元幹, 田中兵庫, 土岐雄吉, 遠藤三六)により、金沢・堤町に某の持家を借りて私立種痘所が開かれた。牛痘種を越前福井藩士半井氏より得て人間の児童に接種していた。種痘を受ける町人が日増しに増し、病院の必要性を知ることになったが、その為には多額の費用が必要であることから、先ず藩庁に大田美農里, 黒川良安, 高峰元稔らが種痘所に必要な諸経費を支給する様に交渉をした。但しこれに従

事する医師達は無給とした。文久二年(1862)三月に金沢・彦三番丁の「反求舎」なる建物が与えられ、藩侯認可の種痘所(彦三種痘所)が開設された。医師黒川良安、高峰元棧、鈴木儀六、奥田宗範、大窪大禧、大熊春吉、明石春丈、嵯峨寿安、崎田春庵、三宅良雄、明石君中、池田一安、阪本楨、藤田弘庵、島崎元恭、増尾法教らが加わり、至って盛んに種痘が行われる事になった(28)。

注:彦三番町「反求舎」のあった位置を示す一次史料はいまだ見つからない。

弘化・嘉永期の金沢・彦三町八番地付近の地図を図13に示した。彦三種痘所のあった場所は特定出来ないが、「検校屋敷」(元常復寺上地町)のあたりであったと間接的に推定される(22)。

図13. 金沢・彦三町八丁目の地図。  
(弘化・嘉永期「金府大絵図」より)  
金沢市立近世史料館蔵。

彦三町八丁目  
この付近に反求舎があったと推定されるが、一次史料はなく確認出来ない。  
武蔵ヶ辻



彦三種痘所は手狭となったために、元治元年某月に金沢南町の「心学所」に移転した。これを機に「金澤藩種痘所」となった(29)。「安政年間(安政四年六月)に町奉行岡田隼人、荒木藩太夫が藩に請うて許可を得(中略)南町畳屋九郎兵衛の家を借りて心学所を興した」という記載があり、この位置は『金沢町絵図』(文化八年)には石浦町界紙屋小路。南町西側角地から北に四軒目にある。これは現・南町二番一号で北国新聞社敷地の一部である(22)。この種痘所には黒川良安、高峰元棧が棟取となり、今村兔朔が種痘所御用指引役、土岐雄吉が種痘所御雇であった。

なお文久二年六月十日には御郡方の医師が種痘を行うことを望む者は其法を黒川良安より伝習した後に種痘を行うべきとのお触れが出た(史料18)。

史料18.「御用鑑」 文久二年六月十日

於御郡方医業致候者共之内、種痘致度者有之者、右種痘之法、御医師黒川良安等より致伝習可致種痘、無左而者追々猥に相成、茂偽種痘致出来候而者不

容易儀に候間、此段無違失相心得候様、夫々嚴重可申渡候、已上。

戌六月十日

三州御郡奉行

諸郡十村中

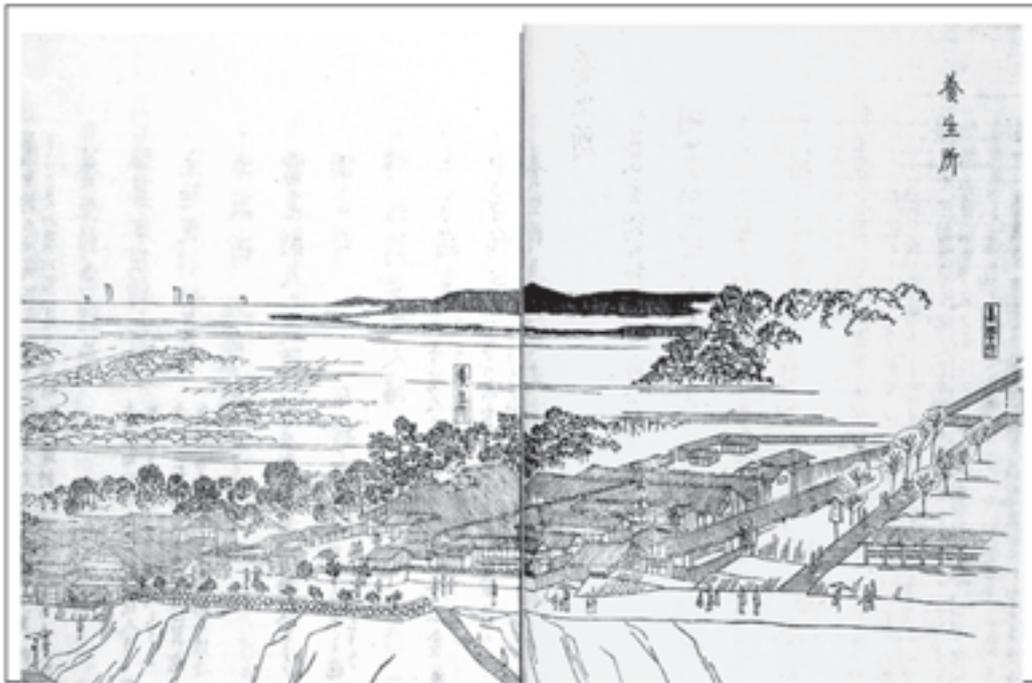
この様にして多くの町民に種痘が行われて、天然痘の感染が防がれたのであった。

第7項．卯辰山養生所．金沢での病院のはじまり．

慶應三年に藩主慶寧は福沢諭吉の『西洋事情』を読み、貧民の救済と病院経営の事業を興すために、卯辰山を開墾して養生所および撫育所を建設することを決した。六月に町民の勤労奉仕のもとに建設工事は竣工して、藩立病院として慶應三年十月に卯辰山養生所は開院した。当時の町民の喜びも大きく、盛大は開院祝いが行われた(史料19)。

職員は壮猶館より移り、黒川、田中、大田、津田、高峰らが棟取に就き、他に数十名(医員 鈴木儀六、松田壬作、三宅当一、島崎元鼎、今村兎朔、横井三柳ら)が職員となり、貧民の救療、医学の研究・教育を行った。診察局、外科施術局、薬局、厨房、浴室、棟取局、当直局、看護局、事務局等が備わり、他に医学教授所、会読所、生徒寄宿所、癲狂院、種痘所と舎密局(別棟1棟)があった。舎密局には高峰元稜が惣理となり、丘村隆幸、遠藤虎次郎(長崎出身、写真技師)、旗文次郎、吉田好二(遠藤の補助人)が掛員として勤め、硫酸、硝酸、塩酸、舍利別チンキ、エキス、蒸留水、膏薬類を調製した。「或時舎密所内ニ一椿事アツタ事アリ何者カ製造中爆発シテ屋根ノ一部ヲ撃チヌキ破片遠クマデ乱散セシ騒ギアリ」の事故記録がある(史料20)。薬草園も附属施設としてあった。笠舞の撫育所も移転してここに加わった。病人は第一等から第三等まで区別され、第一等はすべての治療費用を自弁できる者、第二等は衣食費を自弁し薬種代を免除する者、第三等は困窮の者にして全額を免除の者とした(30)(史料21)。養生所の学生は甲、乙に分けられ、甲は原書生と云われ蘭医書を学んだ。乙は訳書生と言われ翻訳書「扶氏経験遺訓」などで医学を学んだ。本養生所には明治元年戊辰戦争(北越奥羽の役)での本藩の傷病兵が収容されて治療が施されていた。当時入院患者三四十名計りあり、その頃蘭医藤井方亭は初めて脱疽患者の下肢切断術を行った。本養生所の工事を担当したのは金沢「真柄組」であり、当時の建物の全図面が保存されていた(図15)(史料22)。

図14. 卯辰山養生所絵図. 卯辰山開拓録, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.



養生所平面図は8枚ある。幾度も患者入院室部分の増築を行っていた。本図はその中からの最も古い図面であり、慶応二年に開院した当時の建物を示していると思われる。上半部分は入院室であり、床は板張りであった。下半部分は左部分は惣裁役所および事務、会読室、棟取室、翻訳室、診察室、薬室(局)、待合室があり、右半分には書生寄宿所とあり、学生用の施設があった。

なお、加賀藩の卯辰山養生所は「病院」であったが、幕府が江戸に開設した小石川養生所は「貧病院」であり、全く性格の異なるものであった。



黒川の禄高は百三十石となり、高峰元稔、田中信吾らは七人扶持となった。養生所には次の医学書および自然科学書、辞書が架蔵され、医学教育と研究に使用された(表2, 表3)(31)。

表2. 卯辰山養生所医局に架蔵されていた医学書.

著者名	書籍名	医学分野
Donders, F. C. Bauduin, A. F.	Handleiding tot de Natuurkunde van den Gezonden Mensch, (1851-1853)	生理学
* Lehmann, C. G.	Handboek der Physiologische Scheikunde. (1856)	生化学
* Anton, K. C.	Volledig Pathologisch Geordend Zakboek der Meest Beproefde Geneeskundige Voorschriften, (1852-1853)	薬理学
Pereira, J.	Handleiding tot de Leer der Geneesmiddelen, (1854)	薬剤学
* Wunderlich, C. A.	Handboek der Pathologie en Therapie, (1849-1855)	病理学
* Mess, P. M.	Handboek over de Beenbreuken en Ontwrichtingen. (1853)	整形外科学
Ruete, C.G.T.	Leerboek der Ophthalmologie.(1846)	眼科学
* Most, G. F.	Encyclopedisch Woordenboek der Praktische Genees -, Heel-, en Verloskunde, (1835-1838) 5 vol.	医学辞典
* Most, G. F.	Supplement op het Encyclopedisch Woordenboek der Practische Genees -, Heel- en Verloskunde. (1838) 2 vol.	医学辞典
Rombouts, G.	Bijdrage tot de Kennis der Verschillende Elektrische Stroomen, (1857)	その他

\*印は壮猶館に架蔵されていた書籍

Donders & Bauduin の「人体生理学」が架蔵されていた。本書はわが国にはこの1冊のみがあり稀覯書である。

Berzelius の「化学提要」、Lehmann の「生理学」、Rösel の「昆虫図譜」、Chomel の「家政辞典」等の注目される書籍が架蔵されていた。

注. 高峰元稔<sup>げんりく</sup>

(元稔, 昇)ト部<sup>つかね</sup>紳. 明治になり精一と名乗る. 幼名は剛太郎である.

文政十年(1827) 富山・高岡町医師高峰玄台の倅として生まれる. 母は越後高田町年寄長野金次右衛門娘トキ(祖父の養女), 父(九代目 玄台清臣<sup>キヨオミ</sup>)は小堀八大夫家来給人松井理右衛門嫡子藤馬で高峰家に婿養子として入る(史料23).

表3. 卯辰山養生所医局に架蔵された化学, 生物学, 物理学および辞典と辞書(31).

Kasteleijn, P.J.	Beschouwende en Werkende Pharmaceutische, Oeconomische, en Natuurkundige Chemie, (1786-1788)	化学
Berzelius, J.J.	Leerboek der Scheikunde, (1834-1841)	化学
Lemann, C.F.	Handboek der Physiolgrasche Scheikunde, (1856)	生化学
Rösel, A.J.	De Natuurlyke Historie der Insecten; (1764-1768)	生物学
Hall, H. C. & Vrolik, W.	Bijdragen tot de Natuurkundige Wetenschappen. (1826-1829).	物理学
Pitisco, S.	Lexicon Latino-Belgicum Novum, (1754)	ラテン・蘭語辞書
Hoogstraten, D. van	Nederduitsh en Latynsch Woordboek, Dictionarium Belgico-Latinum, (1771).	ラテン・蘭語辞書
Chomel, M.N.	Huishoudkunig Handboek voor den Stedeling en Landman. of Chomel Huishoudelijk Woordenboek, (1800-1803)	家政辞典
Weiland, P.	Beknopt Nederduitsch Taalkundig Woordenboek. (1826-1830)	蘭語辞典

父は高岡町医師であった。父に従い医術を学び、文事にも通じて、「槐所」(エンジュ)と号していた。天保十四年(1843)三月から弘化二年(1845)三月まで、京都・蘭法医小石元瑞(1784-1849)の究理堂で蘭法医学を学び、さらに同年四月から東京・坪井信道に従いオランダ学および内外学を嘉永二年(1849)五月まで修業した。アツセン、ブレンネル著「新薬論」より抄訳して「麝香根ト幾那鉄塩」とした(26)。嘉永三年(1850)に高岡町に戻り、父玄台の医業に従事していた。嘉永6年(1853)に高岡の酒造業津田喜三次の娘幸子と結婚した。安政元年十一月三日に妻<sup>ゆきこ</sup>幸子との間に長男讓吉が生まれた(史料23)。

安政二年(1855)二月に壮猶館舎密方に臨時御用して雇入れられ、舎密方御用として銀七枚が支給された。

同年三月十七日には同僚の松原小四郎と共に強い無機酸類によって和ガラスが溶けて使用することが出来なくなることに気づき、洋式ガラスを試験的に作り同様な試験を行った。このことから洋式ガラスの製造窯を作って欲しいことを「諸道具之願」に書いて藩に提出した(史料24)。同年五月には西洋流製薬(火薬)の試作を土清水薬合所で行った。

当時高峰は健康を害して、高岡に帰り保養することを申し出ていた。

同三年十月には壮猶館舎密方御用(正式採用)として七人扶持が与えられた。同六年二月に加賀藩侍医(御医者)に任命され、壮猶館舎密方御用と兼帯することになった。藩主慶寧の診察、御薬調合の相見御用を拝命していた。

万延元年(1860)二月に大桑(土清水)製薬所(薬合所)御用に就任した。

文久元年(1861)十二月に壮猶館翻役方御用および校合方御用も兼帯することになった。同二年には壮猶館医学試業・兼・蘭医書会読方御用になった。この年に壮猶館では黒川良安をはじめ、津田淳三、太田美農里らと共に和蘭医学書の会読をはじめた。(参照:黒川良安)また、加賀藩種痘所が彦三八番丁に開所した。

富山・新川郡で松原小四郎が洋式硝石丘法の指導を行っていた。一方、加賀の塩硝買い付け高は九千貫を越えていた。文久三年四月に御軍艦方御用の兼帯が仰せ付けられた。また、能登・所口へ出役して、石灰等見分の御用を行った。さらに加賀、越中、能登の三州へ出かけての仕事もあった。

同年六月には侍医として顕光院様並びに初姫様の病気診察を命じられた。翌元治元年正月に初姫様の病気の治療を行った。同年七月には御口殿詰めを命ぜられ御番相勤め罷奉候。同元年八月十七日から十二月二日にかけて藩主慶寧の病気治療のための医師団が生まれ、九月一日には高峰と黒川が組となって藩主の診察をした(史料16)。

元治元年十月より土清水製薬所解体・改築工事始まる。

同十月に初姫様の御匙御用(投薬)を御丸御番にあたり、同十二月には眞龍院様の診察を行った。さらに、慶應元年二月にミテ禮姫様等の診察も行なった。同年三月に加賀藩南町種痘所棟取に命じられた。

慶応二年三月七日に壮猶館の爆発事故が起きる。死傷者十五名を出す。雷酸水銀による事故と考えられる。翌三年七月に英国人(アーネスト サトー等)の金沢に止宿するにあたり、旅宿に相詰めた。同年十一月に知事様の御上京のお供した。また、同四年三月には景德院様御迎えのために越後路まで出かけた。慶応三年十月に卯辰山養生所が開設され、舎密局惣理に就く。同年四月に加賀藩養生所棟取を命じられた。十人扶持となる。慶應四年三月に従四位様の御上京に御供する。明治元年二月に金沢藩より病院棟取医学教授申付けられた。明治二年九月には富山藩医学所教師病院棟取申付けられ、月給三十円を与えられた(33)。

富山・山王町「西洋医学校」高峰昇教師(旧山田嘉膳邸跡, 高致尋常小学校の位置), 生徒百四十人。後に「洋学南校」となるが, 明治四年に廃校となる。

明治三年二月に任権少属医学館三等教師申付候事。月給廿五円金沢藩(三十三石)。明治三年二月に養生所を廃して, 医学館を金沢大手町に設置。明治三年に文学二等教師医学館教授申付候事。月給廿五円金沢藩。同年九月 民政掛。明治四年に兼六園内(時雨亭址)に理化学校が開設されて綜理となるが, 同年七月の廃藩置県により医学館に合併される。(理化局は明治七年再開—明治八年に場所は病院裏方に移転とするものがあるが, その業務に関する史料はない。)

高峰は故あって数ヶ月で免職となる。

明治年四月より同九年三月までスロイス, ホルトルマンに従い内外科の実地伝習を受ける。明治五年に職を辞して, 金沢・梅本町の前田丹波守邸跡の自宅で開業(内科, 外科, 婦人科を診療)した(34)。明治九年九月に石川県より一等医務取締を申付けられた。年金三十円を支給される。明治九年に石川県富山分病院が設立された。院長は田中信吾が十二年十月まで兼任した。明治十年二月十六日に石川県富山病院と改称した。明治十年十月に富山医学所を開設して, 校長には田中信吾が兼任した。同十一月八日に富山・總曲輪に富山病院が新築されて移転した。明治十一年二月に高峰は内外科医術開業免許を内務卿大久保利通より授与された。明治十二年十月に石川県富山病院・富山医学所校長は高峰精一に代わった。明治十三年六月には富山病院長にも就任して月給百円を石川県より支給された。明治十三年に石川県より石川県衛生委員に申付された。

明治十四年十一月に富山医学校を廃止して, 金沢医学校に吸収合併した。明治十六年七月に富山県より富山県富山病院長を申付された。明治十九年まで富山県富山病院長および富山医学所校長の任に就いていたが, 同年に金沢・梅本町四番地の自宅に戻った。明治三十三年(1900)八月二十一日に病没した。享年74。金沢市泉寺町摩頂山国泰寺に葬る。

注:

顕光院 = 第十三代藩主前田慶寧の継室通子, 初姫

眞龍院 = 第十二代藩主前田齋広の正室, 禮姫 = 前田利嗣の娘

景德院 = 第十一代將軍徳川家斎の第21女, 偕子, 溶姫(齋泰の正室)

従四位 = 第十三代藩主前田慶寧, 知事

## 第2章. 金沢藩医学館.

### 第1項. オランダ医師スロイスによる本格的西洋医学教育

医学館の創設は黒川良安を計画主任として始まった。明治元年十月藩命を帯びて黒川は門弟・医師横井三柳および長男誠一郎と共に、医学校および病院の設置の為に諸制度調査並びに病院必需の器械・器具を購入のために長崎に赴いた。明治二年五月に「製造人体模型」、病院必需器械、長崎病院教則、マンスヘルト氏講義録、その他薬品等を購入して持ち帰った。横井三柳は製造人体模型（キンストレーキ）の解体・組立法を修得して帰り、後に解剖学に精通した（1）。

注：キンストレーキ Kunstlijk.（図16）

フランスの解剖学者ルイ・トマ ジェローム・オズー（Louis Thomas Jérôme Auzoux 1797-1880）によって製作された紙塑人体模型で、購入したものは男性体であった。現在わが国には4体あるが、最も完全度が高いものが、本学に保存されるキンストレーキである。平成22年に修復が行われて、元の色彩に戻された。

注：黒川の長男誠一郎は江戸で村上英俊の仏語塾「理達堂」に入りフランス語を学んでいた。誠一郎は長崎より船便でフランスに留学した。後に外務省にて外交官となった。

黒川はこの時に長崎でオランダ公使に金沢への医学教師の派遣を要請したが、本国に手配するとの回答に過ぎなかった。そこで長崎精得館の蘭人医師マンスフェルトに会い相談した結果、伍堂卓爾らをオランダに派遣して、医学教師雇用の交渉に当たらせることにした。

明治二年三月オランダ人医師の雇用のために、金沢から藩軍艦奉行岡島喜太郎、佐野鼎、関沢考三郎、吉井保次郎ら四名が長崎へ発ち、留学していた伍堂卓爾もここで通訳として加わり、一行は四月三日に米船「コスタリカ」で長崎を出航して上海に向かった（2）。（以後の事柄はスロイスおよび伍堂卓爾の項に記載した。）

加賀藩は西洋医学の導入のために卯辰山養生所を大手町旧津田玄蕃邸跡（済々堂）に移して「金沢藩医学館」と改めて、オランダ人医師を招き医学教育と患者の診療を行うこととした（図17，図18，図19）。卯辰山養生所は貧病院とした。

明治二年三月に医学館では医学教育のために「医学館規則」を作成した。教育期間は5年間として、予科の初年度（第五等）は語学（オランダ語）と数学，次年度（第四等）で理学（物理学）と化学の基礎教育とした。本科（第三等）から解剖学，生理学，動物学を配した。この教則の学科の中には「\*動物学」「植物学」が書かれていた（3）。

\* 従来，わが国では「動学」「植学」と言われていたが，ここで初めて「動物学」が使用された。



図16. キンストレーキ  
紙塑人体模型，金沢大学医学部  
記念館蔵。

「植物学」は中国由来の言葉である。明治二年三月に金沢医学館において、わが国で最初に学術用語「動物学」が作られて使用されたのである。

医学館では、

従来ノ藩医ヲ初（メテ）総テ医業ノ者或ハ百姓町人タリトモ医術ニ心掛之輩ハ右館へ入学勉勵可有之候事 附今般和蘭第一等医官為教師御雇ニ相成 当十月到着之筈ニ候條前以テ學術研精可有之候事（中略）右之通一統御布告可有御座候也

明治三年二月

学政所

なる学生募集の「触れ」を出した。従来の身分制を破り、「医術に心掛ける者は誰でも医学館へ入学を申しでること」とある。本医学館規則の始めには「今般医学館御取立是迄之流弊改正 銘々厚ク心ヲ用ヒ規則ヲ守リ 等級ヲ経テ他日精業ニ至リ候様可致勉勵者也」（以下略）とあり、医学教育を受けるものへの心掛けを明示した。また、スロイスの到着まえに、「前条以テ學術研精可有ノ候事」と、予め良く学習しておくことを呼びかけていた(4)。

明治四年に黒川良安は医学館総督医に就任し、医学教師（文学三等教諭）として津田淳三、田中信吾、大田美農里、高峰精一等が、医員として鈴木義六、松田壬作、三宅当一、島崎元鼎、今村兎朔、横井三柳らが着任した。同年三月四日\*にスロイスが金沢に到着して医学教師に就任した（図20）。

\* スロイスの到着日は別項では三月二日であったが、翌日大聖寺にリトルウツドの病気治療と遺体埋葬に行き、改めて急ぎ三月四日に金沢に戻った。この事のために、この日を彼の到着日とした。

図17. 金沢医学館の位置を示す金沢絵図，（史料1）。

金沢医学館の位置 大手門 尾山病院



左横の「寺西」がスロイスの宿舎に宛てられた。

（注：尾山病院は明治18年1月に開院したものである。）

医学館の総敷地は旧津田玄番邸であり千七百余坪，建物は約八百坪であった（図19）。医学館の平面図の敷台が入り口であり，正面は待合室（病人溜），その奥の部屋が診察室で，右横に医局および事務室があり，その右側に薬局があった。奥の講堂で医学生の教育が行われた。この図の部分の建物は，現在は兼六園内に金沢城兼六園管理事務所兼六園分室と

して使用されている。



図18. 金沢医学館  
(写真は明治十一年頃、宮内庁が撮影した。)(5)  
門柱には「石川県金沢医学所」と書かれている。  
この建物は大正十二年に兼六園内に移築され、  
現在は「金沢城・兼六園管理事務所兼六園分室」  
になっている。

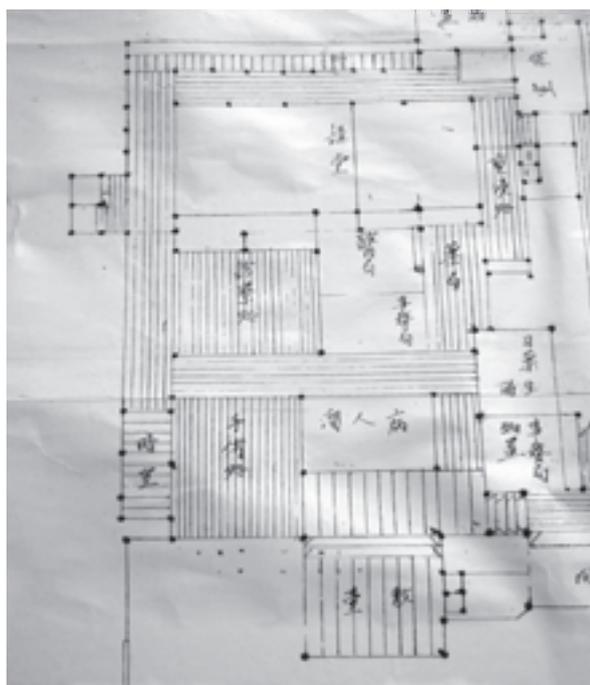


図19. 金沢医学館平面図  
本図は明治十年頃に描かれたものの一部である(史料2)。

スロイスの雇用の詳しい経緯は伍堂卓爾の項に記述したが、この雇用契約の大要は次のものであった。

西暦千八百七十一年三月一日、即ち我が明治四年正月十一日より三十六ヶ月間の雇入の定約にて右期限内は官費御雇となり、旅行支度金として二ヶ月分、旅費片道七百弗を支払い、かつ、金沢では邸宅を貸与する。始め月給洋銀四百弗の処定約課外の業を教授する事になりたるを以て同年三月十二日より更に二百弗を増加して合わせて六百

弗を給せり（４）.



図 20. P. J. A. スロイス.  
金沢大学医学部記念館蔵.

藩は明治三年二月に前述の様に医学館の教育規則である「医学館学則」を作っていたが、スロイスは到着後、直ちに医学教育を短期間に行うためには不適當であると指摘して、直ちに五年制の学則を作った（医学館学則の詳細は文献 1 を参照）.

第一年 解剖学，包帯学，理学，動物学，健康学，植物学，化学

第二年 局所解剖学，健康学，化学，生理学，植物学，顕微鏡検査，薬剤学

第三年 病体解剖学，病学通論，外科通論，外科手術，内外科検査，打検法，聴取法，  
検温器用法，病床顕微鏡用法

第四年 病学各論，外科各論，外科手術，内外科検法，眼科，男子生殖器病，中毒学，  
軍中療法，銃病療法，仮死検査法，人為呼吸法

第五年 内外科検査，皮膚梅毒治療，婦人生殖器病，喉鏡用法，産科，医学歴史，  
越列機用法，精神病，断訟法

医学館はスロイスの着任により，開館式が盛大に催された．藩侯父子は正装で，スロイス夫妻も正装でこの式典に臨んだ（６）.

教育はスロイスがオランダ語で口述して，通訳三名（伍堂卓爾，武谷俊三，馬嶋謙吉）がその翻訳を行い，生徒が筆記する方式を採用した．スロイスの教育は厳しく，生徒の遅刻は認めなかった．講義は毎朝八時から始まり十時まで行い，生徒は午後には午前の講義の復習を行った．また毎週土曜日にはその週に学んだ授業の試験を受けた．この試験に及第しないものは退学処分とするものであった．

医学館及び病院の組織は次ぎのものであった．カッコ内に担当職員名を記す（但し明治 4～5 年）（１）.

総督医 医学館病院内諸事を総括主裁する。（当時欠員，黒川良安は明治四年辞任した．）

教師 スロイス 日々医学館へ出頭八時より十時迄講義し，講義相済み，直ちに病院へ至り，室内患者及び外来患者の診察治療を為し夕四時に退去す．

助教医 三人（二等教師之に充てる）右総督医の所務を助く．但し昼夜詰め切りの事内二人は生徒を助教し当直として教師スロイスの治療を補佐す．その内一人は生

徒を助教し，日講記聞を編輯す．（大田美野里，田中信吾，津田淳三）

通弁 二人 右内外患者及び講義等の通弁を為し生徒を助教す．（伍堂卓爾，武谷俊三）  
理化係（三等教師二員之に充てる）教師スロイスの講義を実際に試験し理化学を助教す．

（高峰精一，鈴木儀六）

薬局監察（四等教師一員，訓導一員之に充てる）昼夜詰め切り，配剤其方書と相違い無  
之哉検査し且薬品の良否鑑定は当直示談相決事．但し内一員は生徒監正を兼務  
す．（松田壬作）

翻訳校合係（訓導二員，訓導加二員之を充てる）日講記事の編輯を校合し，種痘係を  
兼務す．（三宅良雄，鈴木良準，羽田康平）

器械方 日夜詰め切り．治術入用の外療器械を予損敗等の点検をす．（横井三柳）

解剖係 一員（訓導を之に充てる）解剖課に専務とし生徒を助教す．

（石川考恭，松田壬作）

器械手伝 二員（訓導之に充てる）昼夜詰め切り本役を助け器械の損敗を修復し且つ副  
直の所務を助く（中浦帆作）

副直（訓導加二員，訓導二員之に充てる）昼夜詰め切り患者手当方当直の指示を受け  
摂養方等慰諭に説諭し，当直の助けを為す．

薬局係（訓蒙一員並び調合役生徒の内）昼夜詰め切りの事．（石川考恭）

書籍出納係（訓蒙一員之に充てる）昼夜詰め切り．（石川考恭）

種痘係 昼夜詰め切りの事．（奥田肇，遠藤三六）

幹事 二員 の所務は官則に準ず．

鑑定 五員 の所務は官則に準ず．

種痘方 五員 の所務は官則に準ず．

採漿 六員 の所務は官則に準ず．

明治四年の調査によれば，教官と職員は総数 74 名であった（図 21）．



図 21．スロイスと医学館  
職員．（金沢市立玉川図書館  
近世史料館蔵）

前列左から津田淳三，大田  
美農里，スロイス，田中信  
吾，伏田幹，後列左から伍  
堂卓爾，松田壬作，馬島謙  
吉，横井三柳（史料 3）．

（明治 6 年頃の写真と見ら  
れる．）

第一回の入学生徒は、藤本純吉、稲坂謙吉、上杉寛二、藤井貞為、三沢敬吉、須賀忠愛、宮北憲、上出達三、不破鎖吉の9名であり、金沢および近在からの者であった（図22）。金沢県医学館規則の第十六條からその一部を次ぎに上げた（4）。

「其五 月曜日ヨリ五日間、毎朝八字ヨリ十字迄、講義スヘシ。第六日ニハ、其授ケシ学科ヲ能ク了解シ、記憶シ得ルヤ否ヤヲ検査スヘシ。第七日即日曜日タルヲ以テ休業ス。」



前列：藤井貞為 上杉寛二 稲坂謙吉 不破鎖吉  
後列：三沢敬吉 須賀忠愛 宮北 憲 上出達三 藤本純吉

図22. 金沢藩医学館第一回の学生9名の写真（史料4）。  
明治6年頃の写真である。

「其十 医タル者ハ、平生自家重大ノ事務ヲ以テ任トスヘキナレハ、生徒ト雖、其行儀ハ位階ニ在ル者ト齋シカラン事ヲ要ス。尤モ酒色ニ耽ル事勿レ。若シ然ルトキハ、學術ノ為ニ費ヘキ精神ヲ侵害シ且信ヲ失フニ至ルヘシ」（以下略）

また、入学生徒の年齢を十六才以上三十才までとした。生徒に対する教育が厳しく行われていたことを示している。

スロイスが行った講義は究理学、舎密学、植物学、動物学、有機化学、生理学、普通病理学、各自病理学、病理学通論、薬剤学、健康学、解剖学、各自外科学、外科手術学、眼科手術学抄、軍陣療法学、徴兵検査法、スロイス氏方叢等18科目であり、これら総てを一人で講義した。生徒の藤本純吉は講義の総てを記載したノートを残しており、それら37点が藤本文庫として、さらに藤井貞為の筆記した講義録23点が金沢市立玉川図書館近世史料館の保存されている。また、稲坂謙吉が筆記した講義録が「憶松閣文庫」として10教科19点が金沢大学医学部記念館に架蔵されている。これらの講義は後に詳しく触れるが、わが国で最初に講義された内容を含むもの—舎密学、究理学、動物学、薬剤学など—が多くあり、スロイスは最新の資料を用いて講義を行っていたことが分かる。

スロイスの講義は高く評価され、また人格者の信望も厚く、仕事熱心な人であったと伝えられている(6)。医学館および石川県から金沢滞在の延長許可願いが政府に提出されたが、認められず1874年10月に帰国した(4)。

医学館第一回の入学生達はその後、医学教師として医学校に勤め、また北陸三県で医師として病院で活躍した。医学館の開校以来、明治十七年(1884)年までの13年間に医学を修学して卒業した八二名が医師免許を取得したことは全国一の快挙であり注視されるべきことであった(1)。

第一回金沢医学館卒業生の進路(明治9年～16年)(7, 8)

藤井貞為	富山県高岡分病院
上杉寛二	福井県武生分病院長
稲坂謙吉	石川県大聖寺分病院長
不破鎖吉	石川県金沢病院
藤本純吉	石川県金沢病院
須賀忠愛	富山県高岡分病院
三沢敬吉	不明
宮北憲	不明
上出達三	不明

生徒の概数は時により異同あるが、明治四年の調査によれば百二十人にして、其内三十三人は入塾生であり、その費用は各自に之を支給した。授業料は当初は支払いの必要は無かったが、スロイス到着後に教則を五ヶ年間の教育に改めた後は、第一年生は月二十銭を納め、一年を進むごとに五銭を増やし、五年生では四十銭を納めることになった。学校経費は、最初は若干の費用を充てたが明らかでない。明治四年の調査によれば外国人教師の給料を省き、総ての費用は米三千石(約一万五千円に相当)であった。なお、金沢藩医学館は明治四年七月の廃藩置県により、その運営基盤を失い危機を迎えた(4)。この年黒川良安は老齢をもって辞任した。大田美農里、津田淳三、田中信吾らは金沢県に打診して医学館の建物と諸設備を無料で借り受け、私立医学館として医学教育と患者の診療を続した。しかし、財政的には困難であり、スロイスの高額の給与は三人の私費から支払われた。明治六年三月に金沢町戸長らは石川県に強く働きかけて、資金の援助を受けることになった。また金沢総区長からも支援を得て、半官半民の形態での経営となった。明治六年八月に文部省から改めて医学館と金沢病院に対して許可があり、その後、大田美農里と田中信吾の尽力によって、医学館の公費支弁が実現することになった。明治八年八月に「石川県金澤病院」と改称して公立病院となり、津田淳三、大田美農里、田中信吾の三人が主務医に就いた。同年九月に金沢病院(院長大田美農里)と金沢医学所(所長田中信吾)に分離した(1)。

第2項. スロイス. その経歴と御雇い外国人医師としての勤め.

オランダ陸軍一等軍医スロイス Pieter Jacob Adriaan Sluys は、1833年8月16日にオランダ南部の町ステーンベルグ(Steenbergen)C-13番地で生まれた。父 Jan Sluys は 35才で教師，母は Maria Thresia Hüygens であった。1849年秋(16才)にユトレヒト陸軍軍医学校に入学して，ボードウイン\*，ドンダース\*\*等から医学の教授を受けた。ハラタマ(長崎精得館，大阪舎密局教師)は同校の上級生であった。1854年7月20日(21才)にオランダ東インド陸軍に入隊して三等軍医となった。1860年6月28日(27才)に二等軍医に昇進した。1865年9月30日(32才)からライデン大学で医学研究を始め，1866年12月18日(33才)に同大学より「湿疹に関する研究」で医学・学位を取得した。1869年1月18日(36才)でオランダ陸軍一等軍医となった(9)(加賀藩による雇用の経緯は伍堂卓爾の項を参照)。

1871年(明治四年一月十日)にスロイス(38才)は夫人(Marie Agens Jansien Hooijman)と共にボンベイ経由で香港から横浜着いた。伍堂卓爾と浅津富之助(藩・教師出迎主任)等が出迎えた。オランダから武谷俊三\*，馬島瑞謙\*が通訳として船旅を共にしていた。スロイスは横浜ではオランダに帰国するハラタマ(オランダ陸軍軍医学校卒，長崎精得館舎密学教師，大阪舎密学局教師)に出合った。一行は船で神戸に向かった。神戸から鉱山学教師デッケンとリトルウオード(イギリス人・英語教師)が加わり陸路を共にしたが，敦賀でリトルウオードが天然痘を発症して大聖寺で宿を取った。スロイスらは三月二日に金沢に着いたが，翌日にリトルウオードの治療のために，スロイス，田中信吾，伍堂卓爾，武谷俊三の四名は急ぎ大聖寺に向かい施療したが薬効なく，同夜死亡した。遺体を埋葬した後に金沢へ引き返した。大聖寺(城南出村山)にはリトルウオードの墓石が現存している。

スロイスら一行は福井ではグリフィス(米人 1870-1872)に合っていた。明治四年三月四日(1871年4月22日)に金沢へ到着して，金沢大手町外国教師館(元寺西邸)に入った。その後，住居は金沢城内の玉泉院丸に洋式館が建てられ，以後はここに移り住んでいた(4，9)。

直ちに加賀藩医学館・医学教師に就いたが，加賀藩の計画していた教育方針では，語学教育から始まり，残された短い時間で医学教育を行うことが困難であることから，スロイスは新たに5年間の医学教育計画を作成した。講義は前に触れた様に究理学など18科目を総て一人で講義した。スロイスはオランダ語で口述して，通訳3名(伍堂卓爾，武谷俊三，馬島健吉)が翻訳を行い，生徒はそれを書き取る事とした。通常午前八時から十時まで講義が行われ，生徒は午後には午前の講義の学習とした。(スロイスの講義については次ぎの項とする。)

廃藩置県後，明治五年五月に文部省令により金沢医学館は金沢病院として，その規則を定め，スロイスの雇用を従来の加賀藩から文部省による雇用として本病院での医学の教授と患者の診療を継続して担らせた。

スロイスの契約期間の3年が近づき、石川県立金沢病院および石川県は政府にスロイスの滞在資格の延長を申請したが許可されなかった(4)。明治七年(1874)九月末日に金沢を去り、帰国の途についた。馬嶋健吉と他二名が付き添い、帰路は十月一日 小松、二日 金津、三日 浅水、四日 今庄(中略)、七日 大阪、八日 神戸ー横浜であった(10)。同年十一月二十五日にオランダに着いた。1877年4月23日に健康上の理由により退役したが、それ以後の消息は不詳である。1913年2月17日にオランダ・ロスマーレン(Rosmalen)で没した。享年79。妻 Marie とは離婚していた(11)。

スロイスには金沢で生まれた長男 L.H.F. Sluys がいた。この息子は長じてオランダ海軍の南米印度艦隊司令官となり、H.Ms.Hertog Hendrik 号の艦長に勤務していた(図23a)。艦隊は大正九年五月に横浜に碇泊した。同月二十日に息子は自分の生地・金沢を訪れて、父親の教え子達に会い、篤い歓迎をうけ、また親しく歓談をした。当時の新聞にこの時の記事が掲載されている(図23b)(12)。

図23a. スロイスの長男の名刺。金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。  
Kapitein ter Lee K.F.Sluys.  
Commandant van H. Ms. Herlog Hendrik. と記載されている(史料5)。

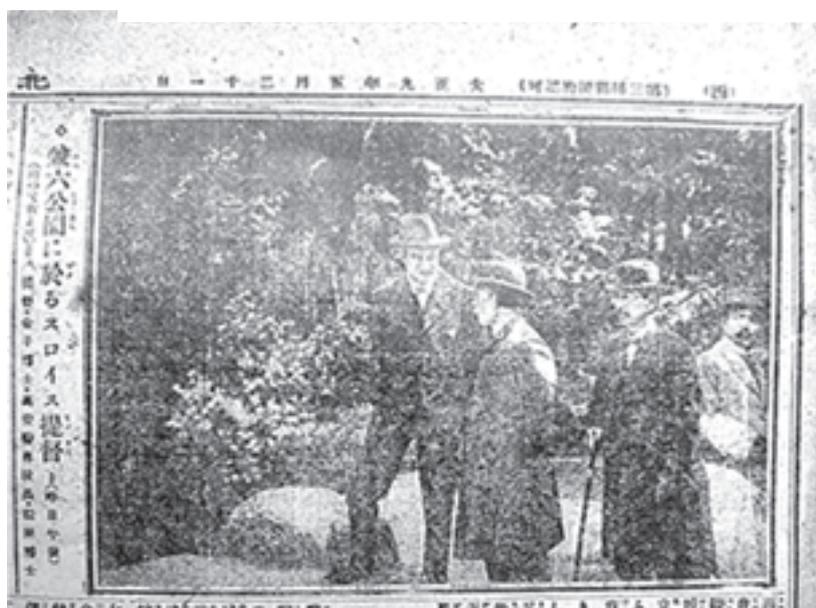
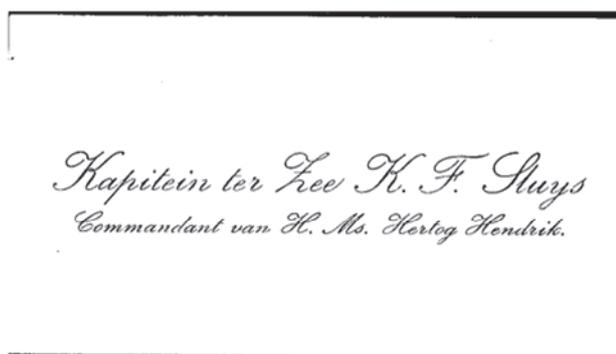


図23b. スロイスの長男 L.H.F. Sluys の兼六園を訪れた時の写真。右より金子治郎教授、高安右人医学校長、松原博士。(北国新聞記事、大正九年五月二十一日、マイクロフィルム、県立図書館蔵)(12)。

この時に L.H.F. Sluys は父親が植物学の講義で使用した「オーデマン著，オランダの自然史．植物編」（彩色植物図鑑）（金沢大学附属図書館蔵）に，植物図の横に学名とオランダ名を記入したのは父親と母親（スロイス本人及び夫人）であることを筆跡から証明した（13）．

\*武谷俊三

福岡藩の出身で，オランダに留学していた．伍堂卓爾と知り合い，契約交渉ではオランダ語の通訳として臨んだ．スロイスの来日の際の同行して帰国し，金沢に着いた．医学館では通訳として勤めた．結婚して姓が原田となった．

\*馬島瑞謙

会津藩の留学生で，ドイツに滞在していた．スロイスに同行して帰国し，金沢に着いたが，その後の消息は不明である．

\*ボードウィン

Bauduin, A. F., (1820-1885)はユトレヒト陸軍軍医学校の眼科の教官でスロイスの恩師であった．1862年に初来日して長崎・養生所で医学教育をした．1867年の再来日では大坂府立病院の医学教師，東京・東校で医学教育に携わった．

\*ドンダース

Donders, F. C., 当時はボードウィンと共にユトレヒト陸軍軍医学校の眼科の教授であった．ボードウィンとの共著の生理学書がある．その後，脳科学の転向して，大きな業績をあげた．

Donders, F. C. & Bauduin, A. F.,

Handleiding tot de Natuurkunde van den Gezonden Mensch, ten gebruik

Bij het onderwijs aan 's Rijks Kweekschool voor Militaire Geneeskundigen.

D. I. Algemeene Natuurkunde, 1. AFD. Leerder stofwisseling.

C. van der Post Jr., Utrecht en C. G. van der Post, Amsterdam, 1851.

（金沢大学附属図書館蔵）

がある．第Ⅱ巻は1853年刊行された．ボードウィンは本書を用いて，長崎養生所で「病原学」の講義をした．

現在．オランダにはドンダースの名を冠した脳科学専門研究所がある．

Donders Institute for Brain, Cognition and Behaviour, Radboud Universiteit, Nijmegen. (Donders Center for Cognitive Neuroimaging.)

\* ハラタマ． オランダ陸軍軍医学校卒，スロイスの2年先輩にあたる．

長崎精得館舎密学教師，大阪舎密学局教師，明治2－3年．

舎密局では舎密学，究理学の講義を行う．

\*\* 浅妻富之助 加賀藩大属，外国教師受入係．

\*\*\* リトルウッド．英国人英語教師，伍堂卓爾により雇用契約がされて来日した教師の

一人，金沢への旅の途中で天然痘の発症により，大聖寺で死亡した．（契約の由来は伍

堂卓爾の項を参照).

\*伍堂卓爾 (1844-1918)

伍堂はスロイスの雇用契約のためにオランダ・アムステルダムに行った人であり、伍堂の「一世紀事」によりスロイスの雇用契約について詳しく知ることができる(2)。スロイスの金沢滞在中はオランダ語の通訳をした。

幼名亀太郎、晋格、文久二年二月に知則、通称を春閣。明治5年5月に卓爾と改名、号石譚、字は「啓甫」。弘化元年四月二日に金沢・小立野字亀坂にて生まれる。父は又晋齋、母房子の第二子長男である。父は能美郡五軒堂村の出身で、加賀藩筆頭家老本多家の医師、九世一十一世に仕えた。本人も本多播磨守医師と名乗っていた。嘉永五年九月豎町に移転、明治十二年に仙石町に移転した。安政二年四月十二歳の時に明倫堂に学ぶ。安政五年二月十五歳の時に家老本多の江戸勤番のために出府、父(又晋齋)の随行に伴い江戸に出た。医師石川桜所(元貞)、緒方洪哉のもとで蘭語を学び、蘭方に接した。安政六年二月に金沢に帰る。文久二年二月十九歳、京都の町医師新宮涼民(順正書院)に入塾して医学を学ぶ。文久三年六月江戸町、幕府立(西洋医学所)種痘所に入塾して専ら蘭書を学ぶ。加賀藩奥医師石川元貞に随い江戸に出る。元治元年七月に金沢に帰る。同年十一月金沢町医師州崎愿吉長女錦子と結婚(二十二才)した。

慶應元年七月西洋形帆船(啓明丸)で、私費で同行し七尾港から長崎へ向かい、七月に着く。フランス人語学教師につき仏語を習う。慶應二年六月長崎済美館で仏語学助教となり仏語を教える。慶應三年五月長崎精得館へ入塾し、マンسفエルト及びゲールツに就き医学を習う。慶應四年一月肥前国長崎裁判所病院薬局方を申し付けられる(二十五才)。慶應四年九月年限満期につき金沢に帰る。同年九月本多家医師となるが、長崎へ再遊学の許可を得て、十月に戻る。同十月長崎裁判所当直医となり、同年十二月事故のために依願免職し帰国するが、状況良くなく再び陸路長崎の戻る。長崎医学校に入塾、長崎病院当直医となる。

明治二年三月金沢藩軍艦奉行岡島喜太郎が藩命で欧州行きとなり長崎に来る。佐野鼎、関沢孝三郎、吉井保次郎が随行する。伍堂は仏語通弁となりこれに加わる。加賀藩より洋行を命じられたことにより、長崎病院当直医を辞任した。明治二年四月三日米国船「コスタリカ」号で長崎港を出港、明治二年四月五日に上海に着く。卓爾は洋服着用し、和服、大小刀は返送した。同八日英国船で上海を抜錨し、同十三日に香港に着いた。貨幣価値の急落により持参した資金では全員の洋行は不可能となり、伍堂と吉井が洋行することになった。岡島、佐野、関沢は帰国した。同十六日に香港を出港、二十三日に新嘉坡(シンガポール)に寄港、ピナング(Penang, マレーシア)港寄港、五月一日ポエントゴール港(錫蘭島, スリランカ)着、同六日に出港、同十六日に亜佃港(アデン)に着く。同二十二日に亜刺比亜(アラビア)の蘇士港(スエズ, エジプト南岸港)に着く。スエズ運河は工事中であった。同二十四日カイロを経て亜歴港(アレキサンドリア)に着く。同二十九日にマルセイユ港着、六月二日に汽車にてリヨンを経てパリに到着した。パリ滞在3日間で先に留学していた黒川誠一郎に合う。六月六日ロンドンに着き、チャ

エリンクロスホテルに投宿し1週間滞在した。翌日、先にイギリスに先に来ていた稲葉助五郎の寓所を訪ねた。そこには神戸清右衛門、不破与四郎も同居していた。彼等に藩命の趣を伝えた。加賀藩軍艦奉行稲葉助五郎は学生4名（神戸清右衛門、不破与四郎、黒川誠一郎、馬嶋健吉）とともに慶應四年十二月に渡欧していた。（中略）

同年六月に伍堂はオランダ・ユトレヒトの町に到着した。馬嶋健吉、武谷俊三、赤星研三の三人は同居していた。自分もこの家に一時同居した。半月後にオランダ陸軍軍医総監ファン・ハツセルト氏（A. W. N. van Hasselt）\*が直ちに余を尋ねて来た。その後毎月1回は必ずハツセルトの訪問があった。普国（ドイツ）留学の会津藩学生馬嶋瑞謙、蘭・ドルトレフトに留学の長藩村田亀太郎も時々ユトレヒトに来て寓居に寄宿した。卓爾は一人で別の下宿に転居して、語学教師を呼びオランダ語を学び、毎朝乗馬学校で乗馬術を習った。明治二年八月、ドイツ・ギーゼンのアデレン氏がアムステルダムに来て、金沢藩の為の医学教師雇入の契約をするために会合を開くことの通知があり。アムステルダムに出府して、馬嶋瑞謙と武谷俊三に条約通弁を依頼した。神戸清右衛門もロンドンより来てこの会合に参加した。

1869年9月22日（明治二年八月上旬）にアムステルダムで、同国陸軍一等軍医ペイ、ア、スロイス氏（P.J.A. Sluys）を金沢藩に雇入れの契約を結んだ。スロイスは一ヶ年後に赴任し、日本到着の日より起算して3ヶ年の契約期限とする。金沢では医学校に於いて医学生徒を教授して、病院で内外患者の治療に従事する。月給は洋銀400弗と定めた。日本国の一港に到着の日より給与して、旅行支度金として月給2ヶ月分を前借して旅費にするとして片道洋銀700弗を支払い、金沢に於いては住家を貸渡すことをその契約の内容とした。

伍堂は語学修業を続けたが、夥多の学費を払って留学するのは価値なきことを悟り、大に慷慨嘆息して止まなかった。「余もまた国家に対して国賊の罪を免れ難し。同藩の留學生は悉く皆帰国せしめ藩政の徒費を省き、藩下人民一般に必要な教育法を考えて教師数名（英語学、理化学、鉱物学、機械学）を雇い入れ、各科に必要な教育材料を購入して、速やかに帰国する」ことにした。余熟々目下日本国より欧州諸国に留学する学生の景況を観察するに、学事に熱心勉勵するもの少なく、多くは不品行を極め、その口述とする処語学に熟練するには勉めて婦人と交際を親密にするにありとなす。余概景況を看て憤慨に堪えずとあり、留学中の学生の早急な帰国を迫った。

アデレンには教育材料、語学教師の買い入れと雇用を依頼（囑託）した。明治二年九月下旬に伍堂は帰国の途についた。パリで黒川誠一郎に合い、3日滞在後にリヨン、マルセーユに出て、英国便船で地中海、紅海、インド海、シナ海を経て、同年十二月二十八日に長崎に帰国した。長崎で本多播磨守（均政）が金沢城二の丸で暗殺された訃報を承けて、驚愕、愁傷、落胆、狼狽、惘然と強いショックを受けた。急遽、長崎より神戸に移り、陸路で昼夜兼行して明治三年一月三日に金沢に到着した。直ちに藩庁に出頭して、学政所大属岡島喜太郎、同岡田与市に今回の渡欧について詳細に報告して、謹慎・蟄居した（これは伍堂の独断でスロイス以外の4名の外人教師の雇用の契約をしたから

であった)。明治三年二月三日に学政所より呼び出しあり、伍堂は金沢医学館副教師を申し付けられ、スロイスの雇入れの件は藩庁により了承されたが、他の教師の雇用については資金が不足のために沙汰止無なきとなり、鉱山学教師デッケンと英語教師リトルウォードだけが雇入れとなった。その結果、理化学のドイツ人リッテルは大阪舎密局（理化学学校）に、英人機械学教師（ハイデ）は兵庫製鉄所の雇用となった。

明治三年四月三日より十一月まで加賀藩医学通弁御用として長崎へ派遣された。（明治三年二月金沢医学館副教師被申付け、同年四月右服教師被免、医学通弁修業のため長崎に被差遣、同年十一月右通弁修業被免。）明治三年十一月に金沢藩医学館文学四等教師分課医学通弁掛に命じられた。前に触れたスロイスの横浜到着には港で出迎えた。明治四年三月にスロイスの到着により、講義の通弁となり、明治四年十月十日に金沢藩医学館文学三等教師、分課医学通弁掛、明治五年四月に石川県金沢病院医員勤務、医学所教授兼医学通弁、明治七年四月金沢変則学校理化学・教授被申付されたが、明治七年九月には依願被免職した。これはスロイスの帰国にあわせた退職であった。

明治七年九月（31才）陸軍軍医副に任ぜられた。（中略）。同二十八年三月任陸軍一等軍医正、同年八月 広島陸軍予備病院付被免。大本営付被仰付、台湾へ出張、同年同月台湾兵站軍医部長被仰付、同年十二月蕃熱に侵され帰京した。同二十九年三月右被免休職被仰付となった。明治三十一年四月十六日に金沢・尾山病院院長に着任したが、明治三十四年三月には院長を辞任した。大正七年八月十日に没した。享年75。（2）及び（9）、（史料6）。

\*ファン・ハッセルト（A. W. M. van Hasselt, オランダの毒物学研究の第一人者、ユトレヒト陸軍医学校教授。ホルトルマンの各自中毒学講義はハッセルトの中毒学書を使用した。スロイスの雇用契約に加わったオランダ側の代表であった。

\*リッテル H. Ritter (1820-1874)

ドイツ人で伍堂により雇用契約され、加賀藩で化学を教えることになっていたが、財政的に困難となり、明治三年十二月から大阪舎密局でハラタマの後任として理学教師として雇入れられた。化学及び物理学の講義を行った。彼の講義は翻訳されて、明治七年に文部省から『化学日記』『物理日記』として出版された。ところがその内容はスロイスの舎密学、究理学の講義の内容よりも劣るものであった（14）。明治四年にリッテルは東京に移り、大学東校で教壇に立ったが、天然痘に感染して明治七年十二月に没した。横浜外人墓地に葬られた。

第3項. スロイスの医学講義：

スロイスは先に触れた様に18科目の講義を一人で行った。生徒の藤本純吉と藤井貞為、稲坂謙吉等が筆記した全ての講義の記録“講義録”が残されているために、現在、当時の講義を目にすることが出来る。この様に当時の総ての講義録が完全に保存されているのは唯一金沢医学館でのスロイスの講義と後に触れる金沢医学所のホルトルマンの講義のみであり、わが国の西洋医学の導入の過程を詳細に示す貴重な医学史上の史料であり、また明治初期の洋学史を研究するためにも必須の文献史料である。次にこれらの講義録の一部を紹介する。

「究理学」(物理学)

A. Ganot, “Elementary Treatise on Physics Experimental and Applied,  
tr. by E. Atkinson, third edition. (1868)が底本として使用された。

スロイス口述、藤本純吉「究理学」では、卷之一は力学、運動学、熱学、物性学、卷之二は物性学、音響学、磁気学、電気学、卷之三は電気学、卷之四は光学であり、電磁気学の割合が大きかった。従来の我国の物理学史では、大阪舎密局のリッテルの物理学講義『物理日記』が最初の近代物理学であったと記載されているがこれは誤りである。スロイスにより最初の近代的物理学の講義が行われ、ここで最初に「電磁気学」講義が行われていた。大阪舎密局のリッテルは電気・磁気学の講義は行っていない(1)。スロイス口述・藤本純吉筆記「究理学・卷之三」からモールス電信機による通信機の配線図を示した(図24)。本図はMüllerの物理学書から引用されていた(2)。

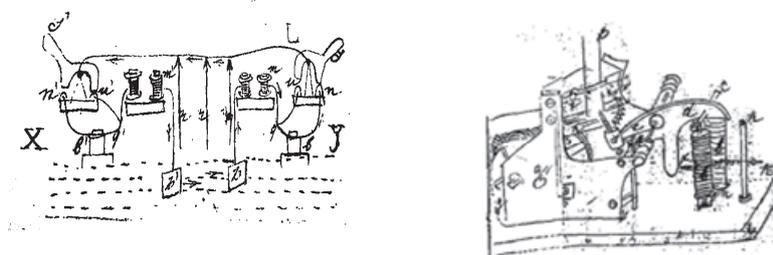


図24. スロイス・「究理学・卷之三、電磁気学」のモールス式電信機による通信の図。金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。

図 2 4 a. X, Yナル二箇ノ結合シ  
タル「スタシヲン」ノ図.

m = 受信機の電磁石. n = 送信機の電健.  
b = 電池

図 2 4 b. モールス書記伝信  
即圧器. (モールス受信器)

b = 電磁石, c = 鉄棒.

二台のモールス電信機での通信回路図 (図 2 4 a) である. *Electrische telegraaf*. であり, 最初の発明はウールステッドによって為された. 図 2 4 b にモールスの書記伝信即圧器 (モールス電信機) を示した.

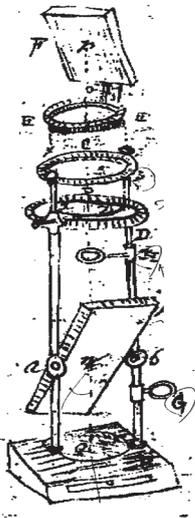


図 2 5. スロイス「究理学」卷之四  
光学からネーレンベルグの偏光器の図  
(左) (3) (金沢市立玉川図書館近世史  
料館蔵), と同器の写真 (右).

(金沢大学資料館蔵)

光学では光の性質の一つとして偏光の講義を行った. 光は進行方向に全ての角度に振動している. その中から一定の角度の振動面を持つ光—偏光—を取り出すことが出来ることを, 図 2 5 のネーレンブルグ偏光器を用いて説明した. 後に触れるが, ホルトルマンは糖類の溶液による偏光面の回転—旋光性の講義をしていた. また, 分光学では, キルヒホフ—ブンゼン分光器 (図 2 6) の構造と機能を説明して, 舎密学ではわが国で初めてのナトリウムスペクトルの輝線を用いてのナトリウムの高感度分光分析法を講義した.

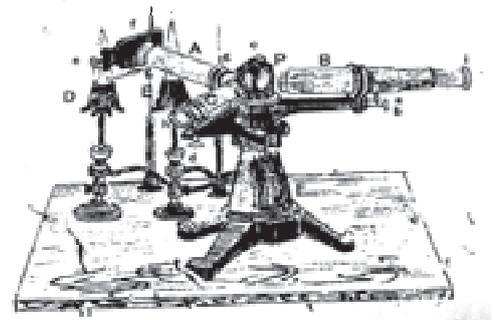


図 2 6. キルヒホフ・ブンゼン  
氏分光器.

スロイス究理学講義録の図 (4)  
(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)

## 「舎密学」(化学)

Miller, W. A., *Elements of Chemistry, Theoretical and Practical*, London, 1864. を底本として最新の化学を講義して、63種の元素の取り上げていた。特に分子式、化学式の表記では、わが国で最初に現在使用されている方式と同じ表記法を教えた。例えば、水の分子式は、ハラタマは OH であり、リッテルは  $H_2O$  と講義していたが、スロイスは  $H_2O$  と教えた。また、酸類、例えば硝酸を  $HNO_3$  と最初に教えていた(5)。無機金属のナトリウムでは、その炎色反応を説明して、図26の分光器を用いてナトリウムの輝線を観察して、極微量のナトリウムを定量することができること(分光分析法)を講義した。さらに、基礎的な結晶学の講義を行った。次ぎにその一部を、藤本純吉の講義録から記す(6)。

### 第一 Regelmätige of Reguliere Stelsel (正形系統)

図27は正八面体結晶のモデルである。

此系統ハ三箇ノ同大ナル軸ノ互ニ垂線ニ位シタルモノナリ 此系統ニ属スル

単一ナル結晶ハ Cubus of Hexaeder (Zesvlak) (六面体) ,

Octaeder (Ocktvlak) (八面体) , Rhombendodecaeder

(Twaalvlak) (斜方十二面体) , Tetraeder (Viervlak) (四

面体)ナリ此結晶系統ニ従テ diamant, loodglans (硫化鉛) ,

zwavelkies (硫化コバルト) , Keukenzout (食塩) , alui

(明礬) , granaat (黒鉛) 結晶ス。(各図は略す)

と説明がされた。

この結晶学の講義はわが国で最初のもものと見られる。

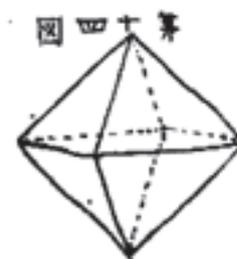


図27. スロイスの結晶学の講義から正八面体結晶のモデル。

この化学講義はわが国草創期での最初の近代的化学講義であり、大阪舎密局でのリッテルの化学講義『化学日記』は1860年代初期の古い化学であった。

## 「薬剂学」(付録の部)

天然水の分析法の講義が行われた。スロイスは Fresenius, R. C. の定性分析書、*C. R. Handleoding tot de Qualitative Chemische Analyse* (1857) を用いて天然水中に含有される無機金属イオンおよび陰イオンの硫化水素を使用した

「系統的定性分析法」の講義をした。これはわが国最初の天然水の系統的分析法の講義であった。本書には「長崎・東衙官許」と「壮猶館文庫」の印影が残り、加賀藩が安政年間にすでに長崎で購入したこと、壮猶館に架蔵されて「壮猶館蔵書目録」に記載されていた書籍であることを示している（7）。

### 「動物学」講義

Lubach, D., “Erste Grondbeginselen der Dierkunde,” (1870). を用いて講義した（8）（図28，左）。わが国で「動物学」という言葉が最初に使用されたのは前に触れた医学館規則（明治三年二月）であり、「動物学講義」「植物学講義」と使用していた。続いてスロイスの本講義（明治四年）で「動物学」を使用した。明治七年五月に大田美農里の訳校で「スロイス氏講義『官許動物学』石川県学校蔵梓」が出版された（10）。本書は「動物学」と印字されたわが国最初の刊行書籍である。（図51，86頁参照）



図28. スロイスが動物学講義で底本として使用した Lubach の『動物学入門』（左）（8）と藤本純吉が筆記した講義録「動物学」全（9）。

（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）

スロイスはこの動物学の講義では、人からアメーバまで、即ち脊椎動物から単細胞生物までの総ての動物種を網羅していた。特に「ナメクジウオ」をわが国に最初に紹介したのはスロイスであった（11）。藤本筆記「動物学」（9）（図28，右）から次ぎにナメクジウオの項を示す。

第八等 狭心魚「レプトカルジー」 *Leptocardii, Amphioxus lanceolatus*

「此等ハ唯一属一類ノミナリ. 即チ「アムフィオキユス ラムセオラーチユス」(鎗上魚ノ義ナリ.) 是レナリ. 諸脊椎動物中ニ於テ其発生最モ下等ノモノナリ. 是レ骨格ヲ具セス. 脳髓ヲユウセス. 唯一條ノ索状物ヲ以テ椎柱ニ代フ。」(以下略)

この説明は Lubach のテキストの記述の翻訳と同じである。

この講義の底本は明治三年(1870)にオランダで出版されたものであり、講義は翌年の明治四年に最新の情報を基に行われた事も注目すべきことである。この動物学書には「金沢県医学館」の印影が残されている。当にわが国の動物学史上の最重要な書籍である。

### 「植物学」

本講義では Oudemans, C. A. J. A. 『オランダの自然史, 彩色植物図譜』を植物分類学の底本として使用し, その植物図版を生徒に示して講義をしていた(12)。図29はこの講義に使用したチョウセンアサガオの図であり, 葉と額の上に学名 *Datura stramonium* と書き込まれている。

図29. スロイス「植物学」講義で使用した

Oudemans の『彩色植物図譜』の図.

第四種 *Datura stramonium* L.

講義録には, ヨウシュチョウセンアサガオ,  
此種ノ花ハ白色ニメ漏斗状ヲナシ大ナリ.  
其实ハ「ドースフリフト」ニシテ無数ノ針  
ヲ有ス. 是四弁ヲ以被開ス. 其实中黑色ニ  
メ腎臓状ノ種子ヲ有ス. 花蓋ハ円柱状ニメ  
長ク其端五角ニ分裂ス. 是毒草ニシテ薬局ニ供ス.  
と筆記されている。講義では多くの薬用植物の紹介がされた。

ここにスロイス夫人  
によって記載された  
学名が記るされてい  
る。



現存の『オーデマン植物図譜』(金沢大学附属図書館蔵)はスロイス夫妻が寄贈したものである(13)。前に触れたように, 後年(大正九年五月二十日)にオランダ艦隊が来日した時に, H. Ms. Herlog Hendrik 号の艦長であったスロ

イス氏子息 (Lee H. F. Sluys) が金沢医学専門学校を訪ねた際に、学名を記載したのは父と母であることを筆跡から鑑定して、その事を表紙裏に書き入っていた。

### 「生理学」

本講義では Hermann, L., “Grondbeginselen der Physiologie van den Mensch. (1864)を底本にした。著者ハーマンは当時ヨーロッパでは著名な筋肉運動生理の研究者であった。明治五年の「スロイス生理学」講義録 (14), 卷之中には「有機体ノ発生成長及び終焉, 即チ生殖機」の項に,

#### 第一 生殖種類

「英国ノ生理家 darwin氏ノ説ニ由レハ父母柔順ナレハ其兒モ亦タ柔順ナリ, 一馬ニ奔走ノミヲ教ユルニ, 其馬兒亦奔走スヘリ, 獵犬兒ハ生ナカラ獵攫ニ長シ, 乳牛ノ兒ハ乳汁ヲ分泌スルコト必多シ (以下略).」

と記され、ダウインの「種の起源」を紹介していた。これは東京医学校での明治七年のヒルゲンドルフの動物学講義、さらに明治十年の東京大学でのモースによる「進化論」の講義よりも先に行われた講義であった。当にわが国で最初のダウインの進化論の紹介であった。

医学館に架蔵された生理学書に Donders, F. C. & Bauduin, A. F., “Handleiding tot de Natuurkunde van den Gezonden Mensch. (1851)がある。本書の著者は、スロイスがユトレヒト陸軍医学校で生理学、眼科学を習った教授である。そして、ボードウインは長崎医学所で医学の教授を行った人でもあり、大阪府病院の設立に関わった人でもある。本書はボードウインが長崎医学所での生理学講義の底本として使用していた。その講義録は「原生学」として残っているが、内容はごく初歩的なものである。スロイスはドンダースの研究成果をいくつも紹介していた。

### 「病理学」(普通病理学)

本講義では病気の原因論で環境に起因する病気と家系に起因する病気との説明があり、家系による内因性病の一つに「遺伝病」を上げていた (15)。当時はまだ細菌による伝染症は発見・確認はされていなかったために、結核などの

細菌感染症の幾つかが遺伝病として取りあげられていた。その講義録から次ぎに示す。

#### 第一 内因

之ヲ更ニ區別スル事左ノ如シ

##### 其一 遺 伝

是レ其父母向前患ヒシ所ノ疾病ヲ其子之ヲ遺伝シ又其素因ヲ遺伝スルヲ云フ。

此遺伝病即先天病ニ属ス者ハ結核勞 = tuberculosis, 梅毒 = Syphilis, 歴節痛 = jicht, (中略) 又遺伝ニ由テ男子ノミニ来ル疾病アリ即 Ichthgosis=魚鱗状皮膚疹, Bloederziekte=出血シ易キ性ヲ有スル者及ヒ hypospadiasis=亀頭ノ后下面ニ尿孔ヲ開ク者等ナリ。(以下略)

この様に、当時は結核や梅毒など細菌や微生物由来の病気も、原因不明のために遺伝病に入れられていた。しかし、血友病 (Bloederziekte), Hypospadiasis, Ichthgosis を男性にのみに起きる疾病 (伴性遺伝病) として上げていたことは注目される。

ここで特に注目されることは、金沢で明治五年に「遺伝」、「遺伝病」という言葉が使用されていたことである。スロイスが Erfelijk ziekte と述べたものを、通訳が「遺伝病」と翻訳していたのである。この言葉の「生まれ」の由来を調査したところ、嘉永二年に大坂・適塾で緒方洪庵らが「病学通論」で、「病気の由来区別」で Erfelijk ziekte を「遺伝病」と翻訳していたのが最初と見られる。一方、長崎では「遺疾」と翻訳されていた。適塾で医学を学んだ大田美農里、田中信吾らが Erfelijk ziekte を遺伝病と翻訳したものと考えられる (16)。

#### 「健康学」(Hygiene)

本講義では、食生活、住居、市街・施設、伝染病予防、職業病などからなり、生活環境を衛生的に清潔に保つことの重要性を解説した (17)。この講義の稲坂謙吉の筆記した講義録を、明治十一年十月に後記する明治天皇の北陸巡幸の際に、東京日日新聞記者であった岸田吟香が目にして、その内容の新鮮さに驚き、明治十二年十一月に東京で『スロイス口述・稲坂謙吉筆記、岸田吟香校閲・スロイス衛生新編 上, 下』として東京江島喜兵衛より発行・出版した (18)。

岸田は序文で次の様に記した。

(前略) 近来養生の書，陸續として出版に相成候へども，

何れも西洋書の翻訳にて，中には我国の風土習慣に合わぬ点多く，また主に飲食の事のみを論じたるなど，兼而ものたらぬ心地いたし居候処，右此書は家庭の築造より学校・兵營・牢屋の事まで，庖厨の器具・厠・市街など我が国の風俗人情に拠りて実地に施すべき衛生法の緊要なる処を，短簡なる文章にて記されたるは，実に国文有益の好書に存じられ候。

(以下略)

と，スロイスの衛生学の講義を評していた。本講義はユトレヒト陸軍医学校の衛生学の講義を行ったペルジーレ(L. F. Persille)の「健康保全理論の手引き—軍人および船員への適用」(1851)と後継者のティンマーマン(M. R. Timmerman)の「衛生学の手引き—特に軍人と船員に関して」(1864)によって見られている(19)。

なおペルジーレの原書の初めの七章が，慶應三年(1861)に久我克明により翻訳されて『三兵養生論』(百兒悉利著)として出版されていた。市街論では，冷水浴の健康への効果と沐浴場の設置を勧めて，海水浴を推奨した。「夫レ海水浴ハ慢性諸病ノ奇薬ナレハ 海浜ニーツノ浴場ヲ開クヘシ，是レ亦タ実ニ仁政ノ一ナリ」と述べ，「藩庁モシ余カ説ニ一血セハ和蘭海水浴場ノ結構造作亦タ為ニ詳解スヘシ」と結んでいる。伝染病予防論ではその原因となる伝染毒を *miasma* と *contagium* に二分して，前者に天然痘，麻疹，百日咳等の例をあげ，後者に人体間の感染毒として梅毒，狂犬病毒，牛痘などをあげていた(17)。

## 「解剖学」

フレスの「解剖学」が使用された。

Fles, J. A., Handleiding tot de Stelselmatig Beschrijvende Ontleedkunde van der Mensch. (1866) 第二版。

本学図書館には「金沢藩医学館」の印影のあるものが2冊架蔵されている。藤本純吉筆記の「解剖学」(上，中，下)の序には次の様に書かれている(20)。

解剖学序

スロイス氏は科ヲ講スルヲ，初メ生徒ニ説キ示シ曰ク。

解剖ハ入学ノ基礎ニシテ最大緊要ノ科トス。然ドモ其事精密ニシテ，記聞ニ属シ且理論甚少ナキヲ以テ，生徒ニ於テハ従来之ヲ迂遠ナリトシ厭悪スル者多シト雖ドモ是科ノ学ニ疎ケレバ，病理ヲ弁シ治術ヲ施スニ臨テ，基礎ナクシテ堂屋ヲ構フガ如ク，昧乎トシテ手ヲ下ス事能ハザルベシ。(以下略)

解剖学の基礎医学としての重要性を説いていた。

講義録には解剖学的用語が和訳，オランダ語，ラテン語で記述されている。津田淳三は次の様に記していた(20)。

スロイス氏此科を講ずるや側らに真骨及洋製人体且つ詳密なる図画等ありて且つ講し且つ指南す。故に学者一目して瞭然たるを得べし。もし此等の器械なき時は仮令講説許多の詳密を尽くども徒に妄想するを免れざるべし。今、此編は唯之を以て解剖を学ぶべしと云うには非ず。唯真物或いは此等の器械について学ぶ者の記憶に供する為めのみ。

津田淳三誌

骨部解剖，関節部解剖，筋部解剖，内臓部解剖，脈管部解剖，神経部解剖等からなるものであった。「洋製人体」はキンストレーキであり，スロイスはこれを用いて解剖学の講義をしていたことは注目される。

### 「各自病理学」

七卷からなる講義録の内容は，卷一 呼吸器諸病，卷二 血行器諸病，卷三 消食器諸病，卷四 肝臓，胆道，脾臓，尿器および男女生殖器諸病，卷五 神経系統諸病，卷六 皮膚諸病，卷七 運動器械諸病，急性インヘクシー諸病から成っている(21)。

注. インヘクシー = infectie, 伝染, infectieziekte 伝染病

急性インヘクシー諸病(伝染病)の講義録は明治十年に「スロイス氏講述，馬嶋健吉通辯，津田淳三校正，益智館(金沢)『スロイス氏講述内科全身病論』明治十年二月二十三日版權免許，石川県病院蔵版として出版された(22)。その内容は，其一 麻疹，其二 猩紅熱，其三 痘瘡，其四 牛痘，其五 水痘，風疹，其六 発疹チヒユス，其七 腸チヒユス，其八 復帰熱，飢饉熱，其九 悪性咽頭炎，一名ジフテリチーセ咽喉炎であった。津田淳三が序文を書いている。

る。本書は石川県の衛生課からの命令により出版したものである。

藤本純吉の各自病理学巻之一の講義録の始めに「Dr. F. v. Niemeyer は獨乙国チュビンゲン大学の医学総裁兼博士教頭なり」明治六年五月三日発講と記載されていることから、

本講義の底本は、

Niemeyer, Feliz von, Leerboek der Bijzondere Pathologie en Therapie, vooral met het Oog op Physiologie en Pathologische Anatomie. Tweede druck, H.C.A. Campagne en D.B.Centen, Tiel en Amsterdam, 1868.

である。本書は1868年版の1巻, 2巻および1869年版の1巻, 2巻が本学図書館に架蔵され, それぞれに「金沢藩医学館」の印影がある(23)。この事は, スロイスは最新のテキストを用いてこの講義を行っていたことを示している。その中から目立つ疾患をあげると、

巻之一呼吸器諸病には喉頭内結核性潰瘍, 喉頭内癌腫などが, 肺臓諸病では肺労, 肺臓癌腫, 胸膜諸病では胸膜結核, 胸膜癌が記載されている。巻之二血行器諸病には心臓肥大, バセドー氏病が, 心嚢諸病には心嚢結核, 心嚢癌, 大血管諸病では大動脈癌が記載されている。巻之三消化器諸病では口腔諸病では口腔内の梅毒性諸病, 水癌, 胃諸病では胃癌, 慢性円形さく穿通性胃潰瘍, 胃痙攣, 腸管諸病では十二指腸穿孔潰瘍, 腸癌, 胶膜病では胶膜の結核及び癌が記載されている。巻之四では肝臓諸病では肝癌, 梅毒性肝炎, 脾臓諸病では脾臓の慢性腫起, 脾臓の結核, 癌腫, エヒノコクシー, 尿器諸病では腎癌, 腎臓結核, 腎臓の先天性変状及び変位, 副腎諸病にはアジソン氏病, 膀胱諸病では膀胱の結核および癌, 膀胱結石, 巻之五では神経系統諸病が記載されている。本講義ですでに多種の癌および腫瘍についての講義をしていたことは注目される。

### 「薬剂学」

明治五年に薬剂学の講義が行われ, 藤本純吉が筆記した講義録一卷, 二巻, 三巻が残されている(24)。この講義録には驚くべきことが記されている。スロイスは本講義で引用した薬用剤の原料植物の学名, オランダ名, 舍密性有効成分名, 効能, 使用容量を詳しく講義していた。特に重要な「舍密性有効成分」

の記載は当時の多の薬剤書や薬物学書には未だ記載されていなかったことから生薬学史, 薬剤学史, 天然物化学史, 医学史的に注目される事柄である(25).

「薬剤学巻一・有機性薬剤・上」「同 巻二・有機性薬剤・下」に記載された有機性薬剤の舎密性有効成分の数は62点におよぶ.

「薬剤学 = *materies medica* 「メジカ」は「メジキユス」即 医と云う意にして「ドクトオル」と異なり, 即「メジキユス」は広く他学を学ばずして只医薬のみ用いる事を学び, 后此官を受る者を云うなり」と記している. 薬剤学の道は, 第一其物品は何体に属すか, 第二舎密抱合(化学的性質), 第三薬理学性作用, 第四病理作用を知ることである.

薬剤学は, 甲. 生理学および病理学の面と, 乙. 薬局学, 製剤学の面がある.

巻之一には有機性薬剤を170種, 巻之二では130種, 合計300種が記載され, 巻之三には無機性薬剤177種が記載されている.

有機性薬剤は収斂剤, 苦味剤, アルコール性薬, 揮発性動物性薬, 龍腦性薬, 複雑花性植物薬(頭花植物由来の薬剤), 辛辣薬, バルサム剤, 油性華累斯性薬, 強烈剤, 興奮下剤, 駆虫滋養剤等に分類されている. これらの薬剤の内の舎密性有効成分の説明が掲載されていた. 植物性アルカロイドも多数含まれている.

1. 収斂剤. 没食子 *Gallae quercinae* = 蘭 *galnoten* には, 多量の ローイシユール = タンニン酸があり, [効能] 水を以て煎熱し, 慢性皮膚病, 慢性潰瘍, 創傷の醗膿の過剰にアン法として用いる. 又白帯下, 慢性淋病に注入剤として用いる.

2. 苦味剤. 蒲公英, 花・葉・根(たんぽぽ)は, 有効成分は苦味物質「タラキサシー子」(*Taraxacine*)であり, [効能] 肝臓, 脾臓の腫張, 硬結腸, 胃熱, 間歇熱, 黄胖病, ヒステリー等に効ありとある.

3. 含単寧酸苦味薬. 水楊皮 *Cortex Salicis* = 蘭 *wilgenblast* (母植物は *Salicis alba* ヤナギ科) には苦味剤 Salicine(サリシン) および <sup>タンニンサン</sup> 単寧酸等がある.

[効能] 消食機衰弱, 間歇熱, 酸敗液腺病, 矢荀児口苦等に効ありとある. サリシンはサリチルアルコール配糖体であり, 加水分解して酸化するとサリチル酸が得られ, 古くから生薬として使用されていた. サリチル酸の名は *Salix* に由来している.

4. <sup>アルカロイド</sup> 垂兒加魯伊泥麻醉剤 *narcotica alkaloidea*. <sup>コルクヒクム</sup> 格兒矢屈謨は *Colchicum*

autumnale (イヌサフラン)よりえられ、その有効成分は「コルヒシー子」(コルヒチン)であり。[効能] 優性<sup>リュウマチス</sup>両麻質私。水腫但し<sup>リュウマチス</sup>優麻質性血液変調に由る者に効あり。

5. 龍腦生薬。龍腦，樟腦 Camaphora は Laurus camphora (クスノキ) であり，この樹およびその根葉より龍腦が得られる。無色透明軟靱なる結晶あるいは無形の薄片にして，<sup>サントウ</sup>竄透性香気および燃焼性の味あり。また水に溶化せず。酒精，<sup>エーテル</sup>英的累，脂肪および揮発油には好く溶化し，通常温度に於いて空气中に蒸発す。[性能] 消食器を障碍し，血行及び神経機能を興奮し，生殖器および尿器の機能を静鎮す。西洋において僧徒はこれを袋に盛り常に陰具の近傍に懸るすとある。

当時，西欧の薬剤も，東洋の漢方薬の薬剤も，多くが植物有効成分によるものが多くあった。ところが西洋では化学，薬学の進歩により薬用植物の有効成分の分離と有機化合物としての研究が行われ初めていた。この情報をいち早くわが国に伝えたのは他ならぬスロイスの本講義であった。さらに驚くべきことはスロイスの後任で来沢したホルトルマンの行った有機化学講義では多数の天然有機化合物—例えば幾那アルカロイド類 chinchonine, chinidine, kinovazuur, マチンの strychinine, brucine, コヒーの caffeine, カカオの theobromine など—の分子式 (元素組成式) を教えていた。金沢医学館，医学所および医学校では薬剤の有効成分を「舎密性有効成分」として化学，薬学の立場から全国で初めて講義していたと云っても過言ではない (26)。

### 「スロイス氏方叢」

本講義の講義録には散剤 46 種，丸剤 32 種，煎剤 71 種，塗擦並び外敷及び注射剤 33 種，含嗽剤 16 種，点耳剤 6 種，点眼剤 11 種，膏薬 9 種，灌腸剤 11 種，疥癬療法剤 1 種の処法が記載されている (27)。当時すでに注射剤として患部用 1，腔内用 2，陰門用 1，尿道用 2，鼻用 1，皮下注射 1 種が上げられていた。それぞれに使用された薬剤は前に触れた薬剤学で紹介されたものおよび新たな薬剤もある。

外科手術論 (外療道具)，各自外科学，眼科手術学抄，軍陣治療書，徴兵検査法，

各病論要，有機舎密学抄は略す。

医学館には蘭語辞書 Bomhoff, D. "Nieuw Groot Woordenboek der Nederlandsche Taal", Lyden, (1858)が五冊架蔵され，通訳や生徒達が使用していたと見られる。

医学館規則の中に通弁生（通訳）に関するものがあり，  
「其十四 通弁生ハ，不断和蘭語ヲ勉強習熟し，予カ講義ノ時，其一名必ス出頭スヘシ。又廻診ノ時モ同様ナルベシ。」  
とあり，通訳にも勉強をすることを求めている。

この様に，スロイスは当時のヨーロッパの最新の医学関係書籍を用いて金沢医学館で講義をしていたことが分かる。その調査の結果によると，我国で最初に講義された事柄が多く含まれていることもスロイスの講義の大きな特筆すべき事であった。明治初期に本格的な医学教育が行われたのは，長崎，東京，金沢の3カ所であり，スロイスの行った講義を生徒達が筆記した講義録は金沢医学館での医学教育が最も先進的なものであったことを示している。

スロイスの人物評は，金子治郎によれば，「兎も角スロイス氏は人格者で，信望もあり，又一種冒しがたい威厳もあった。仕事も中々能くやった。僅々三年間に理化動植物学から，生理，病理は無論，内外科，眼科等，枢要なる学科は皆一人で講義した。それが通弁を介するのであるから，講義時間が二倍かゝる事は論をまたない。それにも拘わらず，着手した学科は大抵皆完結し，而かも内容は簡潔で，能く綱領を尽くしてある。」と好評であった。これはこれまでに記した各講義の内容の調査によっても頷けるものである（28）。

スロイスが行った講義の翻訳記録のうち，次の三科目が刊本となった。

『スロイス氏講義動物学』初編一，二，明治七年，太田美農里筆記，

石川県学校蔵梓（10）

『スロイス氏講述内科全身病論』一，二，明治十年（図30）

石川病院蔵版，馬島謙吉通弁，津田淳三校正（22）

『衛生新編』上，下，二卷，明治十二年

稲坂謙吉筆記，岸田吟香校閲，東京・白楽園上梓（18）

後に触れる石川県甲種医学校では『スロイス氏講義動物学』が動物学の教科書として使用された。

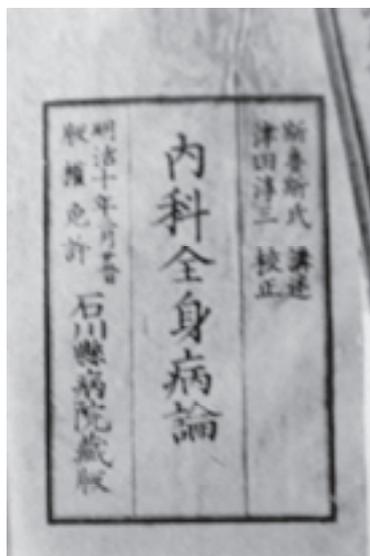


図30. 『スロイス氏講述内科全身病論』

第1巻, 明治十年二月, 版權免許.

馬嶋健吉通弁, 津田淳三校正,

石川病院蔵版(22).

金沢市立図書館近世史料館蔵.

スロイスの医学講義の参考のために, 当時医学館に架蔵されていた医学書のリストおよびオランダ・ユトレヒト陸軍医学校より刊行された医学書—多くはスロイスにより金沢医学館の持ち込まれたと見られる書籍であるが—のリストを添付した(表4)(29, 30). 多くの医学書がドイツ, フランスなどで出版され, それがオランダ語訳されていたことがわかる. このことは当時のヨーロッパの医学が各国の間に幾らかの違いはあったが, 進んだ医学は直ちに当該国の言語に翻訳されて流通して, 医学士, 医師, 学生により読まれたのであり, ヨーロッパの国々の医学教育にはそれほど大きな差は無かったことを示している.

表 4. 金沢医学館のオランダ医学書と自然科学書(28, 29).

金沢医学館のオランダ書		大学図書館登録番号
ユトレヒト陸軍軍医学校刊行の医学書		
Fles, J. A.	Handleiding tot de Stelselmatig, (1866) フレス氏解剖書 拾冊之内, (二冊あり) (ユトレヒト陸軍軍医学校・人体解剖学教科書)	491.1-F-1
Fles, J. A.	Handleiding tot de Stelselmatig, (1866) 和蘭解剖書、(ユトレヒト陸軍軍医学校・人体解剖学教科書)	0965/62
Hasselt,	Handleiding der Vergiftleer, (1855-58)	326.3-H-1-1
A. W. M. van	ten gebruike bij het onderwijs aan 'sRijks Kweekschool voor Militaire	326.3-H-1-2
Van Den Broek,	Handleiding der Scheikunde, (1855)	430-B-3
J. H.	Ten gebruike bij het Onderwijs aan 'sRijks Kweekschool voor Militaire	7/d/17.
Van Den Broek,	Handleiding der Scheikunde, (1857)	430-B-4-1
J. H.	Ten gebruike bij het Onderwijs aan 'sRijks Kweekschool voor Militaire	7/d/15
Van Den Broek,	Handleiding der Scheikunde, (1857)	430-B-4-2
J. H.	Ten gebruike bij het Onderwijs aan 'sRijks Kweekschool voor Militaire	7/d/16
Goffres, M.	Handboek van de Leer der Verbanden en Verband-instrumenten. (1858)	494.25-G-1
Goffres, M.	Handboek van de Leer der Verbanden en Verband-instrumenten.	494.25-G-3
Goffres, M.	Précis Iconographique de Bandages, Pansements et Appareils. J.-B. Baillièere et Fils, Paris, 1866.	494.2-G-1
Donders, F. C.	Handleiding tot de Natuurkunde van den Gezonden Mensch,	491.31-
Bauduin, A. F.	ten gebruike bij het onderwijs aan 'sRijks Kweekschool voor Militaire	D-1-1
	Geneeskundigen. Afd. 1. Deel; 1-2, C. Van der Post Jr., Utrecht en Amsterdam, 1851.-1853. 2v, 22cm 「養生所医局蔵」「金澤藩医学館」 ドンデル氏 ボウドエン氏人身究理 (ユトレヒト陸軍軍医学校・人体生理学手引書)	8/C c/79
スロイスが持参したオランダ自然史図譜刊行。植物学講義に使用した。		
Schlegel, H.	Natuurlijke Historie van Nedderland. De Vogels II. (1868)	462-N-1
Herklots, J. A.	Natuurlijke Historie van Nedderland. De Weekdieren en Lagere Dieren II. G. L. Funke, Amsterdam, 1870.	462-N-1
Krecke, H.	Natuurlijke Historie van Nedderland. Het Klimaat. G. L. Funke, Amsterdam, 1869.	462-N-1
Lubach, D.	Natuurlijke Historie van Nedderland. De Bewoners. G. L. Funke, Amsterdam, 1868.	462-N-1
Vollenhoven, S. C.	Natuurlijke Historie van Nedderland.	462-N-1
S. Van	De Gelede Dieyen. G. L. Funke, Amsterdam, 1868.	
Schlegel, H.	Natuurlijke Historie van Nedderland. De Zoogdieren, G. L. Funke, Amsterdam, 1870.	462-N-1
Oudemans, C. A. J. A.	Natuurlijke Historie van Nedderland. De Flora, 1-2. G. L. Funke, Amsterdam, 1869.	462-N-1
Schlegel, H.	Natuurlijke Historie van Nedderland. De Kruipe Dieren, G. L. Funke, Amsterdam, 1870.	462-N-1
Schlegel, H.	Natuurlijke Historie van Nedderland. De Visschen, G. L. Funke, Amsterdam, 1869.	462-N-1
すべての書籍に「金澤藩医学館」の印章が捺印されている。		

注記. (金沢市医師会医政史, 第一章沿革, 第三節 四名医伝による.)

大田美農里

諱 真章, 幼名 莊藏, 良策, 登, 美農里. 号 雪嶽.

天保二年(1831)金沢で生まれる. 父耕民は医を業とする. 加賀藩家老村井氏に仕える. 母は宮崎氏, 父耕民に和蘭医折を聞き, その精竅(きょ)に服す. 竊に(ひそかに)世運の推移を觀破して, 良策を加賀藩蘭医学鼻祖黒川良安に托して学ばせる. 時に15才, 句読を藩校督学浅野栗斎, 長井葵園に習う. また, 野本某につき高嶋流砲術を学ぶ, 嘉永三年21才で, 大坂で緒方洪庵の適塾に入り, 橋本左内, 村田蔵六(大村益次郎), 大鳥圭介と同窓となる. 塾監となる. 嘉永六年の米艦浦賀の来航, この時意を決めて江戸に移り, 和蘭兵学家手塚律蔵の家に寓して, 造船, 兵術を学ぶ. 脚疾を得て郷に帰る. 医師となり医生の育英に従事する.

安政四年壮猶館蘭書翻訳校正方となり, 次いで教授方になる. 文久二年軍艦方御用兼務を命じられて函館に赴く. 慶應二年壮猶館医学教授方御用兼務仰せ付けられ, 明治元年卯辰山養生所棟取となる. 美農里は率先して洋装を着て, 自ずからの旧風を刷新せん事を期す. 東京本郷藩邸仮病院棟取となり, 本藩侍医三等上士になる. 明治三年権少属, 金沢医学館文学三等教師, 四年命により大坂兵学寮に赴き, 医務を調査する. 帰って文学二等教師となる.

廃藩置県により医学館の閉鎖, 私費を投じて貧病院を建て支弁する. 明治七年, スロイス口述, 大田美農里訳述『動物学』上を石川県蔵梓で出版. わが国で最初の動物学書となる.

八年石川県金沢病院主務医を申し付けられる. 九年八月病院院長兼医学所学長, 十一年十月明治天皇北陸ご巡幸の際に, 医学所へご臨幸の際拝謁を賜る. 金子三百疋の御下賜る. 十二年病院新築落成し金沢病院と云う. 十三年老を以て致仕する. 病院, 医学校御用掛心得を以て随意出院事を視る, 年報を辞謝する. 十六年地方衛生会委員を命ぜられる. 二十九年四月十六日藍綬褒章を賜る. 金沢医師会長, 石川県医会会長, 北陸聯合医会委員長, 大日本私立衛生会金沢支会副会長, 第五回関西聯合府県共進会特別委員, 日本赤十字社石川支部商議員に囑託. 三十二年勲旨を以て, 宮内大臣より賞状を受ける. 大坂, 奈良での宴会の招待, 三十四年70に達するを以て業務を謝して静居自娛, 四十二年九月皇太子殿下北陸行啓の際に, 医事功労者として特別拝謁を賜たが, 体調不良で出席出来ず. 四十二年十月二日没, 享年79, 野田山に葬る.

津田 淳三

本姓長屋, 権作の次男, 文政七年生, 幼名作次郎, 代々横山家に仕える. 天保十年16才で津田家を嗣ぐ. 性質は強記豪宕敢えて人に屈せず. 同年家を脱して京師に赴き, 儒家の学僕となり, 苦学する. 年25となり大坂・緒方洪庵の門に学ぶ. 居ること3年, 故ありて退塾し, 中国, 九州に遊歴して, 各地で教鞭をとること数年にわたる. 緒方氏の塾頭が欠員となり, この席に就く. 3年間学業大いに進み, 金沢に帰る. 藩より五人扶持を賜る. 貧困生活を送る.

藩命を受けて「セバストポル戦記」を翻訳する. これが認められて藩侯より慰労金を若干うける. 藩主の侍医となる(十人扶持, 外科兼帯). 壮猶館では軍器取調, 蘭書翻訳, 蘭学生教授に就く. 慶應三年卯辰山養生所棟取, 戊辰戦争では長岡に従軍医として行く.(武士の子女をナースと

して、初めて教育して、戊辰戦争に参加させた.)

明治三年医学館創設にあたり教師となる。権少属、明治五年四月医学館閉鎖、同志と協力して自費で継続す。明治八年八月石川県金沢病院主務医、産を作る甚だ多し。日夜読書し、倦ば歌舞演劇を観、以て自ら娛む。

「脉論」を著す。蘭書の翻訳するもの数巻に及ぶ。殊に漢籍に長じ詩文をも善くす。医界に竭せし功績は少なくない。明治十年老を以て辞職す。明治十二年十月十八日没す、享年56。野田山に葬る。黒川良安の妹りせが淳三の妻、二男一女、二男は共に夭折す。娘雪子は稲坂謙吉と結婚する。子秀栄が津田家を嗣ぐ。

「脉論」津田淳三著、安政戊午刊行、五年(1858)風乎軒蔵。

ヒュヘラント、モスト、モール、コンラジ、コンスの医書から抜粋してまとめ本書とした。

Most, G. F., Encyclopedia Woordenboek der Praktische Genees-, Heel-, en Verloskunde, (1835-38)

## 田中信吾

ユタカ ハツ  
諱は「温」, 発次郎, 一庵, 信吾, 号 球外。

天保八年(1837)十一月二十二日小松に生まれる。父・鴻儒・湯浅木堂、母は武部氏娘の第二子であったが、田中謙斎を嗣ぐ事(養子)になり、田中姓となった。一男三女あり。住所石川県金沢市下新町38番地(明治十八年)士族。当月47年3ヶ月。

19才の安政三年(1856)より文久二年(1862)まで、7年間大坂・緒方洪庵の適塾で蘭学・医学の修業を受けて、塾長となった。加賀藩により召され金沢に移り住み、壮猶館において医書翻訳・校正方を兼任した。

安政二年(1855)十月に津田淳三ら九名により、金沢・堤町に某の持家を借りて私立種痘所を開き、牛痘種を越前福井藩士半井氏より得て知人の児童に接種した。

文久三年(1863)藩命により蒸気船發揮丸の医務官となり、航海などに乗船した。慶應元年(1865)八月に金沢藩医学教師を拜命した。藩に「今当に医学は漢蘭異なり、まさに<sup>はいたい</sup>廢類して振るわず。宜しく医学校と病院とを新設して、以て外国教師を招き、生徒を教え、病者を治し、因つて泰西の医学の情状を引くべし」と建議した。藩主はこの建議を受けて、卯辰山に養生所を建設した。

明治元年正月に卯辰山養生所を興し、棟取総務を拜命して、医師の教育と病者の診療を行った。

明治元年五月に戊辰戦争で越後路に従軍医師として出陣し、監軍に従い野戦病院に勤め医務を督した。同七月に帰県した。明治二年藩主の侍医となり、同三年正月の権少属に任命され、医学館教師をも拜命された。さらに同年十一月に文学三等教師(月俸三十三石)と、分課医学館掛を拜命した。同四年十月文学二等教師を拜命した。四年一月「病院二等医申付候事。兵学寮医官為引合登坂」四年三月「兵部省江御用二付至急上坂申付候事」とあったが、兵部省より再次医官として徴用されるが「力を父母の邦に<sup>つく</sup>効すはすでに志を朝廷に致す所以なり。」と固辞した。

明治四年(1871)より同七年(1874)まで、4年間金沢藩雇入れ医学教師和蘭陸軍一等医官スロイス氏に従い医学修行した。明治五年四月廢藩置県：不幸にして凡ての計画を齟齬にして医学館もまた

閉鎖す。田中信吾、津田淳三、大田美農里等は決然として立ち、医学館舎を石川県より借受けて、私財を抛ってスロイスの給与を支払い、<sup>きつきゅうじんすい</sup>鞠躬盡瘁し、以て医学館の維持に努めたことにより、僅かに之までの計画を廃絶すること無く済んだ。当時、私立金沢医学館の門標にはこの3名の名を挙げていた。明治六年四月に石川県より、石川県金沢病院委任され、月俸五十円を拝命した。

スロイス講義録「呼吸病三」胸膜病，付録鼻腔病，病学各論三卷（本人筆記）

同「消化器病，腸病，各自病理学七（本人筆記）。

同「尿器諸病，腎臓病，膀胱諸病」，各自病理学九（本人筆記）

同「健康学 完」（本人筆記）がある。

さらに、同八年七月に石川県金沢病院主務医を任命され、月俸六十円を拝命した。明治八年(1875)より十二年(1879)まで5年間、金沢病院医学校教師和蘭医学士ホルトルマン氏に従い医学修業した。

ホルトルマン講義録「局所解剖学卷之三」（本人筆記）

同「プラクチャーセシエミー 全」（八年十一月九日発講）（花雪生 筆記）

明治九年一月に田中らにスロイス雇用に対する補助金と銀盃が下賜された。同九年八月に金沢医学所学長兼金沢病院主務医に就き、月俸七十円を拝命した。同年十月に富山分院院長を拝命した。

同年十二月に医学並本病院成立方につき年来格別尽力神妙の至り付き月給三十円の増加があり、都合百円を拝受した。同年十二月に月俸百円に増加した。明治十年(1877)十月富山医学所教長兼務を拝命した。明治十一年二年内務省（卿）より内外科医術開業免状(612号)を受く。

明治十一年十月に富山病院及び医学所新築落成す。同十一年十月に明治天皇の北陸御巡幸の節に富山病院・医学所において金円拝戴した。同十二年(1879)十月に金沢医学所長兼金沢病院用掛を拝命した。十二年十月十六日付けで医務取り調べのため上京を石川県より命ぜられた。

同十三年二月帰県して金沢医学校の教則を大いに改正した。これはあらたに文部省の発布する「医薬学校通則」に対応するためのものであった。同十二年十一月に金沢病院が殿町に新築落成した。十三年二月に富山病院新築の際にフラフ（旗）等差しだした為に木盃一箇を拝受した。同院には樹木を寄付して御褒賞を拝受した。十三年八月に七尾医学所の開設に付き、教則等の取り調べ方を拝命した。十三年十月金沢病院長・同医学校長兼務拝命した。十三年十月に石川県地方衛生会委員を拝命した。十四年二月にコレラ病流行に際し、患者貧困者に金円を施供したことに御褒賞を拝受した。十四年六月には石川県より事務格別勲励に付き金50円を慰労金として支給された。同年十一月には月俸120円に増加した。同年十二月二十六日「石川県少書記官正七位」、同日月俸120円給与。同十五年六月二十六日職務格別慰労金20円を給与された。同十六年一月十三日に石川県より御用有のことで上京を命ぜられた。全国衛生事務詰問会、於東京。出席。同年三月には御用済みで帰県した。これは石川県甲種医学校への昇格に関する件であったと見られる。

明治十七年三月に石川県甲種医学校が発足した。当初校長は田中信吾であったが、後に岡山県甲種医学校より着任した中濱東一郎によりとって替えられた。「たまたま当路の者と議して合わず。乃ち辞職す。是に於いて同志と謀り尾山病院を建てる。衆推して院長と為す。北陸私立病院も亦翁に始まる。」とある。明治十七年五月十五日「医術開業免状」（奉職履歴・内務省免状，第2443号），医籍に登録される。内務卿山県有朋。同十七年十二月に依願本務並兼官を免ぜられ、甲種

医学校を退任した。これはドイツ医学教育を本校で教育すること、病院は分科制を布くことによる事などから、諍いが生ずる事になったのが原因である。

同十七年十二月十一日に多年の医学校に従務尽力したことにより、石川県より慰労金目が賜られた。退職慰労金 250 円下賜。

明治十八年(1885)一月に私立尾山病院を博労町に設立して開院し、院長に就いた。職員は元金沢病院長同医学校の同僚達であった。(オランダ医学を学んで来た医師達とその弟子達であった。)

この病院を開院すると患者は四方より其門に蝟集して忽ち隆盛に赴いた。

明治十九年九月石川県より地方衛生会委員を命ぜられる。同二十年五月同上。金沢医事協同会および金沢医会会長、医術の研究、医風の改良を奨励せり。

同二十二年五月金沢医学会が設立され、名誉会員となる。明治三十一年三月院長を辞任した。後任に伍堂卓爾が院長となる。石川県に伝染病患者の死体の土葬を廃止することを建議し大に努める。学校の分裂を避けるために、加賀・能登の四カ所に医学校を置く事に反対した。

晩年は病を得て医業を止めて、家にあつて詩文に耽りまた筆硯を弄して以て余生を送った。

明治三十三年(1900)一月二十三日没す。享年 64。小立野・天徳院に葬る。明治三十四年十月に天徳院に「田中信吾翁碑」が建立されたが、昭和五十五年六月に撤去廃棄された。

赤祖父一知、適塾門下生田中信吾の碑銘文について、『適塾』第 27 号、69-72 頁、平成 6 年 12 月 1 日。田中信吾履歴書、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。「金沢大学医学部記念館資料室収蔵展示品目録」、平成 21 年 3 月。269-314 頁。収蔵品調査プロジェクトチーム編。関係資料あり。

### 第3章. 石川県立金沢病院とホルトルマンの医学教育

#### 第1項 石川県立金沢病院の開院

明治六年三月に石川県より種痘施行の方法が示され、五月に医術開業者の調査を行い、金沢町病院に於いて其の術を検査させた。七月に金沢病院の一部を区画して種痘所とする種痘規則を定め、県下の全児童に種痘を施した。九月には卯辰山病院を貧病院とする規則を設けた。

廃藩置県後は半官半民の管理形態であった医学館は、明治八年に石川県により金沢病院は支援されることになり、名称を「石川県立金沢病院」に改めた。「石川県病院並貧病院規則」によると、「患者の帯刀は許されない」こと、「外人医師の診断をうけるには特別の料金を支払う」こと、「何事にも通訳の必ず立ち合いが在る」ことなど当時の特殊な事情が記述されている。

八年二月には政府は医師開業のための免許制度を新たに制定した(1)。

文部省第十一号布告には

「本年二月新ニ医術開業ヲ請フ者ノ手續ヲ三府ニ達セリ 右ハ後来医学ニ就クモノ、志向ニ関係アルヲ以テ左ニ其要略ヲ揚ク 自今新ニ医術開業ヲ請フモノハ試業ヲ遂ケ 開業免状ヲ授クヘシ 但シ従来開業ノ医師ハ試業ヲ要セス 府庁ニ於イテ住所姓名年齢等詳細取調其員数ヲ受ケ 開業スルモノト混雑セサル様処分致シ 文部省へ開申スヘシ(明治八年三月廿五日) 試業科目 (甲) 物理学化学大意 (乙) 解剖学大意 (丙) 生理学大意 (丁) 病理学大意 (戊) 薬剂学大意 (己) 内外科大意 産科眼科口中科等専ラ一科ヲ修ムルモノハ各其局部ノ解剖生理病理ノ大意及手術ヲ検メ免状ヲ授クヘシ 試業ノ上府庁ヨリ文部省ニ具状ヲ受ケ之ヲ本人ニ交付スヘシ」

と書かれ、医術開業試験は東京府、京都府、大阪府で行うこと。医術開業を申請するものはこの試験を受けて合格の上、開業免状を授受すること。試験の内容は六科目の大意であった。なお、従来からの開業医は試験を受ける必要はなかった。この布告により、これ以後は正規の医学教育を受ける事なく開業医となることは不可能となった。

八年六月に石川県は金沢医学館を県に完全に移管して「石川県金沢病院」と「金沢医学所」とした。その時に次の学則及び病院規則が制定された(2)。そ

の一部を引用する。

#### 医学教則大意

凡ソ医ノ事業タル特ニ病患ヲ治スル而已ナラス人身ノ健康ヲ保全スルヲ亦大ナリ，人身健康ヲ失スレハ百般ノ事業従ツテ以テ廢ル。(中略)是ニ於テ衆庶勦力更ニ蘭人ヲ備ヒ大ニ医学ヲ發揮セント欲ス，其ノ学科タル須魯伊斯在務中確定スル者ニシテ，<sup>コトゴトク</sup>咸ク彼ノ欧州医学ノ正序ヲ踏ミ教ユルニ通弁ヲ以テシ早ク實際ノ用ニ適スルヲ趣意トス<sup>イヤシクモ</sup>苟モ医タラン事ヲ欲シ此学ニ入ル者ハ宜シク志向ヲ確定シ他日成業ノ期ニ大ニ衆庶ノ寿命ヲ托セントス。

#### 教 則

一．此学ニ入ル生徒ハ小学校卒業ニ準スル者ニシテ年齢十六才以上三十才以下トス。

一．医学教科ハ本科予科ヲ設ケ入学ノ生徒先ツ予科ヲ修シ後チ本科ニ入ル。

予科 1 年間 (語学，数学，地理学，歴史学)， 本科 5 年間

とあり，ほぼスロイスの医学教育の科目を教授していた。

略則よる 2 年間の医学教育も行っていたが略す。

#### 石川県病院および貧病院規則 (3)

##### 第一款

##### 役員分担事務章程

病院役員ヲ十等ニ分チ各自院内ノ事務ヲ分担セシメ外ニ書記勘定ヲ置ク則分担ノ事務ヲ制定スル左ノ如シ

##### 分担

主務医，通弁医，当直医，副直医，病室取締，薬局長，薬局監察，司薬，主器，副主器，監事，外ニ書記，勘定

以下の章に各役員の分担が記載されている。一部を掲げる。

##### 第三章

一．毎日午前八時出頭患者ヲ治療シ午後二時ヨリ診察招待ノ患者ヲ廻診スヘシ

##### 第五章

一．通弁役ハ外国教師ニ随従シ誤診ナク原語ヲ通スルヲ要ス

薬局長

## 第二十一章

- 一、薬品ハ厘毛ノ差大ニ其効用ヲ異ニスルノミナラス生命ニ関スルノ害アルカ故ニ 薬局長タル者深ク茲ニ注意シ 司薬ノ取扱フ薬劑ノ製練及ヒ配合ヲ逐一点検スヘシ

## 第二十二章

- 一、劇薬ハ他薬ト混セス 必ス別筐ニ納メ之レカ開闔ハ薬局長及ヒ薬局監察ノ外司ラシムヘカラス  
(以下略)

第二款では病院病人心得が記載されているが略す。第三款では貧病院病人心得が記載されているが略す。

この様にして県立金沢病院は始まった。八年七月末にホルトルマンが金沢に到着して、直ちにスロイスの医学教育を引き継ぐことになった。

ところが翌明治九年（1876）八月には、石川県金沢病院と石川県金沢医学所が分離されることになり、大田美農里が病院院長に就き、田中信吾が医学所学長に就いた。これにより、医学教育機関と患者診療機関が完全に分離した（4）。

明治九年六月には、医学所内に薬舗学科が設置され、生徒の募集が行われた。これが石川県での薬学教育の始まりであった（5）。（薬学教育の項を参照。）同年十月に富山・仙石町に石川県金沢病院富山分院が設置されて、田中信吾が現職で分院長を兼任した。さらに、福井には石川県金沢病院福井分院が設置されて、馬嶋健吉が院長に就いた。

この年十一月に医学館主務医津田淳三は老齡（五十四才）のために引退した（6）。（津田淳三の項を参照）。明治十年には両分院に医学所が併設され、富山分院は石川県富山病院となり、福井分院は福井病院になった。

第2項. ホルトルマンの着任と金沢医学所および金沢病院。

横浜にスロイスを見送りにきた馬嶋健吉は、スロイスと横浜の和蘭領事官と和蘭商社に新たなオランダ人教師の雇い入れの依頼をした。その結果、アムステルダム新聞に

「医師募集広告」となって掲載され、これに応募したのが、A. C. ホルトルマン Adrian C. Holterman (31 才)であった(図31)。彼は 1844 年にオランダ・ザイペに生まれ、1862 年からアムステルダムのカリニカルスクールで医学を学び、1865 年にハーレムで外科開業試験に、1867 年にオランダ医学国家試験に合格した外科を得意とする医師であった。明治八年七月二十九日(1875)に金沢に着き、早速スロイスの後任医学教師として金沢医学所および金沢病院での医学教育と患者の診療を行った(図32)(7)。

明治八年八月ヨリ和蘭国ドクトル ホルトルマン氏ヲ招聘シ スロイス氏ノ余業ヲ継カシム。通弁ハ馬嶋、原田ノ両氏ナリ。ホルトルマン氏ノ講義セシ学科ハ有機化学、眼科学\*、外科学\*、産科学、局所解剖学、中毒学、組織学ナリ、包帯学ハ津田淳三原書ヲ翻訳シテ生徒ニ授ケラレタリ(8)。

医事小言、医事雑集には、ホルトルマンの口授した小論説や最新の西洋医事新聞の抜粋がある。

ホルトルマンはこれらの講義の他に、実験舎密学、外科手術学、眼科外科学、眼科手術学、各自中毒学、脚気病論、各科各論、保爾篤児満氏方叢も含め14科目を講義した。現在、藤本純吉が筆記した14教科39冊の講義録が金沢市立玉川図書館近世史料館に保存されている(9)。これらの詳しい解説が津田進三により記されている(10)。

\* 「眼科学」とした講義はなく、「眼科外科学」と「眼科手術学」であった。「外科学」も同様に無く、「外科手術学」であった。



図31. ホルトルマンの写真。  
金沢大学医学部記念館蔵。



図32. ホルトルマンと金沢医学所  
教師(明治九年頃)。  
金沢大学医学部記念館蔵。

各講義科目については詳しくは後に触れるが、スロイス以上に講義の内容が非常に綿密であったことが特徴である。それらを藤本純吉らの残した講義録から容易に読み取ることが出来る。また医学校外での活動として、彼は尾山神社の神門(明治八年建立)に避雷針を設置するための設計をした。このことは医学所生徒であった田中義雄によって傍観され、その避雷針の働きについての説明を聞いていた(11)。また、神門上のステンドグラスの小室に常夜燈を置き、「石油ランプ」を取付けることを提案し、ロシア製の航海燈が取り付けられた。このランプの光は西の方角に流され、日本海の船からも確認されたとのことである。また、兼六園の金城霊沢の水の分析を、チオシアン酸カリウムを用いて行って鉄分が多く含まれることを示した。尾山神社との関係が深く、彼の三人の乳児の死亡(明治九年六月に二人、同十年八月に一人)の際に、卯辰山での葬儀は当神社の宮司によって行われた記録が「尾山神社誌」に記載されている(12)。

明治九年八月に、文部省の指導で教育機関「金沢医学所」と患者診療機関「金沢病院」に経営を完全に分離した。医学所校長および病院主務医は田中信吾が就いた。明治十一年(1878)十月三日に明治天皇の北陸東海巡幸で、一行は金沢医学所を訪れて、ホルトルマンをはじめとする職員と医学生達の出迎えを受けた。同所ではホルトルマンの指導のもとで医学生達(金子治郎および庄田喜太郎)によるキンストレーキを用いての御前講演が行われた。この事は明治十一年十月五日の「石川新聞」に報道され、ホルトルマンの感激の文章が原田俊三訳で本紙に記載されている(13)。この中で彼は、「医学所の若い医学徒が数年の短い年月で西洋医学を十分に取得し成長して、立派な西洋医学師となっている」ことを讃えている。現在、大手町の金沢健康センター前の松の木は、この時に卯辰山より苗木を移植した記念樹である。また記念碑も同所に建立された。明治十二年四月にホルトルマンは新潟病院医学所に移り、1年後に帰国の途についた。その後の事は不明である。

田中義雄は後に上京して東京の医学校で医学を学んだが、「余は東京に來りし頃大学の学生を始め其他の学生にして学ぶ所の物理学、動物学、植物学、解剖学等の教科書は簡略なるに一驚したり、故に当時の学生より尊敬を蒙る事其厚く、心私かに故山の母校を遙拝して恩師の高恩を肝銘拝謝せり。」と記している(14)。当時の金沢での医学教育は高度で充実したものであった事を示している。また、明治七年に医学校に入学してホルトルマンの教えを受けた金子治郎は次のように恩師を評している(15)。

「ホルトルマン 評」

和蘭の開業医で、相当学力もあった。そしてスロイスがまだ着手しなかった局所解剖学、組織学、有機化学、毒物学等を講義したが、余りに細密に過ぎ、至って学生を倦ましめた傾向がある。(中略)しかし生徒に対しては(教育は)頗る熱心であった。時に臨時講演を開き、本国から来た新聞、雑誌の新しい事柄を伝え、又体操課を設け、自ら垂鈴を操りて号令した。

大田美農里らの功勞により、金沢医学所は明治十二年六月に殿町(現・NHK金沢放送局の地)に「石川県金沢病院」が新築落成した。この機に医学所は金沢医学校に改称した(16)。

院長は大田美農里であったが、同年十月に田中信吾が医学校長と病院用掛兼任に就いた。同年十月に田中は医務取り調べのために上京を石川県より命じられた。同十三年二月に帰県して、医学校の教則を大きく改正した(17)。

明治十三年(1880)五月に愛知医学校よりオーストリア人教師ローレッツ Albrecht von Roretz が着任して、産科学・衛生学等をドイツ語で講義した。大井玄洞、丸山某が通訳を行った。ところが、彼の講義は僅かの期間であり、八月には山形県済生館に移った。ローレッツの講義録は残っていないが、製薬録として「老烈氏方叢」(藤本純吉筆記)が残っている(18)。

第3項. ホルトルマンの講義.

#### 「有機化学」

有機化学の基礎では、飽和化合物、不飽和化合物、実験式の説明、構造異性体(ブタンの異性体)、有機元素分析と分子式の確定を論じている(19)。

各論では多数の有機化合物を取り上げ説明した。また、フォルムアルデヒドの合成反応を、白金触媒を用いたメタノールの空気酸化で説明した。ここでは触媒を「感動」と表現していた。エーテルは「英的児」とエステルは「亜的児」と書いていたが、当時の有機化学ではこの2種の化合物は同じ種類に入れて扱われていた。

酒石酸の結晶には光学的性質(旋光性)の異なるものがある事、即ち右転回酒石酸(右旋性)、旋光性の無い酒石酸=ブドウ酸、左転回酒石酸(左旋性)があることを説明

した。さらに糖類，ブドウ糖，果糖，麦芽糖など糖類溶液の旋光度の説明にまで及んでいた。ナフターレンの構造，有機色素の合成の説明もあった。

特にケクレ(F.A. Kekulé von Stadonitz)のベンゼン構造モデルとして円形モデルを紹介していたことは注目される(図33)。これはベンゼンの構造が六角形モデル(1865)に移行する前のモデルであり，いわゆるへビやサルのケクレの夢伝説ではなく，これこそ「最初のベンゼンモデル」\*であった。これが1870年代のヨーロッパで認められていたモデルと見られる。

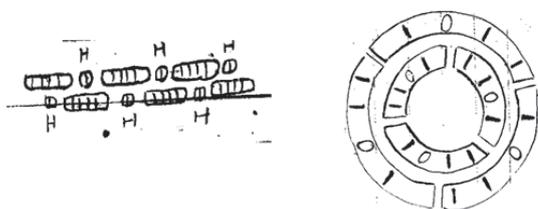


図33. ケクレの提出したソーセージモデルで描いたベンゼンの円形モデル(右)。金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。

本モデルの前のモデル(左)はスロイスが有機舎密学抄で講義していた(20)。金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。

円弧状の炭素原子モデルが互いに，単結合，二重結合で結合している。小型の楕円は水素原子の結合を表す。この円形モデルから，正六角形モデルへ進化したと考えられる。

\* 従来，化学史では6匹へビやサルが互いの尾を噛み合って繋がった夢語り記載されているが，これは後世に作られた伝説と見られる。ケクレは炭素原子を左図の様にソーセージ型に描き，有機化合物の異性体の構造を記載していた。例えばヘキササン  $C_6H_{14}$  の異性体の構造がある。

天然有機化合物では生理活性物質の分子式を多く紹介した。サリチル酸とその誘導体，インジゴとその誘導体，テルペン類(14種)，植物塩基(アルカロイド)3種，第二酸素含有アルカロイド(8種)，ストリキニーネアルカロイド(3種)キナアルカロイド(8種)，ヘマチン，胆汁酸に及んでいた。これらの化合物の多くはスロイスの薬剤学での生薬に含まれる舎密的有効成分であった(21)。

更に彼はヴェーラー(F. Wöhler)による無機化合物(アンモニアと炭酸ガス)から尿素の合成と，簡単な有機化合物から馬尿酸の有機合成をも講義した。

糖類の化学(単糖類から多糖類まで)，乳酸発酵(醗酵)，アルコール発酵，酢酸発酵の説明もされた。特にパスツールの新学説を紹介したのは注目すべきことである。

「醗酵作用ヲナス物体ニハ一種固有ノ分析性ヲ有スル窒素含有蛋白質状体ヲ含ムモノニシテ、此体ヲ含マザル時ハ自ラ醗酵シクハサル者也。コノ如キ蛋白質体ヲ醗素ニ Fermenten ト号ク。」また、「佛国ノ有名ナル理学家 Pasteur 氏一新説ヲ發明セリ。同氏ハ太タ貴重ナル發明ヲ為セリ。則チ雰囲氣中ニハ数百万ノ顕微鏡上動植物ノ Sporen en Kiemen ノ浮遊スルヲ發明セリ。」と記している。さらに、酵素として「ジアスターゼ」「ペプシン」の名前を挙げ、さらに 7 種の動植物蛋白質について記し、「蛋白質体トハ動物ノ体中ニ多ク存在スル処ノ窒素含有抱合物ヲ云フ者ニシテ、又植物中ニモ存在シ、殊ニ種子中ニ存在ス。蛋白質体ノ成分ハ未タ全く詳ナラス。但シ諸蛋白質体ハ大ナル『モリキュライレ』重ヲ有シ、又其成分未タ詳ナラサルノ理ハ其試檢甚タ困難ナレバナリ。」と記している。

酵母によるアルコール醗酵(発酵)。

「アルコール性醗酵ニ用ヨル醗素ハ小ナル「スウァム」ニシテ、所謂 *Cryptococcus cervisiae* 一名 *Hormiscium cerevisiae* ナリ。」と酵母の説明をし、「第二区分ノ砂糖ノ希薄液中ニ已上ノ「スウァム」ヲ容ル時ハ、其砂糖ヲシテ漸次ニ「アルコール」及第二酸化炭素ニ変セラレル事左ノ符号ニ於ケルカ如シ。

Suiker = Alcohol + Koolstofdioxyde,  $C_6H_{12}O_6 = 2C_2H_6O + 2CO_2$  と記していた。また、アルコール発酵は培養温度が二十五から三十度で、培養液にはタンパク質、アンモニア塩、リン酸塩を加えると酵母はよく繁殖すると説明した。

ここでパスツールの「生命の自然発生説」を否定した有名な実験(鶴首フラスコに培養液を入れて滅菌后、鶴首の先端を開放しておいても、培養液は腐敗しない。)も紹介した。

ホルトルマンの有機化学講義は Miller のテキストの part 3「Organic Chemistry」を使用したと考えられる。

「発酵作用ハ微生物ニヨツテ行ハレル」とするパスツール学説の紹介を明治八年(1875)に講義していた。これは 1857 年にパスツールが「アルコール発酵は生命現象である」ことを発見し、空気中の微生物の増殖或はその胞子の発芽・増殖することが食品の腐敗の原因であることを明らかにした 18 年後のことであった。

明治二十年(1887)に矢部辰三郎が「ばくてりあ病理新説」(22)を出版し、パスツール及びコッホの「病原細菌学」を初めてわが国で紹介したと藤野恒三郎は「日本細菌学史」に記している(23)。この事からホルトルマンの本講義は画期的なものであったという

ことが出来る。

以上、明治八年に始まったホルトルマンの有機化学の講義は、その内容の豊富な事、新しい事柄が取り入れられていた事は他に引けを取らないものであり、まさにスロイスの最新無機化学に続く優れたものであった。この藤本純吉の講義録『有機化学』は最新有機化学のわが国への伝来を示す重要な史料である(19)。

### 「実験舎密学」

天然水の系統分析「鉍泉検査法」を説明し、特にヒ素、アンチモンを微量分析(マーシュ氏検出法\*, Marsh's test)を詳述していた。これは当時、毒物として亜砒酸、砒酸、アンチモン化合物が特に注目されていたからである(24)。

\* ヒ素化合物を還元して気体の水素化ヒ素とし、これを導いたガラス管を加熱して熱分解すると暗黒色の単体ヒ素が鏡状に析出する。検出感度の高い分析法である。アンチモンも同様にして分析が出来る。

### 「普通中毒学 全」

本講義では、序論(総括)で中毒物質による神経誘導、物質の除去、蓄積と飽和について触れ、一般に中毒の種類には、毒殺、自殺、職業上の中毒、エコノミーセ中毒(商品による、食品による中毒)、テクニーセ中毒、メジシナーレ中毒(医薬品による中毒)、偽中毒があると分類して説明した(25)。

実地医学中毒学では、実生活環境での中毒を説明し、さらにその中毒物の毒性を減少して無毒化する方法を、また中毒を起こした後の治療法を学ぶものである。また、法律医学中毒学(法医学上の中毒学)では、「毒害セシ罪ヲ明瞭ナラシムルヲ主トス即チ法律医術中毒学ニ於テハ 毒殺サレシ患者ニ就イテ 學術ヲ以テ之ヲ明瞭ナラシム」とあり、次の6問に詳しく答えられることが必要であるとした。第一毒殺の有無、第二何で毒殺されたか、第三中毒薬のみか、あるいは既病によつての死亡の可能性は無いのか、第四中毒物を他人に頼み内密に服用したか否か、第五中毒物の量は、致死量か否か、第六如何なる方法或はルートで中毒物を送入したか等の問である。方法論では「病理学的証拠、解剖学的証拠、薬物の理学及化学的検査法、化学的試験結果の有無、化学的な特異的反応の徴候有無、仮性的な化学的反応の徴候、砒素・アンチモンに関するモレール(マーシュ氏)反応の徴候」をあげて、法律医学(断訴医学)と実

地中毒学の関係を説明した。

中毒の種類では、トキシコデナシミーセ区別の通論で原因物質によって炎症を起こした中毒、麻酔中毒、麻薬中毒、慢性中毒をあげていた。

その序文(総括)では、

毒物と言うものは、其極少量に由って死を催す(呈する)ものを云う。中毒物をラテン語では *Venea*、ギリシャ語では *toxika* と言ひ、此名に基づいて中毒学を *Toxicologia = Vergiftenleer* と言ふ。中毒に於いて、只其物質の性質に関してだけでなく、尚其量の大小よつて毒性のであるものであり。且つ或薬剤には *idiocijncrusie*(個人差)を起こすモノである。また患者の日常慣習或いは病の存在に由つても決まった量に成らなければ、その薬は毒性を發しない事もある。それを慣習的に使用する者においては、漸々其量を増加して、甚だ大量の麻酔薬を与えても、中毒を起さない事がある。(以下略) (読みやすくする為現代文とした。)

中毒学の概要の講義であつた。

### 「各自中毒学」

ユトレヒト陸軍医学校のハッセルトの「毒物学教科書」を底本として講義していた(26)。内容は砒素、アンチモン、水銀による中毒に関して詳述であつた(27)。

### 「産科学」

「保爾篤児満氏産科学」は卷之一～三からなり(28)、この講義は *Dr. Karl Schroeder* の 1872 年に出版された書籍に基づいて講義したと推定される(29)。卷之一では目次によると、第一綱では誘導編で、第一編骨盤論、第二編小骨盤及其軟部であり、第二綱では妊娠生理で、第一編卵及卵ノ發生論を教へていた。卷之二では、其二で子宮収縮種類及具法ウェーセ *Modus* 氏の *Contractionis*、第三では器械的分娩 *Mechanismus der Geboorte* を、卷之三では第五タング *Forceps* を用いる引き出し法、産科タングの歴史であつた。

*Schroeder* の書籍の5版は 1877 年(明治10年)発行となるから、4版の 1872 年版が使用されたと見られる。本書の 1880 年出版の6版は金沢大学附属図書館に架蔵されている。

「ホルトルマン医事小言」（明治八年八月四日開講）

次の5点が紹介されていた(30).

1. 石炭酸内外用法（カルボルシュール）

希釈水溶液を患部に注射，皮下注射，塗布などにより治癒する方法の紹介．止血薬，防腐薬，焼爍法，清潔剤として使用されている．石炭酸水による消毒法である．石炭酸消毒法はリスターにより1867年に発明された方法である．（明治元年）

2. ユラファー氏のアスピラートル

ガラス製アスピレーターを使用して，深い患部から膿液の吸収・除去をする．膿胸患者の治療，両睾非常劇性水腫の患部から水液の吸収・除去，乳房劇甚腫から膿液の吸い取り，他の治療例を紹介した．

3. エスマル氏切断法

前年に von Esmarch によって発明された駆血帯（止血ゴム管）を用いた人工貧血（駆血法）による患部の止血を行った切断手術を紹介した．

『智児曼斯氏外科総論』に詳しく記載されている(31)．

4. 体操運動

ホルトルマンは健康の維持のために，体操を指導した．

甲 第一操下垂せる両腕を側斜形とし，更に垂形とし，又側地平形とし，而め垂形に復す．（腕の運動の例である．）

甲乙丙丁 各10操よりなる体操である．

5. 視力障碍原因之学理

「総て視力を障碍するの原因は，眼球の形成する所の諸膜の病性に由て，その透明中間物を変質せしむるに由るなり．其の他視力を妨害する原因に左の三件あり．即ち refractie stoornis, Accommodatie stoornis en Astigmatisme なり．」とあり，屈折障碍，調節障碍および乱視の原因についての Donders の新学理の説明をしていた．

「組織学」

内容を次ぎに記載した(32)．

卷之一．通論 組織学ノ歴史，単純小孢子論（細胞論）．（總丁数百九）．

組織，器官，体論，（蜂窠組織，結締組織，筋肉組織，神経組織）

卷之二. 各論. 第一綱 皮膚, 腺, 皮膚ノ附属物. (總丁数百二十三)

第一 皮膚, 革皮. 結締組織, 皮下粘液囊, 弾力組織, 結締織小体, 平滑筋  
纖維, 皮膚ノ脂肪小胞子, 皮膚ノ血管等.

表皮. 粘液層, 角層, 表皮色(白色人種, 有色人種), 表皮ノ厚, 表皮發生およ  
び再生, 表皮發育.

爪. 爪床, 爪, 爪ノ顕微鏡上構造, など

毛髮. 毛髮ノ处在及び大小, 毛ノ顕微鏡上構造など.

皮膚ノ諸腺. 汗腺, 耳垢腺, 皮垢腺, 垢腺ノ精密ナル構造など.

筋系統.

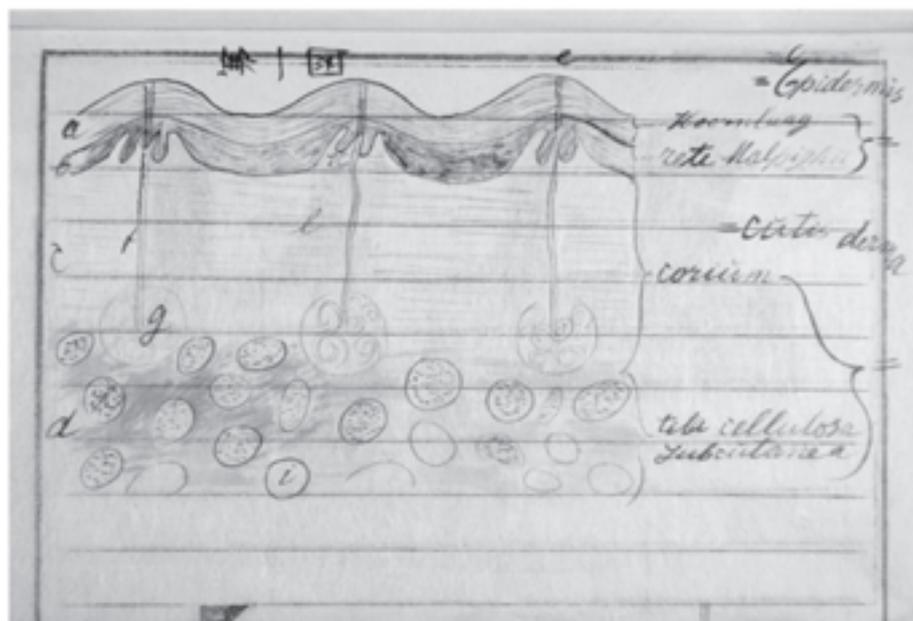
以上の項目より成っている.

特に組織学史を詳しく口述していた.

### 「組織学図解」

総数五十枚の組織図が描かれている(33). 内容は組織学に対応した図である. 一  
例を示す(図34).

図34. 表皮組織の断面図(Epidermis). 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.



### 「保爾篤兒滿氏方集」

医薬品の処方集である(34). 散剤60種, 煎剤並に浸剤60種, 点眼剤13種, 含嗽

剤6種，丸剤69種，水剤87種が記載されている。前に触れたスロイス方叢にくらべ，化学薬品—例えば重炭酸曹達—の使用が増えている。一例として，胃薬（水薬剤）としてペプシ子1匁，重炭酸曹達1匁，レーニワイン（赤葡萄酒）1グレイン 右毎食時ニセン宛とあり，蛋白質分解酵素ペプシンと重曹とワインとを処方していた。

生薬のみから化学薬品を医薬としての使用することへ替わって来ていたことを示している。

### 「局所解剖学」全六冊。（35）

卷之一．第一編 頭部．頭蓋及び顔面ノ「トポハラヒーセ区別（局所解剖学）」，で始まり，第二編では網膜論で脳髓，大脳，小脳，延髓等を論じている。卷之二顔面，視官器，涙器，眼筋，眼球，聴官器，嗅官，咀嚼及び味官器等を論じ，170丁以上に及ぶものである。卷之三．第二綱頸部．第三綱胸部（腹部の臓器すべてを論じている）。総数170丁を超すものである。卷之四．骨孟．男子生殖器，男性利尿器，直腸部，会陰，婦人生殖器，婦人利尿器および会陰等を論じている。総数170丁を超すものである。

### 「外科各論」（36）

ホルトルマンが着任して，最初の系統的講義がこの外科各論であった。本講義は英国の医師ゴロスの著書を参考書としたことを述べていた。

卷之一．第一編．では皮膚皮下結締組織及び蜂巣組織の病を論じた。その内容は，石瘡，疔癰，壊疽性瘡，火傷，痘瘡，冬瘡等である。

卷之二．では皮膚及び皮下結締組織の病性新生物であり，聯胝（たこ），Likdoorus，皮角，垢腺腫，菌腫，molluscum fibroma，comedones，Acne，Miliun，gruttum，Dermoide Kysten，疣，Papillomata，Fibroma，Keloid，Eiloid，脂肪腫，脈管腫，Myoma，軟骨腫，骨腫，神経腫等の多種類の新生物を論じていた。

卷之三．では第二編，筋，腱，関節囊，及び腱膜ノ損傷及諸病が含まれている。

第三編では，水脈及び水脈腺諸病で，リンパ腺関係である。第四編は神経病である。

卷之四では，第五編，静脈病，第六編，動脈諸病であり，十四種の動脈病を論じていた。

卷之五は骨病，卷之六は骨ノ損傷，即骨折及び骨創傷を論じていた。

## 「外科手術学」(37)

卷之一「誘導編では外科手術学の大意を解き兼ねてその手術施法の要略を論ずるものなり。」とあり、次の内容であった。

手術之予備、鎮痛の処方(麻醉法), *elementaire Kunstbewerking*(基本技術), 隔離—出血性隔離, 軟部之出血性隔離, 採刀法, 載切法, 載切之形状, 鋏, 刀切及び鋏切ノ補助器, *punctio*, 骨部出血性隔離, 鉤(鑷), 錐, 鑿, 鋏及びタンゲン, 骨鋸, *beenvijlen*(骨鑷)などおよび接合法—絆創膏, 縫合を論じている。

卷之二. 血管手術, 止血法, 各自動脈ノ結蹄法が詳しく論じられている。

卷之三. 神経手術, 卷之四. 骨手術, 卷之五. 関節離脱法, 卷之六. 切除. 各論を述べている。

ホルトルマンは外科を得意としたことは、乳癌手術の記録が石川県金沢病院編集「医事雑誌」の明治十年九月(第六号)に掲載されていることから知る事ができる。二十六才の女性の右乳房繊維性肉腫の切除とその治癒が写真図版と共に詳しく報告されている(38)。

## 「眼科外科学」

ベルリン大学スワイヘル氏の著書を参考書とした(39)。

卷之一. 第一篇 眼窩諸病, 第二編 涙器諸病, 第三篇 眼瞼諸病

卷之二. 第四編 結膜諸病, 第五編 角膜諸病, 第六編 硬膜諸病, 第七編 虹彩諸病

卷之三. 第八編 水晶体系統ノ諸病, 第九編 硝子液諸病

卷之四. 第三編 第一篇 健康眼底ニ呈スル検眼鏡ノ像, 第二篇 脈絡膜病, 第三篇 網膜及神経病

卷之五. 屈折異常(視力測定, 近視, 遠視など)

## 「眼科手術学」(40)

卷之一. カタラクト手術, 卷之二. 虹彩手術, 角膜及前室ノ手術, 結膜手術, 眼球切除法, 義眼挿入法  
からなる講義であった。

なお補足として「包帯学」の講義について記す。

### 「繙帯学」

講義はゴフレス「繙帯学」が使用されていた（41）。

Goffres, M., *Handboek van de Leer der Verbanden en Verband-instrumenten*, (1858).

本書の原典は Goffres によりフランス語で記述されたもので、C. Bademaker によりオランダ語訳されたものである。本書は津田淳三により翻訳されて、それを教科書として津田が講義をした。藤本純吉の「繙帯学」講義録にはゴフレスの書籍の挿絵が詳細に写されている（図35）（42）。

図35. ゴフレス「繙帯書」の図（右）と藤本純吉筆記の「繙帯学」からの図（左）（42）。両者は同じ図である。（左図. 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。）



#### 第4章 金沢病院の落成と金沢医学校から石川県甲種医学校へ.

##### 第1項 石川県立金沢病院と金沢医学校.

大田美農里らの功勞により、金沢医学所は明治十二年六月に殿町(現・NHK金沢放送局の地)に「石川県金沢病院」が新築落成した.これを機に医学所は金沢医学校に改称した.この新病院は当時の地図によれば金沢の新名所になっている(図36).院長は大田美農里であったが、同年十月に田中信吾が医学校長と病院御用掛兼任に就いた(1).

明治十七年の調査によると、金沢医学館は明治四年の開校以来、医学を修了して卒業し、内務省開業免許を取得したものは八十二名であり、製薬学を修了して卒業したもの九名であった(1).明治四年から明治十五年までに金沢医学館、医学所に入学・在籍した生徒の名簿を表5に示した.総計134名であり、この中から多くの開業免許取得医が生まれたのである.

この年の石川県通常県議会でドイツ医学の導入とドイツ医学教師の雇用が承認された.この決議により田中校長は明治十二年十月十六日付けで、医務調査のために上京を命ぜられた(2).この時の様子は、田中の「東遊日記」に詳しく記されている(3).



図36. 石川県金沢病院の写真. 金沢大学医学部記念館蔵.

田中は同十三年二月に帰県して、あらたに「金沢医学校通則」を編纂して、医学校教則を大きく改正した.教育年限は四ヶ年となり、学科目が次ぎの学科課程表の様に替わった(4).

##### 第五條 学期ハ四ヶ年ヲ以テ卒業ノ期トシ之ヲ八期ニ分ツ

第一期 物理学 一週六時、以下同シ 無機化学 六時 解剖学 六時

第二期 有機化学 六時 動植物学 六時 解剖学 十二時

第三期 組織学 四時 生理学総論 二時 生理学各論 十二時

第四期 薬物学 六時 繙帯学 三時 処方及調剤学 三時 内科通論 六時  
外科通論 六時

第五期 内科各論 六時 外科各論 六時 内科臨床講義 三時  
外科臨床講義 三時 眼科学 四時 診断法 二時

第六期 内科各論 六時 外科各論 六時 内科臨床講義 六時  
眼科臨床講義 三時 外科臨床講義 六時

表5. 金沢医学館，医学所，医学校に明治四年より明治十五年までに在籍した生徒氏名.

回	入学年	学生氏名				
1	4	稲坂謙吉 不破鎖吉	藤井貞為 藤本純吉	上杉寛二 三沢敬吉	上出達三 宮北 徳	須賀忠愛
2	5*	神保余三郎 岩原恒三 森正多郎 原田信太郎 湯村 丞	関川順吉 河内信敬 中西 要 佐久間直 尾石 豊(武谷水城)	村上直憲 清水 衛 山本貞二郎 斉藤文人	阿波加 蕃 清水与吉郎 渡辺松二(新保松二) 吉村 某	荒井甚作 田中善平 中川兵四郎
3	6	武部金次郎 林 暢一 田中守平(吉村守平)	横山順五郎 中山 泉	国分又勝 米田 某 田辺瀧雄	佐久林三 藤波 某	庄田喜太郎 中西 某
4	7	金子治郎 島田雅之	馬場三平 長谷田 務	明石 文	稲坂三吉	河崎規矩
5	8	松井宣正	大井源次郎	辰巳源泉		
6	9	上田計二 山田忠之	勝見正成 中村順次(田中義雄)	斉藤和三郎	林 與一	水上鉦次郎
7	10	大井 精 中島彝雄	神戸仁太郎 岡崎桂一郎	小泉永信 上坂熊勝	敷津林傑 小林三郎	安達氏久 玉川栄太郎
8	11	浅岡善之助 永井貞之 小林意等	林 秀一 早田保夫 古丸藤太郎	伊丹重正 原 温恭 笹井三次郎	中村健三郎 渡 甚三郎 島林尚年	上原秀三 吉田茂人
9	12	岡部幸一郎 杉原幹男	寺西幸作 津川 恒	安西与三男 桃井 明	山口賢治郎	岡田剛吉
10	13	斉藤政一	山岸朔五郎	富永 良		
11	14	伊丹重之助 矢田金次郎 石崎喜一郎 今村重教	大河原昇五郎 小竹武次 岡部喜三	高橋勇太郎 吉本啓三 瀧川一定	浅井安吉 瀬尾順四郎 古田健次郎	大屋保治 神保與三松 高木喜衛
12	15	沖 玄仙 橋本亥三男	織田熊勝	州崎為次郎	杉本 一	岡田重正
不明		桑原慶太郎 丹羽直胤 朝倉亮五郎 藤本弥太郎	浅野策二 野崎三郎 伊藤信三 国谷猶作	河合秀波 宮崎徳重 大西信之 嶋 佳三郎	澤田外三郎 正谷亮太郎 平賀東吾	栃谷仁一郎 中臣重作 後藤与五郎

太字は卒業後に金沢医学館，医学所，または医学校に勤務していた。

明治14年入学者は石川県学事報告第六号，明治15年入学者は同報告第十号による(5, 6)。

14年，15年に入学した生徒は甲種医学校に引き継がれている。

\* 明治5年入学生 は日本医事新報による(7)。

第七期 内科臨床講義 十二時 外科臨床講義 十二時 婦人病論 二時  
産科学 四時

第八期 内科臨床講義 十二時 外科臨床講義 十二時 裁判医学 四時  
衛生学 二時

第七條 毎月最終土曜日ニ小試験ヲ行ヒ 其得点数ハ每期ノ終中試験ノ点数ニ算入シ 其  
得点及第セサル者ハ 更ニ前期ノ学科ヲ復習セシム 若シ再三修復スルモ 尚ホ  
落第スル者ハ退学セシムヘシ

本規則には「製薬学生規則」が含まれているが後に触れる。

本規則には予科生規則があり，小中学の課程を終えた者のみを医学校への入学資格としたが，初等・中等教育を修了したものが少なく，定員に満たないことから，これに相当するものを予科生として入学させて，普通学科と外国語を教育した。医学生徒の入学を望む者は16才以上，製薬学徒を望む者は17才以上の者で，満1年の後に必ず本科年齢相当の者で無ければ予科生としての入学は許されなかった。

金沢病院では，診療はそれぞれの分野の専門医師による治療方式を行うこと一分科制一が行われることになった。明治十三年九月には東京大学医学士外山林介(内科，産科，明治十三年卒)が，同十三年に伴野秀堅(外科，明治十三年卒)が着任した(1)。

本病院は明治十五年に患者の増加により狭くなり，  
医学校との間に新たに病院棟を増築した(図37)。

政府は明治十五年五月二十七日に府県に対する文部省達第四号(輪廓付き)を以て「医学校通則」を定めた(9)。

第二條「医学校ハ之ヲ分テ甲乙二種トス甲種ハ尋常ノ医学科ヲ教授シ以テ医師ノ具成ヲ図リ上款ニ遵ヒ之ヲ設置スルモノトス。(以下略)」

と定め，同第十條で

「甲種医学校ノ教員中少ナクモ三名ハ東京大学ニ於イテ医学士ノ学位ヲ得タル者ヲ以テ之ニ充テ主トシテ重要ノ学科ヲ分担セシムベシ(以下略)」

とした。さらに，卒業生には医師免許を与えることにした。これはドイツ医学を学んだ多数の医師を短期間に養成することを目的としたものであり，新医学校「県

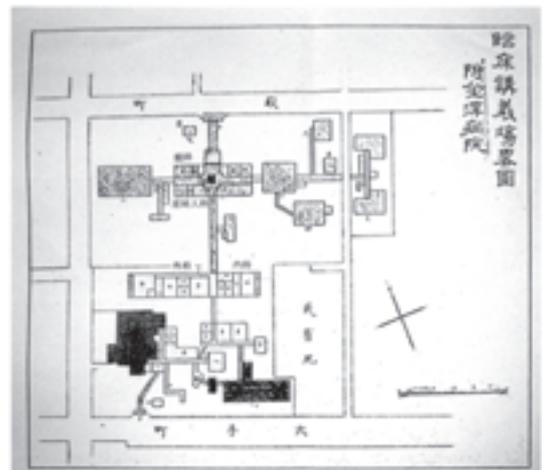


図37. 金沢病院平面図。

第四高等中学校一覽，臨床講義棟略図より(8)。

上部の建物は明治12年に建築，その下の建物は明治15年に建築された。

立甲種医学校」の設置を促進するものであった。

この結果、これまでの全国の医学教育機関では東京大学医学部でドイツ医学を修了して卒業したばかりの診療経験の浅い医学士を一等教諭に採用して、新たに二十一校の甲種医学校が誕生した(表6)(10-12)。金沢医学校では三名の医学士の揃うのが遅れて、明治十七年三月に医学校通則に適ったものとなり、「石川県甲種医学校」が誕生することになった。

表6. 全国の甲種医学校一覧

前身校名		設立年	明治14年	認可, 開校年	明治19年	卒業年次	備考
			校長名	甲種医学校	校長名		
岡山医学校	岡山	13	菅 芳之	15年5月	菅 芳之	13	第三高等中学校医学部
大阪府立医学校	大阪	13	吉田顕三	15年5月	吉田顕三	12	府立大阪医学校
長崎医学校	長崎	4	吉田健康	15年5月	吉田健康	15	第五高等中学校医学部
県立千葉医学校	千葉	15	二階堂謙	15年10月	長尾精一	13	第一高等中学校医学部
京都府医学校	京都	5	新宮涼亭	15年11月	新宮涼亭	14	京都府立医学校
神戸病院附属医学所	兵庫	12	市川元寿	15年12月	神田知二郎	13	21年3月廃校
愛知県医学校	愛知	11	後藤新平	16年1月	熊谷幸之輔	14	愛知県医学校
和歌山県医学校	和歌山	15	野川二郎	16年3月	半井英輔	12	20年3月廃校
三重県医学校	三重	9	佐藤一之輔	16年6月	佐藤一之輔	12	19年3月廃校
石川県金沢医学校	石川	9	田中信吾	17年3月	木村孝蔵	16	第四高等中学校医学部
広島病院附属医学校	広島	5	後藤静夫	17年3月	佐野龍太郎	14	19年3月廃校
福岡医学校	福岡	13	熊谷玄旦	16年6月	大森治豊	12	福岡県立福岡病院
宮城医学校	宮城	12	上山五郎	16年6月	瀬川昌耆	15	第二高等中学校医学部
徳島医学校	徳島	12	三浦浩一	16年7月	三浦浩一	9	19年12月廃校
新潟医学校	新潟	6	山崎元脩	16年8月	三浦省軒	9	21年3月廃校
秋田医学校	秋田	8	柳 元永	16年8月	吉田貞準	—	20年廃校
熊本県医学校	熊本	11	古賀保高	16年3月	熊谷正三	12	21年3月廃校
福島医学校	福島	14	野川二郎	17年5月	新保文輔	14	20年3月廃校
大分県立医学校	大分	13	鳥瀉恒吉	17年7月	鳥瀉恒吉	12	21年3月廃校
岩手県医学校	岩手	9	沼波貞吉	17年8月	竹内(校長 心得)	—	19年3月廃校
島根病院附属医学校	島根	17	高橋盛寧	18年7月	高橋盛寧	17	19年11月廃校

文献・資料：

1. 前身校名，設立年，明治14年の校長名（10）。2. 明治19年の医学校校長名（11）。
3. 卒業年次（12）。4. 認可，開校年度，備考。各学校関係機関の資料。例：学校沿革，県史，職員録。

第2項 石川県甲種医学校の開校とドイツ医学教育.

明治十五年から全国の前身医学校の甲種医学校への昇格が始まったが、表6に示した様に殆どの前身校の明治十四年当時の校長はすでに東京大学医学部でドイツ医学を習得した若い医学士達であった。この中で唯一、金沢医学校の田中信吾校長のみがオランダ医学を学んだ医師であった。前に触れた様に金沢医学館、金沢医学所、金沢医学校では充実したオランダ医学の教育が行われ、当時すでに百数十名が卒業して、全国的に最も多くの輩出数であった。このために甲種医学校への昇格が遅くなり、明治十七年三月十二日となったのである。

明治十七年三月十三日に石川県甲廿七番「金沢医学校ヲ甲種医学校ト改称並規則改正ノ儀」が布達された(13)。この通則に従って甲種医学校では図38に示す様に、田中信吾校長のもとに医学士木村孝蔵(外科学, 明治十六年卒), 佐藤廉(内科学, 明治十五年卒)らが一等教諭として就任した。また本校での基礎教科の教育は今井省三(石川県専門学校兼任, 理学士, 化学), 中西要(組織学), 羽田慎, 堤縦清(薬学, 化学), 水上鉦次郎(物理学), 篠原専次郎(ドイツ語, 数学)が担当することになった。その後, 明治十七年十一月に遅れていた中浜東一郎(内科学, 皮膚科学, 明治十四年卒)が岡山県甲種医学校から着任して, 十二月に田中に替り校長に着任した。金沢病院では分科制となり, 外科, 内科, 眼科, 婦人科・産科の4科となった。薬局は旗善蔵が受け持った(14)。

この人事が原因となって内部に軋轢が生じ, 田中らオランダ医学を学んだ医師達は甲種医学校を明治十七年十二月に依願退職して, 新たに私立尾山病院を開院することになった(15)。その後, 明治二十一年までの本校の教員の移動を同図に示した。

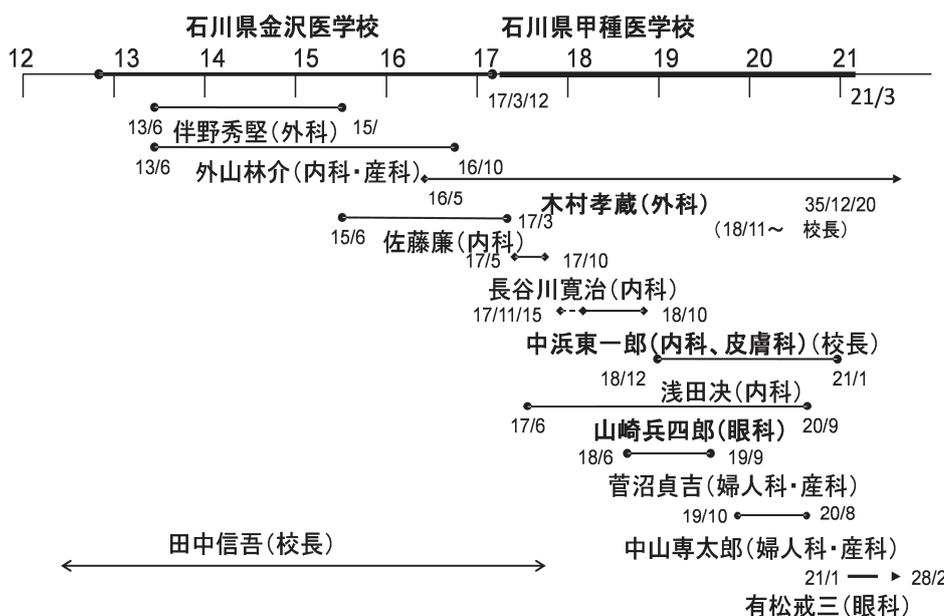


図38. 石川県甲種医学校の職員の動向.

太字の者は石川県職員録第2冊, 明治18年に記載されている(14)。

石川県職員録第2冊に記載された明治18年の甲種医学校の教諭は木村，中濱，山崎の3名であった(14)。本校の存続期間は短く，「中学校令」により明治二十一年三月末日には閉校して，第四高等中学校医学部に昇格した(16)。

石川県甲種医学校でのドイツ医学教育の内容は、『石川県甲種医学校規則』の付録「教授要旨」に簡単に記されていた(17)。本校卒業生による講義録の現存するものは僅かであり，飯盛益太郎筆記の中濱東一郎著述「内科各論」第四号，木村孝蔵著述「外科通論」(いずれも明治18年)のみであり(18)，講義録からその教育内容を理解するのは困難である。この為に，次ぎに示す資料を基に本甲種医学校の教科書および参考書の調査を行った。その結果，本甲種医学校でのドイツ医学教育の実体を明らかにすることが出来た。さらに金沢医学館でのオランダ医学教育との比較が可能となった(18)。本調査には次の資料が用いられた。

資料：『金沢医学専門学校図書目録』(明治四十二年刊)

金沢大学『医学部古書目録』(昭和五十一年刊)

「第四高等中学校医学部図書原簿」(明治二十一年自～明治二十二年至)

『加賀藩旧蔵洋書総合目録』(金沢大学附属資料館史料叢書2(2006))

『石川県専門学校洋書目録』(金沢大学附属資料館歴史料叢書1(2005))

「国立国会図書館デジタルアーカイブス」

等を使用した。

石川県甲種医学校の教科書は，『石川県甲種医学校規則』(以下「学校規則」と略す)の付録の「教授要旨」の項に記載された書籍を各学科順に引用し，その書籍に関係する情報を調査して記述した。なお，「第四高等中学校医学部図書原簿」に登録されていた書籍には上付きマーク\*を付し，その冊数を記載した。

調査した参考書籍のデータは略す。

また，石川県甲種医学校における教育の背景を理解するうえで参考となる東京大学医学部草創期(明治十年)の教育陣容を「金沢大学医学部百年史」から引用する(19)。

綜理 池田謙斉 副綜理 長与専濟

外科 ウィルヘルム・シュルツェ 内科 エルウイン・ベルツ

化学 アレキサンドル・ランガルト 生理学 エルンスト・チーゲル

解剖学 ハンス・ギールケ 物理学，数学 レオポルド・シュンデル

ドイツ語，ラテン語 ルドルフ・ランゲ パウル・マーエツト

製薬学 ゲオルグ・マルチン 博物学 ヘルマン・マールブルヒ

製薬化学 オスカル・コルシェルト

ベルツをはじめ，当時のドイツ医学を背景とした優秀なドイツ人学者から成っていた。

なお，石川県金沢医学校から石川県甲種医学校に編入した生徒に対する卒業時の医師開業免許の特別規定は次の通りであった。

石川県類聚公報 明治17年，第2冊(20)

学事 249 頁 (423 頁)

告三百廿三番 七月十七日附

本県甲種医学校ノ儀ハ 明治十六年内務省乙第四拾六号達ニ基キ其筋ノ特許ヲ得シテ以テ同校本年二月改正教則実施后入学ノ生徒及從來在学生徒ノ内改正教則第二学期前半期ニ在リシ者以下ニ限り卒業ノ上ハ明治十六年第三拾五号公布医師免許規則第三條ニ抛リ開業免状授与ヲ願出スルヲ得 此旨告示候事

### 第 3 項 石川県甲種医学校の教科書.

#### 1. 解剖学：

田口和美編輯『解剖攬要』(図 3 9) (2 1) \*1 部 10 冊，田口和美蔵版，明治十年七月二十六日版權免許. 全 14 冊 (卷之一～卷之十三下)；19cm，出版：英蘭堂島村利助，明治 10 年-14 年. 本書は東京大学医学部解剖局で，ドイツ人解剖学者デーニッツ(Wilhelm Dönitz)の教えを受け，また独英二国の解剖書を参考として著述したものである. 内容は次ぎの通りである.

卷之一：目次，序論 第一編 骨学. 卷之二：5，頭骨. 卷之三：第二章 四肢骨. 卷之四：第二編 靭帯学. 卷之五：第三編 筋学. 卷之六：第二章 四肢筋. 卷之七：第四編 内臓学，消化器，呼吸器. 卷之八：溺器，生殖器，血管腺. 卷之九：五官器. 卷之十：第五編 脈管学. 卷之十一：脈管学 つづき. 卷之十二：第六編 神経学. 卷之十三上：神経学 つづき. 卷之十三下：神経学つづき (脊髓神経 膊神経叢 交感神経系統).

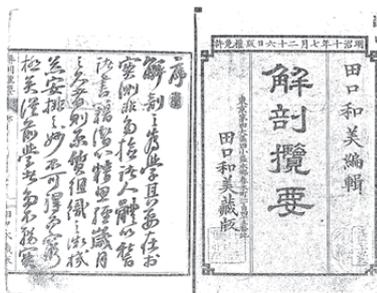


図 3 9. 田口和美編輯『解剖攬要』卷之一の標題頁と序文. 序文は長与専齋記述. (国立国会図書館蔵)

デーニッツは明治六年七月にドイツより来日した解剖学者であり東京医学校で基礎医学を専任した. 田口和美は明治十年に東京大学医学部発足時の解剖学教授である.

#### 2. 組織学

田口和美著『人体組織攬学』(人体組織攬要) (図 4 0) (2 2) \*1 部 3 冊，出版；島村利助他，東京：全 3 冊，455 p. 図版 204 p.：21cm. 第一冊：卷之一，第 2 冊：卷之二，第 3 冊：卷之三上，明治 13 年-17 年. 「金沢医学校」印あり.

東京大学医学部教師ドイツ人医学博士ギールケ「組織学」講義の備忘録(メモランダム)及び同国刊行の書籍より編輯した. 本編の内容は「解剖学総論」であり，別書『解剖攬要』が各論である.

内容：卷之一：序論，細胞及び組織の性質. 第一篇，組織，卷之二：第二篇，器臓論，消食器，呼吸器. 卷之三：第三篇上，溺器，生殖(男性). (卷之四：第三編下，生殖器(女性)未発刊).

ギールケ(Hans P. B. Gierke)はデーニッツの帰国後に来日した解剖学者であり，明治十年の東大発

足時に解剖学，各部解剖学，組織学，実地解剖学を担当した。

図40. 田口和美編輯  
『人体組織攪学』卷之一.



『チーゲル氏組織学』は不明.

### 3. 生理学および胎生学

チーゲル氏「生理学」メモランド：(図41)(23)

本書は東京大学で発行したものである.

Tiegel, E., Physiologische Vorträge. (gehalten in der medicinische Akademie zu Tokyo). Tokyo, 1878-1879. (明治11年-12年), 24 x 15.5 cm: 活字頁 67 p, 白紙頁 2-3 p. が活字頁の間に挟まれている. 「木村氏図書」印あり.

チーゲル(明治9年12月来日)が明治11年から12年に講義した講義録(ドイツ語で記載)であり, 現存するものは木村孝蔵が寄贈したものであり, 木村の勉学した跡が見られる.

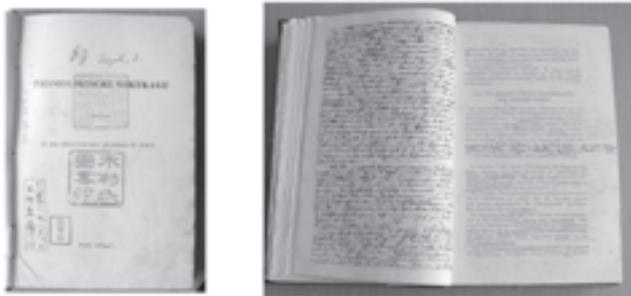


図41左. チーゲル氏「生理学」講義.  
図右. 右頁「生体の形態的特性と  
生体の発育」の頁.



図42. 「チーゲル氏生理学」, 『医科全書  
生理篇』卷之一. 橘良恂訳(24).  
左. 標題頁, 「金沢医学校」印あり.  
右. 同書, 目次の一頁.

チーゲルの生理学講義は, 橘良恂, 山崎元脩, 谷口謙らにより翻訳されて, 『医科全書生理学篇, 卷之一~八』編輯, \*全9冊, 東京大学医学部, 島村利助(明治12年-15年刊)により出版されていた(図42)(24).

内容:(医科全書生理学篇による) 卷之一: 序論, 力及び運動の論, 生活体の通性を論ず, 動植二物交互の区別徴候を論ず, 動植二物間各互の区別表, 動物器官の造構(organisation)を論ず. 諸動物種属の分類中人身の列する地位を論ず. 人身の化学的成分を論ず. 人身を構成する原素表目, 水, 人身諸部に含有せる水量表目, 気体種類, 蛋白質類, 水化炭素類.

卷之二：生理各論，第一編，人身諸液の論，人身諸液第一分類の各論，其一 血液論，血液凝固論，人身の血量，年齒及び両性上の血液感応，血液の生理的官能．其二 淋巴，其三 乳れき，其四 漿液性滲漏液又空隙液，漿膜液．卷之三：血液運動論，動水濁の通則を論ず，梗壁管中水液の運動，血圧の論など．卷之四：呼吸機篇．卷之五：栄養篇，組織論．卷之六：栄養機篇，単純滋養物之論，食物之論，消化管消化液作用の論，口腔内化学的消化作用の論．卷之七：栄養機篇，胃化学的消化之論，胃液の作用，膵液之論，胆汁之論．卷之八：栄養機篇，胆汁の消化作用之論，腸液之論，消化器各部の消化機能之論などである．

#### 4. 薬物学および処方学

ノートナーゲル氏，ロスパッフ氏「詳約薬物学」 \* 1部2冊

Nothnagel, Hermann und Rossbach, Michael Joseph. Handbuch der Arzneimittellehre. 3. aufl. : xi, 854 p. : 23 cm, A. Hirschwald, Berlin, 1873.

この書籍を鈴木孝之助が翻訳したして出版した．

鈴木孝之助訳補『詳約薬物学』乾（卷之上）(図43)(25)．

\* 1部4冊．明治十四年一月刊行，改訂第二版，400丁．

「第四高等中学校医学部図書」印あり．

内容：第一類 金属類．第二類 諳謨尼亞加里類，第三 亜兒加里土類，第四 土類金属，第五 重金属類．第三類 無機及び有機酸類，第一 無機酸類，第二 有機酸類．第四類 亜爾箇保兒類及び其誘導體 第五類 蔵素化合物，青酸，芥子油，芥子油及び芥子，ブチール芥子油．及び山口菜．

(□は解説不能)

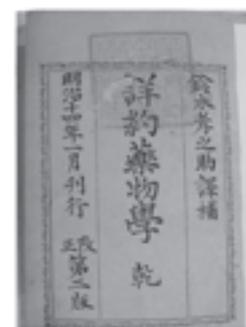


図43. 『詳約薬物学』

金沢大学附属図書館蔵

『詳約薬物学』坤（卷之下）鈴木孝之助訳補，印東玄得校補，明治十四年九月刊行，第二版，池田氏蔵版，484丁．「金沢医学校」印，「第四高等中学校医学部図書」印あり．

内容：第六類 芳香化合物．第七類 芳香化合物ヲ混有スル所ノ植物及動物質．第八類 類塩基．第九類 糖原質．第十類 化学的構成未詳ノ酸類及無水酸類．第十一類 生理的作用微弱ナル所ノ苦味薬．第十二類 蛋白質類．第十三類 油糖素及脂肪類．第十四類 含水炭素．

#### 5. 診断学

グットマン「胸傷器検査法」の抄訳：(26)

第2版が1874年に出版され，講義に使用された版がどちらかは不明，現存するものは5版，1884年刊である．

#### 6. 内科学

三宅秀<sup>ひいず</sup>訳著『病理総論』(図44)(27)東京：三宅秀：明治14年3月出版：686p.：19cm.

内容：卷一：第一編 誘導篇 病理総論，症候学及診断学．第二編 疾病論．第三編 原因論，第二類，[三] 寄生虫，「乾」植物性寄生，黴菌（バクテリア），第二 粉状黴菌，第三 絲状黴菌．

動物性寄生，第一 原始虫，第二 蠱動虫，第三 關節虫，〔四〕 伝染病，  
〔五〕 伝染動物毒，〔六〕 器械的損傷．卷二：第四編 血液違常．  
卷三：第五編上 血行違常，第一類 汎発血行違常．卷四：第五編下 血行  
違常，第二類 局発血行違常下．卷五：第六編上 營養違常．卷六：  
第六編下 營養違常．

本書の著作において次のリンドフライシ『病的組織学』(1878)など  
を参考書籍としていた(28)．



図44. 『病理総論』  
三宅<sup>ひいず</sup>秀<sup>しゅう</sup>訳<sup>やく</sup>著

## 7. 外科学

佐藤進著『外科通論』(図45) 島村利助刊，東京，明治15年  
10月，940 p. : 20 cm, (明治9-13年刊を再編成刊行)(29)．  
本書はビルロート氏『改版外科通論』を基に訳述したものである  
(30)．

内容：『外科通論』の目次

第一篇 軟組織の単性切創：第一章 切創の形状 傷后直発諸症  
出血の種類 失血后全身症，第二章 止血法，第三章 創口哆開  
創縁縫合法 縫合后傷創の形状 第一期癒合，第四章～第九章(略)．

第二篇 刺創：第十章(略)．第三篇 挫傷：第十一章(略)．第四篇 軟部の挫創及び裂創．第十二章  
(略)．第五篇 単骨折論：第十四章(略)．第六篇 破開骨折及び骨化膿：第十六章(略)．

第七篇 關節の外傷：卷之三 目次：第十九章 単脱臼．第八篇 第二十章 銃創の形状．第九篇 第  
二十一章 火傷及び其度．第十篇 外傷に基因せざる軟組織の急性炎．第十一篇 骨，骨膜及び關節急  
性炎．第十二篇 脱疽 第二十四章(略)．

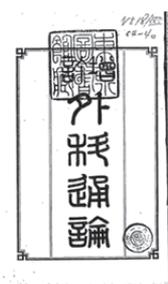


図45. 『外科通論』  
佐藤進著

## 7. 眼科学

『シュルツ氏眼科学講本』(図46)

Schulze, W., Vorträge der Ophthalmologie. Druck von Insatsu-kioku, Tokio, Meidji,  
14.-15. 304 p.; 23 cm., 「木村孝蔵図書印」(31)．

シュルツの東大医学部での眼科講義メモランダムであり，現存  
のものは木村孝蔵の寄贈書である．

内容：1 : Spezieller theil. Krankheiten der  
Atgenlider. Krankheiten der Thraeneorgane  
(涙腺炎), Krankheiten der Conjunctiva (結膜炎),  
Krankheiten der Cornea (角膜炎)．原典は不詳で  
ある．

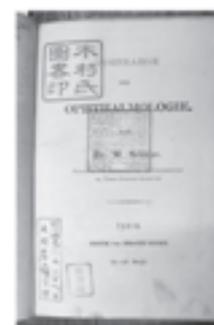


図46. 『シュルツ氏眼科学講本』

## 8. 皮膚病および梅毒論 (梅毒)

シュルツ氏外科学講本」(32)

Schulze, W., Vorträge der speciell Chirurgie, Krankheiten der Haut; Syphilis und Ulcus Molle, Tokio, Meiji 14. (1881).

## 9. 婦人病論

「ベルツ氏婦人病講本」, 不明

ベルツの東京医学校での明治9年11月からの産科・婦人科学講義の記録と見られるが, 出版された記録はない(33). ベルツは下記のシュレーデルの産科婦人科学教科書を使用していた(34).

従って, 当医学校でも本書を基にしたと見られる.

## 10. 産科学および実地演習

「ベルツ氏産科学講本」, 不明. 上記のシュレーデルの教科書を使用したと見られる.

## 11. 裁判医学

「ホルトルマン, 中毒学」(図47)

A. C. Horterman, 「普通中毒学」全(35).

藤本純吉筆記, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.

和綴じ, 16.5 x 11.5 cm, 厚さ約3cm. (刊本はない.)

本書の原典は不明.

内容: 総括, 神経誘導, Eliminato, Accumilatio, Saturatio, 中毒ノ原因偽中毒, 実地医学中毒学, 法律医学中毒学, 法律医学ト実地中毒学ノ関係, 中毒種類ノ区別, トキシコデナミーセ区別ノ通論, 慢性中毒.

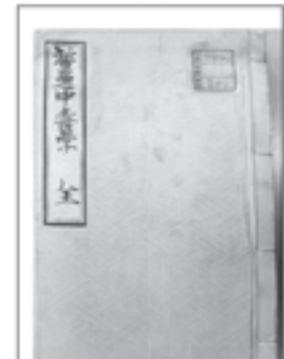


図47. ホルトルマン  
「普通中毒学」  
藤本純吉筆記(35)

「各自中毒学」(36)ではA. W. M. van Hasselt, Handleiding tot de Vergiftleer, tweede druk, (1855~58) [3冊] (「金沢藩医学館」蔵書印)を原典としていた(37).

ローレッツ「裁判医学」稿本(38)

『断訟医学』田野俊貞口訳, 石井栄三筆記, 全.(図48)

「医事新報抄録」(愛知医学校)明治十九年, 497 p.

(ローレッツの明治12年冬学期—13年夏学期の通学期講義録).

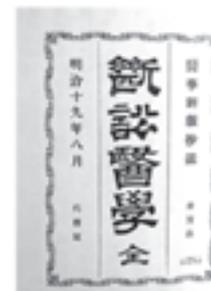


図48. ローレッツ『断訟医学』

## 12. 物理学

『物理学』飯盛挺蔵 纂訳, 丹波敬三, 柴田承桂校補(39):

上編: 物性, 平均, 器械, 運動, 水学, 気学.

viii, 411 p.; 21cm., 明治12年12月 (図49).

中編：波動総論，音響，光，熱，542 p.; 21cm., 明治13年6月．下編：磁石力，摩擦電気，触発電気即チ瓦爾華尼電気，氣中現象学．468 p.; 21cm. 明治13年12月，刊行 丸屋善七，東京，明治12-15年．

本書は東京大学医学部での講義録を刊行したものであり，下記のミュレル(J. Müller) (40) およびアイゼンロール(W. Eisenlohr)の物理学書(41)を基にしたものである．



図49. 『物理学』  
飯盛挺蔵纂訳，丹波敬三，  
柴田承桂校補

### 13. 化学

『無機化学』『有機化学』丹波敬三，下山順一郎纂訳(42)

\*各1部2冊。(図50)

『無機化学』非金属部，無機化学前篇，総論，非金属論，各論：□=涅でヘンが「ン」

敏口児著，(ランカルト)丹波敬三，下山順一郎訳，初版明治十二年五月，出版 丸屋善七，東京．

『無機化学』第二卷，金属之部，無機化学 金属之部，金属総論，各論：初版 明治十二年，出版 丸屋善七，東京．



図50. 丹波敬三  
『無機化学』(42)

本書はランカルト(Alexander Langgaard)がピンネル(Adolf Pinner)の無機化学書(43)およびゴルプベサネッツ(E. F. von Gorup-Besanez)の無機化学書(44)をもとにした東京大学医学部での無機化学の講義録を，丹波，下山が翻訳・編纂したものである．

『有機化学』(45) \*1部2冊

有機化学，前編，第二版，丹波敬三，下山順一郎訳，柴田承桂校閲．

総論，一炭類，二炭類，三炭類，五炭類，六炭類，七炭類以下化合物，含水炭素，尿酸類．

第二版 明治十三年六月重刻，出版 丸屋善七，東京．434 p., xiv : 20cm.

有機化学，後編，第二版，丹波敬三，下山順一郎訳，柴田承桂校閲．

芳香体総論，第一類，第二類，第三類，藍属，糖原質，苦味質類，色素類，揮発油，華爾斯類，胆汁質類，ピリジン塩基類，ヒノリン塩基類，アルカロイド類，蛋白質類．

第二版 明治十三年六月重刻，出版 丸屋善七，東京．431 p.: 20cm.

本書はランカルト(Alexander Langgaard)が下記のピンネル(Adolf Pinner)の有機化学書(46)およびゴルプベサネッツ(E. F. von Gorup-Besanez)の有機化学書(47)をもとに，東京大学医学部で有機化学の講義をした．その講義録を丹波，山下が翻訳・編纂したものである．

#### 14. 植物学および動物学

松原新之助「薬用植物編」(48)。

『講筵筆記薬用植物篇』松原新之助講義；安本徳寛記。安本徳寛，東京，明治十二年刊行，1冊：21cm。 \* 1部1冊。

スロイス氏講義「動物学」(49)

『ス魯ス氏講義動物学』大田美農里訳編，石川県学校 蔵梓，明治12年5月，(図51)(50)。P. J. A. スロイス が明治4年に金沢医学館で行った「動物学」講義から，脊椎動物(哺乳類から魚類まで)の部分を訳述し，石川県より出版された教科書である。

第一篇 脊椎動物，第一種 哺乳動物，第二種 禽類，第三種 匍匐動物，第四種 魚類。

本書の底本は D. Lubach の「動物学入門」である(51)。

図51. 『ス魯ス氏講義動物学』  
大田美農里訳述(50)  
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。



第4項. 石川県甲種医学校から第四高等中学校医学部へ。

本校ノ規則第二條には「各学科ノ講義ハ総テ邦語ヲ以テス 但妥当ナル訳語ナキモノノミ外国語ヲ用イル事アルヘシ」とあり，講義は日本語を用いて行うと特に記載していた。これは外国語—ドイツ語での講義となれば，語学の修得のために余分に時間を消費して，短い授業時間での学業の進展を妨げることを避けたのであった。

石川県甲種医学校規則(17)(一部)

##### 第一章 総則

第一條 本校ハ文部省制定ノ医学校通則上款ニ準拠シテ尋常医学ヲ教授スルノ処トス

第二條 各学科ノ講義ハ総テ邦語ヲ以テス但妥当ナル訳語ナキモノノミ外国語ヲ用イル事アルヘシ

第三條 本校生徒ノ定員ハ本科生ヲ三百名トシ予科生ヲ百名トス

第四條 生徒授業料ハ管内人ハ一期毎ニ金三円管外人ハ金三円九拾錢トス

第五條 授業料ハ毎年両度一月七月ニ纏メ前納セシムヘシ

但半途退学スルモノハ既納ノ授業料ヲ返付スル事ナシ

第六條 生徒ハ修業半途ニシテ妄リニ退学ヲ許サス 但疾病或ハ学業不進歩ニシテ到底

成業ノ目途ナキモノハ本文ノ限ニ非ス

第七條 在学中不都合ノ行為アリテ退学ヲ命スルモノハ其筋エ経伺ノ上文部省直轄官立学校其他一般公私立学校ニ入学ヲ禁シヘシ 但謹慎悔悟ノ実績アル時ハ其筋エ経伺ノ上入学ヲ許ス事アルヘシ

本甲種医学校で使用された教科書に、同校の蔵書印「石川県甲種医学校」の印影の認められるものは、明治四二年に刊行された『金沢医学専門学校図書目録』および昭和五一年に刊行された金沢大学の『医学部古書目録』には、一冊も記載されていない。ただ木村孝蔵が個人で使用した書籍の幾つかが寄贈されているに過ぎない。さらに、明治二一年から二三年の記録である「第四高等中学校医学部図書原簿」には、本校に架蔵された蔵書印のある参考書籍類は少なく、一部のみが第四高等中学校医学部図書館に引き継がれていた。その結果、現在の金沢大学附属図書館自然科学系図書館貴重書室には、僅かの甲種医学校の印影の書籍が架蔵されているに過ぎない(52)。甲種医学校規則に記載された多くの参考書の同定は出来ない。

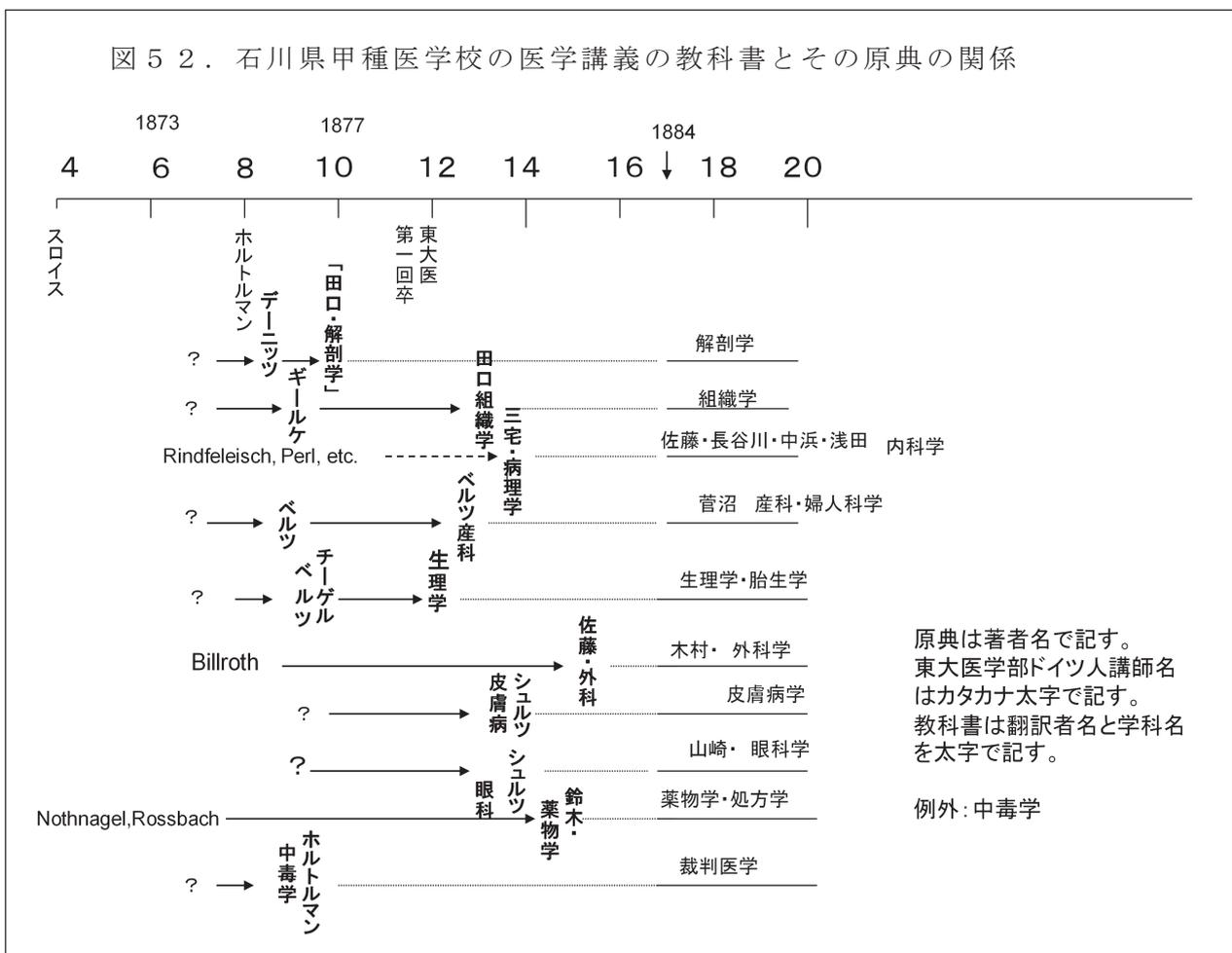
本校の教科書は、明治七年―九年に東京医学校に着任したドイツ人教師達(デーニッツ, ギールケ, チーゲル, シュルツ, ベルツ等)によるドイツ語による医学講義の講義録(vorträge)を東京大学医学部が出版したもの、あるいは明治12年―14年頃に講義録を翻訳したものであった(52)。また、1870年代にドイツで発行された医学書(ノートナーゲル, ロスバッフ, グットマン, リンドフライシ, ビルロートの著書など)や、理学書(ミュレル, アイゼンロール, ランカルト, ピンネル著書など)を直接輸入して翻訳したものもであった。たとえば, H. Nothnagel & M. J. Rossbach, “Handbuch der Arzneimittellehre”. 1873, が購入されて、鈴木孝之助が翻訳を行い、『詳約薬物学』として明治十四年(1881)に出版されたものを、薬物学の教科書として使用されていた(25)。その結果、図52に示した様に 1870年代後半に出版されたドイツ医学書を基にして、明治十七年(1884)に開校した石川県甲種医学校で医学教育が行われた。 その間には10年近くの日時が経過していた事は、明治政府がオランダ医学より優れたドイツ医学を選択して、「近代医学教育」を行うことを目指したが、結果的にはこの様な「古書による医学教育」であったことは医学教育史の上で注目すべき事柄である。

本校の動物学と裁判医学の講義では金沢医学校の講義録が使用された。その背景には講義を担当した堤縦清らが金沢医学所でスロイスとホルトルマンの教育を受けた教諭であったためである。

明治十八年十月に校長兼院長中浜東一郎は僅か一年足らずで依願退職し、木村孝蔵がその後任に就いた。ところが石川県甲種医学校は僅か三年で大きな機転を迎えることになった。政府は明治十九年四月の勅令第十五号で「中学校令」を告示した(16)。さらに同年十一月に高等中学校設置のために全国を五地区に分けた。

「明治二十年三月本県甲種医学校ニ於テ卒業証書授与式ヲ举行シ、県知事岩村高俊之ニ臨ム 特許医学校卒業ノ第一回トス」とあり、本校の第一回の卒業式であった(53)。

明治二十年四月には金沢、京都に設置する高等中学校を、それぞれ第四高等中学校、第三高等中学校と称することを決めた。その結果、石川県専門学校は移管されて公立の第四高等中学校に昇格した。また、同年八月十九日に、文部省告示第六号「明治十九年四月勅令第十五号中学校令第三条高等中学校ノ医科ヲ教授スル所ヲ医学部トシ第一ヨリ第五ニ至ル各高等中学校ニ之ヲ設ク(中略)第四高等中学校医学部は金沢ニ置キ、(中略) 明治二十年八月十九日 文部大臣子爵森有礼(54) により、第四高等中学校医学部の設置が決まり、石川県甲種医学校は第四高等中学校医学部として組み込まれ、新たな医学教育がはじまる事になった。全国には二十一の甲種医学校が存在したが、石川県甲種医学校が最も早い昇格であった。



その結果、

石川県告示第三十号 「石川県県立専門学校・甲種医学校二十一年三月限り廃止ス」

明治二十一年三月二十九日 石川県知事 岩村高俊 (55)

により、同年三月三十一日に本県専門学校法学科生徒六名、甲種医学校生徒十七名の証書授与式並に両校閉校式が施行された。斯くして県立甲種医学校の歴史は閉じられた(56)。

暫定的ではあるが、本校で医学を学んだ約60名の学生名と卒業年度を表7に示した。(本表は資料の関係でまだ完全にはならず、調査が必要である。)明治21年3月の卒業生のみが本校で4年間の学習を行ったものであった。他の学生は石川県金沢医学校に入学後に、甲種医学校の設立により転入学したものであった。

表7. 石川県甲種医学校卒業生名簿

卒業年次					
明治18年6月1日		16名	(学事報告第6号, 8頁)		
伊丹重之助	大河原昇五郎	高橋勇太郎	浅田安吉	大屋保治	
石崎喜一郎	岡部喜三	瀧川一定	古田健次郎	高木喜衛	
矢田金次郎	小竹武次	吉本啓三	瀬尾順四郎	神保與三松	今村重教
明治19年1月11日		6名	(学事報告10号, 10頁)		
沖 玄仙	織田熊勝	州崎為次郎	杉本 一	岡田重正	橋本玄三男
明治20年4月1日*					
特許医学校第一回卒業		卒業生28名	(推定した卒業生)		
野島茄三郎	古川恕之	尾形鱗三	村田宇吉	松井再太郎	井田芳民
宇野親敬	柴田達太郎	今井玄三郎	江波知輝	神戸勇三郎	飯盛益太郎
川端長治	加藤慶三	中村 庸	千秋雄雌雄	田中穰一	村田太次郎
竹中和雄	内匠益次	土川一吉	藤田外喜雄	得田 易	沖野弥一郎
安田則人	室戸助三郎	森島彦夫	中村文雄	山木末松	
明治20年9月26日					
特許医学校第二回卒業		卒業生の氏名が記載されていない。			
卒業生9名	**	(推定した卒業生)	(学事報告20号)		
永江	牧	杉山	小林	小北	
池田	松本善次郎	得田興明	桂田富士郎		
神野男三	中納嘉寿雄	竹越慶三	森島十太郎	安原興明	
米澤文雄	田中栄太郎	(確認できない)	官報129号	開業医免許者	
明治21年		3月31日			
特許医学校第三回卒業		17名	(学事報告23号, 20頁)		
鈴木 泉	湯浅 剛	吉見通義	浅田兵太郎	浅田升太郎	
大木則雄	川北辰吉	熊澤達郎	登谷保脩	高橋善三郎	
柴田竹次郎	伊藤仙吉	安井榮吉	石黒三千雄	伴 顕	
玉崎隆三	日下甲子太郎				
同年3月3	閉校となる				

参考資料 赤祖父一知 金大・文学部での特別講義資料.

学事報告6号, 8頁の生徒表彰の記事(5)および石川県衛生第8次年報・付録. 医師並薬剤師名簿

\* (明治26年2月)(57)より生年月日を読み取り, 推定の参考資料とした

東京医事新誌, No.502, 明治20年11月12日(58).

\*\* 学事報告17号，学事年報明治20年：両史料には卒業生の氏名は記載されていない。  
学事年報には明治20年の卒業生37名と記載されている。4月の卒業生は28名と見られる。  
(学事報告には全科生徒27名と記載されているが、これは医学科27名の誤りと見られる)

付録 (12)

金沢医学校および石川県甲種医学校教諭の略歴

佐藤廉(栃木県)安政4年7月生，明治15年 東京大学医学部卒，同年金沢医学校一等教諭

その後，栃木，秋田，函館(開業)にて勤務。

浅田 決(三重県)安政元年2月21日生，明治16年6月 東京大学医学部卒，新潟，ついで長野で  
勤める，明治18年12月 甲種医学校一等教諭医学士，本院副長兼内科医長の命ず，  
明治19年5月 コレラ病流行に付き検疫委員長に命ず，明治20年2月清潔法取調委員を命ず，  
明治21年1月 依願退職。新潟県に向かう。

木村孝蔵(福井県)万延元年11月1日生，明治16年6月 東京大学医学部卒，明治16年6月金沢  
医学校一等教諭を本院用掛兼務，同年11月 外科医長に命ず，明治17年3月石川県甲種医学校  
教諭，明治18年5月金沢病院副長兼外科医長に命ず，同年10月院長に命ず，明治20年12月  
第四高等中学校教諭に命ず，医学部長を命ず，明治21年1月本年3月まで院長囑託する，同年4  
月第四高等中学校教諭，外科部長を囑託す，明治30年大阪府立医学校へ転出。

山崎兵四郎(石川県)安政4年生，明治17年6月東京大学医学部卒，明治17年6月石川県甲種医学  
校一等教諭医学士，眼科医長兼任，明治20年2月清潔法取調委員に命ず，明治20年9月海軍大  
軍医に転任，明治42年東京で没す。

菅沼貞吉(福井県)生年不詳，明治18年6月東京大学医学部卒，明治18年6月石川県甲種医学校一  
等教諭医学士兼婦人科産科医長を命ず，明治19年9月大阪府へ出向を命ぜられる。明治21年1  
月依願退職，明治42年7月8日 大阪で没す。

中濱東一郎(高知県)安政4年7月7日生，明治14年東京大学医学部卒，明治14年岡山県甲種医学  
校教諭，明治17年11月 石川県甲種医学校一等教諭医学士，金沢病院院長，明治18年10月  
依願退職。

## 第5章 私立尾山病院の開院.

金沢甲種医学校の初代校長は田中信吾であったが、明治十七年十一月に二十七才の中浜東一郎が岡山県甲種医学校から本校に移って校長に就任したために、田中は旧校長、旧院長に格下げされた。この結果、これまでのオランダ医学を学んでいた医師と新しくドイツ医学を学んだ若い医師の間に軋轢が生まれることになった。その大きな要因は校長人事と病院の分化制にあるとも云われている。明治十七年十二月に田中は依願免職を行い、さらに金沢医学館時代からの藤本純吉をはじめ同僚らも辞職して、新たに十八年二月に金沢病院から百餘足らずの所(金沢市博労町63番地)に北陸では最初の私立病院「私立尾山病院」を開院した(1, 2)。

私立病院設置規則(明治17年7月1日付け「甲七十九番」)に従い、「病院位置、病院名称、院則、病院設置ノ主旨、病院建物敷地ノ略図坪数及其所有ノ區別、院長以下医員薬局員履歴、院長以下医員薬局員給料、病院備付医療用諸器械、病院費収支ノ見込」等の書類が、明治十八年二月に石川県庁に提出された(1, 2)。

この「病院設置ノ主旨」には

「本院ノ目的ハ普ク疾患ヲ救療スルニ在リ。然リ而シテ完全ノ治療ヲ施サント欲スルヤ一医ノ力ヲ以テスル事能ハサル事多シ。故ニ同志者相謀リテ一院ヲ結成シ勤メテ懇切ニ患者ヲ処置セント欲ス。ソノ貧困ニシテ尋常薬価ヲ納メ難キ者ノ如キハ情実ヲ正シ半額ヲ以テ施療スル事アルベシ」とあり、職制章程には、院長一名、事務長一名、治療掛三名、薬局長一名、調剤掛、事務、看病人、小仕はそれぞれ無定員と決めた。本院は北陸地方における最初の私立病院であった(図54, 図55)。病院の建物敷地面積は二百八十五坪(924 m<sup>2</sup>)田中信吾所有、総敷地面積四百四十四坪七合(1440 m<sup>2</sup>)藤岡親明所有、であり、図55の平面図は開院当時の図面である。この建物は明治二十年二月二十七日の火災で類焼した。同月二十九日から博労町八十番地に臨時に移転して患者の診療を再開した。その後、明治三十四年九月に元の土地に新病院を建設・落成した。写真54はこの新病院の正面玄関の様子を撮影したものと見られる。



図54. 私立尾山病院の写真。火災類焼後、明治34年9月に再開した病院の写真(3)。

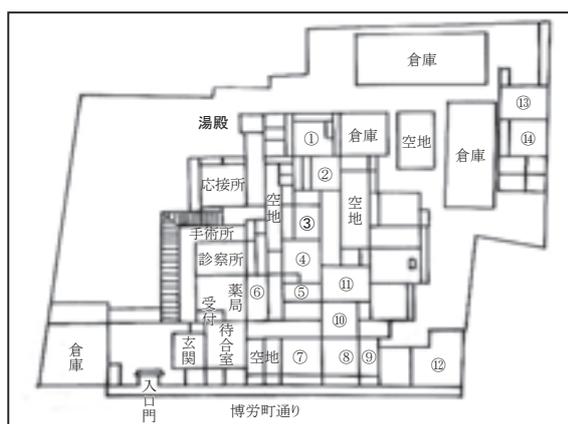


図55. 私立尾山病院平面図(翻刻図), 建設当時の図面。病室は番号(例①)で示した。多くの病室は八畳敷きであった。「尾山病院一件書類」11-1 本院開設許可物等より(1)。

本病院の職員は下記の通りであった。(明治18年1月現在の在職者の他に、その後に職員となった者も含む)(1)

院長 田中信吾(前職. 石川県甲種医学校校長兼金沢病院院長)

客員 伍堂卓爾(前職. 陸軍二等軍医正)

医員 不破鎖吉(嘉永四年生, 壮猶館入塾英学修行, 京都・榎林健吉に蘭学, 内外科を学ぶ, 今村兔朔に医学実地講習を請ける, 金沢医学校でスロイス, ホルトルマンに学ぶ. 金沢医学所助教諭, 金沢医学校御用掛.)

医員 藤本純吉(前職. 金沢医学校御用掛)

医員 村上直恵(前職. 金沢病院当直医兼甲種医学校御用掛.)

医員 杉江鉄男(金沢病院副直医, 明治18年金沢区娼妓検査所検査医兼務.)

医員 古丸藤三郎(明治16年3月金沢医学校卒業, 順天堂医院内外科学術研究. 東京・小石川明々堂で眼科実地研修, 士申義塾で独乙学を学ぶ, 神田私立薬学院で獨乙学教授.)

医員 小西元碩(明治3年2月～6年4月, 医学館で医学修業, 6年5月より自宅で医術開業)

調剤院 辻豊儀 (前職. 金沢医学校二等助教諭, 薬舗学科1回生)

薬局員 示村良吉(明治16年金沢医学校製薬学科入学, 17年12月退校)

調剤員 野村轍三(明治17年金沢医学校製薬学科卒業, 薬舗開業免許あり)

平野熊吉(明治21年8月, 辻豊儀に付き理学・化学・調剤学修業す)

丹羽雄太郎(明治21年8月, 辻豊儀に付き理学・化学・調剤学修業す)

事務長 藤岡親明(敷地所有者)

事務員 宮北才市郎

尾内賀明

開院当時は医療用器械, 眼科手術器械など77種類, 薬局用器械, 調薬台など17種, 病室用諸器械, 火鉢など6種が在ったことが記載されている。

尾山病院の収支予定額は,

収入	金壱萬六百四拾円	雑収入
支出	金八百七拾六円	俸給費
	金参百三拾三円九拾銭	雑給費
	金九千四百参拾円拾銭	雑費
合計	壱萬六百四拾円	

明治二十三年八月二十一日 に石川県知事に提出された書類に記載されている(1)。

尾山病院には開院当時, 多くの患者が列をして押しかけ, 非常に繁盛することとなった(表8)(5, 6)。開院当時, 尾山病院は外来患者数及び入院患者数ともに金沢病院を大きく上回っていた。これは金沢の町民には, まだドイツ医学を学んだ若い医学士による病气診療には馴染みが無かったことを示している。これが受け入れられるには, 石川県甲種医学校が第四高等中学校医学部となり, 更に5年間経てからである。

表 8. 尾山病院と金沢病院の外来患者数及び入院患者数の比較.

	金沢病院		尾山病院	
	入院患者数	外来患者数	入院患者数	外来患者数
明治14年		1,165		
明治15年	839	11,462		
明治16年		(12,291)		
明治17年	653	8,775		
明治18年	557	6,742	508	13,374
明治19年	720	7,386	733	15,152
明治20年	579	8,407	808	20,682
明治21年	569	9,374	945	17,379
明治22年	722	10,130	931	17,378
明治23年	819	11,377	900	16,883
明治24年	30,381	49,176	819	14,217
明治25年	32,357	46,540	864	15,543
明治26年		(74,196)		(16,659)
明治27年	26,824	42,059	928	14,305
明治28年		(61,258)		(16,130)
明治29年	34,539	40,848	517	14,592
明治31年	1315	47,848	808	13,752

注:明治14-17年 オランダ医学による診療, 明治18-20年 甲種医学校教諭による診療, 明治21-30年 第四高等中学校医学部病院での診療。  
( ) は総患者数. 石川県統計書, 明治13年~31年(6).

尾山病院は明治三十一年(1898)春に田中信吾が老齡のために引退して, 同年四月は伍堂卓爾が院長に就いた. さらに藤本純吉が三十四年(1901)三月に院長となったが, 医員の老齡化のために大正元年(1912)十二月三十一日に閉院となり, 16年間の尾山病院の歴史を閉じた. これで金沢におけるオランダ医学の役割は終えた(2). なお, その後に藤本純吉は味噌蔵町の自宅で開業していた.

石川県甲種医学校からの分離・独立の際に, これまでに壮猶館以来購入されてきた大多数のオランダ医学書も尾山病院に移されたとみられる. これは現存するオランダ医学書で「金沢医学館」の蔵書印のある書籍に, 「甲種医学校蔵書」の印影が全く無いこと, 明治二十一年-二十二年に作成された第四高等中学校医学部の図書原簿(7)には医学館に架蔵されていた書籍は記載されていないこと, さらに明治四十二年に刊行された「金沢医学専門学校図書目録」(8)にも記載されていない. これらの書籍は尾山病院が閉院された際(大正二年)に金沢医科大学に移さ

れたものと見られる(5).

## 第6章 金沢での薬学教育.

### 第1項 金沢医学所での薬学教育.

明治九年に金沢医学所は従来の組織を改編して、医学館は患者の診療を行う病院（大田美農里院長）と医学教育を行う医学所（田中信吾校長）に分離した。同年六月に医学所に薬舗学科が新たに置かれて、金沢での初めて薬学教育が始まった。（注1）

当時、本医学所では次の職員が医学教育を担当した。

藤井貞為（理学）、稲坂謙吉（生理学、動物学）、不破鎖吉（薬物学、植物学）、藤本純吉（診断学、包帯学、病理学、内科学）、中西要（眼科学）、原田俊三（内科、通訳）、馬嶋健吉（内科、通訳）

この中から基礎医学の講義を生徒は受講した。

辻豊儀（尾山病院薬局長）は第一回の入学生であった。辻の履歴書（1）によれば、明治七年三月に医学所入学、同九年六月に医学所製薬学科に転学、同十一年六月同所製薬学科卒業、同年八月 金沢医学所富山病院薬局主務心得、同十四年十一月一月金沢医学校教諭、同十七年十二月同退職、同十八年一月私立尾山病院薬局長と記載され、九年六月に初めての学生が入学した。

医学所および同薬舗学科では、動物学、植物学、化学、物理学、解剖学、生理学、薬剤学、処方学、病理学を学んでいた。

スロイスは明治七年十月に金沢医学所を離任しているために、辻豊儀は直接にスロイスの基礎医学を受講する機会はなかった。明治八年八月にホルトルマンが来沢して医学所教師に着任したことにより、薬剤学、処方学、病理学を受講した。（講義録より判断すると、普通中毒学、各自中毒学、ホルトルマン氏方叢などを学んだに違いない。）

この履歴書は金沢での薬学教育に関して重要な事柄を記している。

1. 金沢医学所に明治九年六月に開設された「薬舗学科」に辻豊儀が入学していた。さらに、堤縦清も同科に入学し、同じ時に卒業した（2）。

『石川県史料』の明治九年には「薬舗学科」（薬局学科）とあり、翌十年には「製薬学科」と改称されている（3）。

2. 「薬舗学科」の学生が受講した講義は基礎医学の講義であった。

3. 修学期間は2年間であり、旗善蔵は明治十年三月に入学して、同十五年五月に卒業した（4）。（注2）

明治十二年五月に校名は石川県金沢医学校に改まり、校長は田中信吾となった。製薬学科は薬学科と改称した。本学科学生規則には、

製薬学ハ医学ト並立スル緊要ノ学科ニシテ而メ薬物ノ性質精粗真贋ヲ弁知シ親カラ試験製煉シ得ル者ニ非レハ製薬学家タル能ハス故ニ本県ニ於テモ之ガ検査法ヲ設ケ始メテ開業免状ヲ与フル成規タリ因テ茲ニ該学ノ大意ヲ教授シ製薬生ヲ養成セント欲ス其規則左ノ如シ

とある（５）。

教育科目は理学，化学，動物学，植物学，金石学，薬品学，製薬化学，毒物学，分析学，調剤学，生薬学であり，実地演習として製薬，分析，調剤があった。

最初の卒業生（十五年五月）は倉知精三，旗善蔵，松原三六であった。

教官は不破鎖吉，堤従清，篠原専一郎，久野某，太井玄洞，村上某の６名であった（６）。

明治十七年までに製薬学科の卒業者は九名である。また，薬学生二十六名，予科生十六名が在学していた（６）。（注３）

第２項 石川県甲種医学校での薬学教育。

石川県甲種医学校規則の第一章総則，第一條には，

「本校ハ文部省制定ノ医学校通則上款ニ準據シテ尋常医学ヲ教授スルノ処トス」

とある（７）。このことは本校の開校の際に，従来の製薬学科は本校には新制度を基に含まれていなかった。（「乙種薬学校は設置されなかった」ことは以下に記した事柄から明らかである。）（注４）

「石川県学事報告」の「学事要項」には，県立学校卒業証書授与には明治十八年六月十日に柴村幸次郎，松村和一郎，森政右衛門が，同十九年一月十一日に吉田儀作，浦田定次郎，綿谷次郎吉，同年六月一日に楫喜雄，金田又右衛門，塚本保太郎の三名が石川県甲種医学校薬学科を卒業したことが記されている（８，９，１０）。この資料は金沢医学校薬学科に十七年に入学した生徒は十九年六月までは薬学の教育を受けていたことを示している。

石川県から刊行された一次資料には乙種薬学校の件は記載されていない。記載されたものはすべて二次，三次資料である。このことから石川県甲種医学校附属乙種薬学校は存在しなかったと結論づけられる。

甲種医学校が設置されたときに，従来の薬学科はそのまま併設されて明治２０年３月まで存在した。石川県甲種医学校では堤従清（明治九年製薬学科入学）が助教諭，旗善蔵（明治十年三月製薬学科入学）が二等教諭，金沢病院薬局長として勤務していた。このように職員は医学校の基礎学科の講義と薬学科の講義とを兼て担当していた（表９）。

表９．明治１８年発行『石川県職員録』の甲種医学校の頁（２９）。

長	中濱東一郎	高知県
教諭		
兼一等	中濱東一郎	全
一等	木村 孝蔵	福井県
全	山崎兵四郎	石川県
専門学校二等教諭		
兼二等	今井 省三	静岡県
三等	中西 要	石川県
全	羽田 慎	全

助教授

二等 堤 従清 石川県

全 篠原専次郎 全

三等 水上鉦次郎 全

書記

六等 中村 尚一 全

この学制の改正の影響を大きく受けたのが示村良吉（万延元年生）である。示村は十六年三月に医学校薬学科に入学して、動物学、植物学、化学、物理学、薬用植物学、金石学、生薬学、調剤学を学んだが、一年九ヶ月の学業で十七年十二月に退学することになり、尾山病院の薬局員として勤めることになった（11）。北村三二郎（万延元年三月生）および野村徹三（文久三年一月生）及び杉江詮吉と野崎仙太郎（元治元年生）が明治十六年以後に薬学科に入学したと見られが詳しくは不明である（12）。

甲種医学校が第四高等中学校医学部に組み込まれて、明治二十一年三月三十一日に閉校式が行われた（13）。この時に従来の薬学科の教育が途絶えることになった。この混乱から生徒を救うために、堤従清、亀田伊右衛門（製薬学科卒業生）らが中心となって、金沢・西町の私立石川薬館内に「私立北陸薬学講習所」を二十一年十二月に開設した。亀田所長のもとに地方税の補助を受け、薬学生徒の教育が行れた（14）。本講習所に関する資料は少なく詳細は明かでない。明治二十二年九月に講習所は僅か9ヶ月で幕を閉じて、生徒は第四高等学校医学部薬学科に編入学した。（注5）

注1. 前史：

従来の金沢の薬学教育史では加賀藩・卯辰山養生所に薬局および舎密局が設置されたことから、ここに薬学教育の創基を置き、その舎密局・綜理高峰元種をその貢献者としていた。さらに明治三年に金沢・大手町に加賀藩金沢医学館が開設され、四年三月にP. J. A. スロイスが医学教師として着任して、患者の診療が始まり、治療薬を薬局より支給していたことから、医学館をも加えてスロイスの薬学教育への貢献を挙げていた（15）。しかし、卯辰山養生所と金沢医学館の関係史料を調査したところ、両者において薬剤師を養成するための教育を行った事実は存在しないことが明らかとなった。

卯辰山養生所の薬局と舎密局

前に触れたように、慶應二年の藩主の命により卯辰山の中腹に町民ための病気の診療を目的とした病院「卯辰山養生所」が建設され、翌年開院した。壮猶館の蘭医師達はここに移り、患者の病気の診断を行い、治療薬を与えた。ここには薬局が設けられていた（17）。この養生所で薬局の管理を担当した者は明らかではない。養生所とは別棟に「舎密局」があり、高峰元種が「惣理」となり、その外に掛員丘村隆桑、遠藤虎次郎、旗文次郎（下役）、吉田好二（補助人）が勤めて、舎利別（シロップ）や丁幾越幾斯（チンキ、エキス、薬効成分をアルコールで抽出したエキスか）、膏薬、蒸留水等を作り、薬局より患者に支給した（16, 17）。この養生所では薬剤師を養成する

教育は行われていなかった。舎密局の業務は患者への投薬の調製であった。

注：硫酸，塩酸，醋酸も作ったともある。なお，雷汞を記載したものは誤りである。

明治三年二月に金沢・大手町の旧津田玄番邸跡に金沢医学館は開設された。当初，黒川良安が総督医を勤めた。（医学館関係は先に記載したために略す。）

「医学館所務」（明治四年）には次の事が書かれている。薬局監察 四等教師一員，訓導一員充，昼夜詰切配剤其方書の相違無之哉検査し且薬品の良否鑑定は当直示談相決事。但内一員は生徒監正を兼務す。薬局係 訓蒙一員並調査役生徒の内昼夜詰切の事。（以下略す）

明治四年の職員録には薬局監察には文学四等教師松田壬作，文学訓導石川元立（考恭）が，薬局係には文学訓蒙内藤正木，不破鎖吉が就いていた（18）。さらに，藤本純吉の履歴書には，「明治十年四月二十一日石川県福井病院当直医兼薬局長並同所医学所教員」とあり，医師であった藤本が薬局長に就いていた（19）。これらの資料は金沢医学館および分館であった福井病院では医師が薬局での業務を担当していたことを示している。

スロイスの医学教育を受けて，医師として初めて藤本純吉，稲坂謙吉ら9名が，そして第二回生として21名が卒業した（20）。当時薬剤学の講義はされていたが，特別にこの医学館では薬剤師養成のための教育をした記録は見あたらない。

明治四年七月に兼六園内に医学館への入学希望者の増加のために，基礎学科の教育を目的に「金沢理化学学校」が開校したが，同年七月の廃藩置県のために翌年に閉校となった。本校に入学したものはすべて医学を学ぶことを希望する者であった（21）。

附・1. スロイスが薬学教育の重要性を説いたとすることが記載されたものがある（22）が，最も整った藤本純吉のスロイスの講義録には見られない。生理学では医学基礎としての化学の重要性は指摘している。薬剤学では「薬剤学ニ一般アリ甲ハ医学ニ属メ其健康及ヒ疾病ノ人身体ニ触レテ営ムベキ功能ヲ論ジ 乙ハ薬局学ニ属メ其製法ヲ論スル者ナリ」と記載されている。

2. 養生所舎密局は兼六園内の理化局（理化学学校）に移転し，一時中止となったが，明治七年に再びここに於いて金沢医学所製薬所となり，次いで同八年に医学所内の病院の裏方に移転した（23）。

注2. 同年代に亀田伊右衛門（嘉永六年生），英安吉（嘉永四年生）が製薬学科に入学していたと推定される（24）。

注3. 生年から渡辺為三郎（安政元年生），福島猪太郎（安政三年生），山崎銚吉（安政六年生），三木栄末（安政六年生）が製薬学科に入学していたと見られる（25）。前記の五名とこの四名が十七年の調査までの製薬学九名の卒業生と見られる。なお，野村徹三については不明である。

注4. 乙種薬学校の設置法規は，明治十五年の文部省達第六号 輪郭付（26）

七月十八日 府県，薬学通則別冊之通相定候此旨相達候事

薬学校通則

第二條 薬学校ハ之ヲ分ケ甲乙二種トス甲種ハ尋常ノ薬学科ヲ教授シ以テ薬剤師ノ具成ヲ図リ上款ニ遵ヒ之ヲ設置スルモノトス乙種ハ簡易ノ薬学科ヲ教授シ以テ薬剤師ノ速成ヲ図リ下款ニ遵ヒ之ヲ設置スルモノトス

## 第九章 教員ノ資格，員数

第十五條 乙種薬学校ノ教員中少クナクトモ一名ハ東京大学製薬学卒業生(明治十六年以降卒業ノ者)以上ノ学力アル者ヲ以テ之ニ充テ主トシテ重要ノ学科ヲ担任セシムベシ

とあり，さらに明治十八年の石川県学事報告第八号（九月十月）の「県立学校職員任免」の項には十月十五日の「木村孝蔵ハ石川県甲種医学校校長兼一等教諭ニ任シ金沢病院長申付ケラレ月俸百参拾円給與セラレタリ」は記載されているが，乙種薬学校への規則改正による職員の移動は記載されていない（27）。

明治十八年の『石川県職員録』の甲種医学校の職員の項には，乙種薬学校の職員も石川県職員であるはずであることから記載さるべきであるが，記載されていない（29）。また，前記の「薬学校通則」第十五條の「東京大学製薬学卒業生」に相当する人材は甲種医学校には居なかった。納富喜博（東大・薬卒）が十八年三月に福岡県から石川県に出向され，甲種医学校教諭であったが本人が記載した履歴書には石川県乙種薬学校の件は一切ない（28）。

さらに，堤従清（2），旗善蔵の履歴書（4）にも同様にこの件の記載はない。

注5．第四高等中学校一覧（明治二十二—二十四年）付録の「石川県甲種医学校沿革略」（13）には，「同十八年校則ヲ改修シ新ニ独逸語ヲ学科ニ加ヘ且従来ノ製薬学科ヲ廢シ更ニ附属乙種薬学校ヲ設置ス」と記載されている。さらに石川県学事報告第8号の「石川県学務沿革略記」には，「九月甲種医学校規則ヲ改正シテ一層其教規ヲ完整シ又同校ニ附属乙種薬学校ヲ設置ス此ニ於テ内部諸般ノ設備稍整フ」と記載されている（29）。九月は十八年九月である。『石川県史』（30），『石川県教育史』（31），『金沢大学五十年史』（14）にも同様の記載が見られるが，これは前記のものの引用であり，いずれも正しい記載ではない。薬学部沿革の従来への誤りの発端はこの第四高等中学校一覧の沿革略にあったとみられる。

## 第2編．石川県啓明学校，石川県中学師範学校

第1項．石川県の高等教育の前史，旧藩時代から明治五年まで．

加賀藩は藩校「明倫堂」と「経武館」を寛政二年（1790）に現・兼六園内の金沢神社のあたりに，京都より招いた新井白蛾を教導として開講した．この藩校では和漢書の解読を中心とした教育が行われていた．また，本草医学の科目を開講していたが本格的な本草学ではなかった．本藩でのオランダ医学の始まりは文久二年（1862）に壮猶館で，黒川良安，大田美農里，田中信吾，津田淳三，高峰元稔等による蘭医書の会読であった．これまでに私立種痘所を堤町に開いていたが，同年に藩営種痘所を彦三八丁目に設置した．これが手狭であったために翌年には南町に種痘所を移転した．卯辰山養生所（病院）が慶應二年（1867）に開院されたが，これを明治三年（1870）に大手町に移して，金沢医学館として開講した．

明治四年七月の廃藩置県後，本県の教育環境は不安定であり，英仏学校，変則学校，変則専門学校，変則中学校などの中等教育機関があったが，いずれも教育設備及び施設が不十分であり，正式に「正則中学校」には至らず，明治五年八月に新政府より発布された「学制」では「変則学校」に該当するものであった．明治九年二月七日に，これまでの金沢町巽中学校および英学校を廃止した．

第2項．石川県立啓明学校から石川県立中学師範学校へ．

明治八年十月に県当局は中学教員養成を目的とした中学師範学校の設立の準備を始めた．本校の主旨は教則・校則に記されている様に，“文物の煥發啓明センコトニアリ”として，従来の変則学校をすべて廃止して新しい「中学定則と同教則」を定めた（1）．明治九年二月に校名を「啓明学校」として金沢区仙石町に4学年制の学校を開校した（2）（図 56，57）．校長は県学務専任十等出仕野村彦四郎<sup>1</sup>，副校長に百束誠助<sup>1</sup>，教長に英人ランベルト<sup>2</sup>を充てた．教諭8名，助教諭5名であり，入学生徒は168名であった（3）．同校は石川県での最初の正則中学師範学校であった．明治十年一月に学科を中学師範学科として，教師養成を目的とした．同十年七月にはこの校名を「石川県中学師範学校」と改めて，中学に師範たるべき人材を養成し兼ねて文物の啓明を期した（4）．これは東京師範学校の付属中学師範学校に倣ったものであり，全国的には希な校

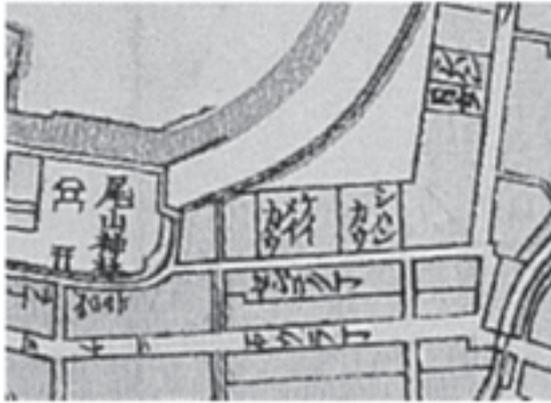


図56. 明治九年の加賀金沢細見図の一部分. 石川県啓明学校の位置を示す. 金沢市立図書館近世史料館蔵.

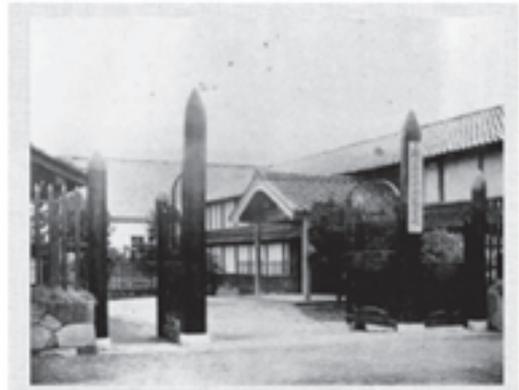


図57. 啓明学校(中学師範学校)の写真. 明治11年宮内庁撮影.

名であった。本校は県立学校であり、県税と授業料とで維持運営するものであった(5)。

#### 本校の規則(1)

##### 第一章 主意及ヒ大体

第一条 啓明学校ハ将来管下ノ文物一層開明ノ途ヲ開カンカ為メニ庁ノ特旨ヲ以テ設立スル者ニシテ本庁之ヲ直轄ス

第二条 此校ハ管下一般ノ公立学校ナレハ其経費ノ如キ固ヨリ一般ニ徴スルモノナリ而シテ廃存及ヒ経費ノ多寡増減等ハ悉皆本庁ニ於テ特裁スルモノトス

第三条 教則ハ中学師範学科ニ模倣スル者ナリ

第四条 文運未タ開ケス且科書ニ乏シキカ故ニ洋人ヲ用イテ以テ教長ト為スモノナリ

##### 第二章 教則

第一条 此校ハ専ラ他日師範学校中学校ノ教員タルヘキ者或ハ本県文物ノ為ニ洋書ヲ訳シ又ハ多少外国人ノ通弁ヲ為スヘキ者ヲ養成シ以テ管下一般ノ智識ヲ啓明センコトヲ目的トス

(以下略)

本校の職員録の資料には恵まれないが、英語教師(教長)ランベルトの他の教

諭は、数学教諭関口開、漢文教諭井口濟（喜一郎）、国語教諭沼田采江（悟郎）、河原一郎、森卷耳、漢文教諭瀬尾健造、武部直松、倫理漢文教諭大瀬直温、数学教諭上山小三郎であった。さらに助教諭として石田古周、村田則重、小島金六、大場尚連、安江雅知、加藤和平等がいた。

さらに芦野卷蔵が慶応義塾を出て、本校に教諭として着任しが僅か7ヶ月で病死した。

ところが同十一年八月にはランベルトの離任に伴い、新たに23才の米人ホイットニー<sup>3</sup>が雇用されて教長に就いた（図58）（6，7）。彼は理工系の出身であることから、物理と化学の授業も担当した。同年二月に後に触れる物理学実験機器が文部省より交付されたことから、彼はこの機器を用いた実験に重点を置いた教育をした。ホイットニーの滞在期間は11ヶ月に過ぎず、十二年七月には東京に去った。同十二年十月にはウイン<sup>4</sup>が後任教師として着任した（8）。

<sup>1</sup> 野村彦四郎

1848（嘉永元）年11月20日生（鹿児島）、明治8年7月（1875）[十等出仕]石川県師範学校 初代校長（27才）、明治9年2月石川県啓明学校校長、明治13年6月—14年4月羽咋郡長（石川県四等属）、明治14年5月—18年6月京都府一等属、明治18年7月—20年3月（1886）第一高等中学校校長、東京高等師範学校幹事、明治20年6月4日（1887）第五高等中学校初代校長（熊本）（39才）、明治22年9月3日（1889）まで約2年3ヶ月間在任。（熊本大学ホームページ）

百束誠 副校長、山形県米沢生、東京師範学校第一回卒、石川県師範学校三等訓導  
明治8年7月着任。

<sup>2</sup> ランベルト Edward Breville Lambert （英）

明治7年5月～11年5月、石川県雇い、月給150円、9年5月より175円。

<sup>3</sup> ウイリス ノートン ホイットニー Willis Norton Whitney (1855-1918)

ホイットニー一家（父ウイリアム、母アンナ、ウイリス、妹クララ、アデレード）が明治8年8月（1875）に来日して、父が商法講習所教師に就任の予定であったが、これが計画違いとなり、経済的に困難となった。そのために一時しのぎの為に、明治11年8月からウイリスが石川県中学師範学校の教師に就き、生活費を稼ぐことになった。12年7月に東京に戻り、東京大学医学部でペルツにつき医学を学んだが、翌13年にはペンシルバニア大に移り医学を学んだ。明治15年11月（1882）に再来日して、

16年5月から在日アメリカ公使館の通訳官となった。明治19年10月から東京・赤坂病院に医師（普通科，眼科）とし勤務した。明治44年（1911）に英国に帰国した。1918年10月26日没した（7）。

昭和35年にウィリス N. ホイトニーは日米修好通商百周年祭に両国関係の発展の功労者の一人として顕彰されている。

図58. ウィリス・ノルトン・ホイトニー

（1896年3月，東京滞在，41才の時の写真）

（9）。



4 ウィン， Thomas Clay Winn (1851-1931) (米)

彼は夫人と共に明治10年暮れに来日した宣教師であった。夫人は明治14年5月の金沢教会の創立に尽力した（10）。

本校では生徒を公學員\*と私學員に分け，前者には成績優秀なものが撰ばれ「東脩並授業料を納めしめす或いは貸費することあるべし」とあり，授業料は免除であった。後者は授業料を支払った。入学は毎年1月，7月の第三の土曜日として志願者を募集した。新たに入学を許す者は当分試験生とし，その生徒の学業の優劣に従い各級に編入することとした。（入学試験は無く，試験生として入学して，その能力により編入される課程（下等，上等）が撰ばれた。）

書籍は教員用書の外は，すべて自弁とした。但し学校蔵書のあるものは別であった。

\* 明治9年に公學員に最初に撰ばれたのは北条時敬（19才）であった。

毎月学費貳円を支給され，異校の寄宿舎に入った。その後補助教員となった。明治12年より石川県より派遣留学生として東京で学んだ（11）。

教則の項には，第一条に，教科を分けて甲乙兩部とし，甲部の生徒は洋書を専ら教科書として，国書，翻訳書はこれに次いだ。乙部の生徒には，国書訳書を専ら教科書として，洋書はこれを補助した。教科を下等の部と上等の部に分けて，それぞれを各四級に分けて，2年間の修業とした。全4年間の修業をも

って全科卒業と認定した。

同校の理系教科の下等，上等の教科表を表 1 0 に示す。

表 1 0 . 啓明学校教科表 (12). 理系 5 教科を示す。

下等 (最初の 2 年間)								
	第 4 級 (1 年前期)		第 3 級 (1 年後期)		第 2 級 (2 年前期)		第 1 級 (2 年後期)	
代数学	記号の解	加減乗除	括法	分数術	一元一次方程式		多元一次方程式	
幾何学	線面の種類	平行線論	円論より		諸比例より性質論まで		平面の関係論	
物理学	大意		大意		動性，動静		重力単記 6 種	
化学	—		—		大意		大意	
博物学	動物学		動物学		植物学		植物学	
生理学	大意		大意		血行及呼吸論		消食機論	

下等 2 年間では中学校程度の教育を行った。

上等 (上級の 2 年間)

上等 (上級の 2 年間)								
	第 4 級 (3 年前期)		第 3 級 (3 年後期)		第 2 級 (4 年前期)		第 1 級 (4 年後期)	
代数学	累乘法，開法		二次方程式		剪管術，級数法		弾積，対数	
幾何学	立体ノ面積，体積		諸面積～求積法		平三角法，八線変換		八線変換	
物理学	気学，音学，温学		光学		磁気学，電気学		天体気中現象学	
化学	無機体化学		無機体化学		有機体化学		有機体化学	
博物学	金石学		地質学		—		—	
生理学	運動論		神経論		五管機論		生殖機論	

大意は概論である。

次いで文系教科の上等の教科表を示す。

下等 (最初の 2 年間) 略，(上等，上級 2 年の教科表は次ページ)

また，明治十一年五月に中学生徒仮教則を作り，3 年制の中学校を併設した。

この教科表から本校の教育は，下等課程では中学校程度の教育を，上等課程では専門教科の入門程度を教えていたことが分かる。

本校に架蔵していた洋書を石川県専門学校の蔵書目録 (13) から，「啓明学校」または「石川県中学師範学校」の印影の確認出来る書籍を撰び，分類して

種類数および冊数を表 1 1 に示し、さらに書名等の書誌情報を示した

上等（上級の 2 年間）文系教科目

課目	第 4 級（3 年前期）	第 3 級（3 年後期）	第 2 級（4 年前期）	第 1 級（4 年後期）
修身学	大意	大意	大意	大意
外国語	英語学	英語学	英語学	英語学
史学	日本国ノ部	支那ノ部	露英ノ部	米日仏ノ部
	各国史	各国史	各国史	各国史
経済学	生産論	交易論	分派論	—
			消費論	
統計学	—	—	—	大意
政体学	刑定大意	民法	民法	民法
作文	紀事	紀事	雑題	雑題
体操				

この表により本校には総数 6 5 種、114 冊の洋書が架蔵されていたこと、文系書籍および語学書、辞書は合計 3 2 種、44 冊、理系書籍は 3 3 種、70 冊であったことが明らかとなった。

表 1 1. 啓明学校、石川県中学師範学校の洋書

分野別	種類数	冊数	分野別	種類数	冊数
倫理学、心理学	3	3	数学	1	1
論理学、哲学	7	1 1	物理学	8	8
教育学	3	3	化学	6	3 9
歴史学	5	9	生物学	1	2
政治・法律学	2	6	動物学	3	3
法学	3	1 0	植物学	6	9
経済学、社会学	6	9	生理学	3	3
地理・地文学	1	2	地質・鉱物学	5	5
語学	1	1			
辞書	1	1			
合計	3 2	4 4	合計	3 3	7 0

総計                    65 種                    114 冊

更に、これらの洋書の多くが、1877年（明治10年）から1880年（明治13年）に出版されたものであり、当時の最新の学術情報を入手して教育に生かされていたことが明らかとなった。

理系課程で講義に使用されたと見られる書名を次に挙げた。

数学 Robinson, Horatio N. Conic Sections and Analytical Geometry, 1878.

物理学 Stuwart, Balfour, Physics, 1876.

化学 Roscoe, Henry E., Lessons in Elementary Chemistry, 1874.

Wells, David A., Wells' Principles and Applications of Chemistry, 1874.

Eliot, Charles W., A Manual of Inorganic Chemistry, 1876

金石学 Dana, James Dwight, Manual of Mineralogy, 1877.

生物学 Hooker, Worthington, Natural History, 1879.

植物学 Gray, Asa, Gray's Lessons in Botany and Vegetable Physiology, 1879.

この中で化学書 H. E. Roscoe, “Lessons in Elementary Chemistry (1874) は32冊が架蔵され、生徒に貸し出して講義を行っていた。また、数学書が1種、1冊であったことは、関口開が講義には自著の数学書を教科書としていたから少なかった。

理系書の中に、Charles Darwin, “On the Origin of Species”(1878)が含まれていた。明治5年の金沢医学館でのスロイスの生理学の講義でダーウインが紹介されたのが我が国での嚆矢であるが、本校にも速やかに本書が購入されていたことは注目される。東京大学理学部でのモースの講義は明治10年になってからであった。文系教科では、\* を着けた書籍が教科書に使用されていた。

心理学 Haven, Joseph, Mental Philosophy, 1880.

哲学 Mill, John Stuart, Utilitarianism, 1879.

教育学 Chambers, W. & R., Ancient History, 1873,

Chambers, W. & R., Medieval History, 1872. (図59)

Guizot, M., General History of Civilization in Europe, 1877.

憲法史 Hallam, Henry, The Constitutional History of England, 1866.

政体学 \*Spencer, Herbert, Representative Government, an Essay, Moral,  
Politica and Esthetic. 1878.

\*Macaulay, T. Babington, Hallam's Constitutional History, An Essay,  
1879.

\*Spencer, Herbert, Over Legislation, An essay, 1878.

経済学 Mill, John Stuart, Principles of Social Economy, 1880.

社会学 Spencer, Herbert, The Study of Sociology, 1877.

地文学 Maury, M. F., Physical Geography, 1877.

\*Spencer, Herbert, Philosophy of Style: An Essay, 1876.

語学 \*Macauley, Lord, Warren Hastings, An Essay, 1877.

Sargent, Epes, The Standard Third Reader, 1868.

Tyndal, John, The Constitution of Nature, Scientific Materialism.  
1878.



図 5 9 . Chambers, W. & R.  
Medieval History,  
W. and R. Chambers, London, 1872.  
(Chambers Educational Course)  
チェムバルス 中古史.  
印影：上, 「石川県中学師範学校」

### 第 3 項. 文部省交付物理機器

明治 11 年 2 月 6 日に文部省は全国の師範学校に物理教育の補助のために物理機器を交付した (14).

「文部省布達番外」

「其府県公立師範学校補助之為物理器械壺組別紙目録之通交付候事」

「物理機器目録」 (以下略)

その内容は物理論 (物性学) 11 点, 稱水論 (水学) 10 点, 気論 (気学) 22 点, 熱論 (熱学) 12 点, 電気論 (電気学) 19 点, 磁気論 (磁気学) 15 点, 音論

(音学) 10 点, 視論 (光学) 9 点, (合計 110 点) 及び前文要略 (説明書) 8 点であった。この機器目録と後に触れる資料「旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及目録」(第四高等中学校, 明治 21 年 8 月)(以下「引継目録」と略記する)(15)の「物理機器」リストと比較した結果, 両目録に記載された機器のカタカナ記載および翻訳記載が同一であり, また記載された機器の並び順が似ていること—特に電気論と磁気論の機器の並び順は一致している—により, 石川県中学師範学校にも, この「物理機器」110 点が交付されていたこと, その機器が石川県専門学校に受け継がれていたことが初めて明らかとなった(16)。

表 1 2 に文部省交付物理機器と引継目録に記載の物理機器の器機分類と点数を記した。機器の中には, 米国 Boston・Ritchie 社の School Apparatus(1869)のリストに記載された機器もあることが確認された。

表 12. 文部省交付物理機器数, 引継目録記載の機器数および現存機器数

機器分類	文部省 交付数	引継目録 種数, 点数	引継目録 記載種数, 点数	現存数
物理論	11	10	24/61**	10
稱水論	10	7	15/20	1
気論	22	13	24/32	6
熱論	14	9	16/23	4
電気論	19	18	50/74*	13
磁気論	15	15	- *	12
音論	10	10	13/19	6
視論	9	8	15/20	6
合計	110	90	160/249	58

\* 電気論と磁気論の機器の種数, 点数

\*\* 種数/点数 を示す。

注: 機器の種数の数え方, セットの組み方の違いが見られ, 相互に誤差が生じている。

これら 110 点の物理機器については、従来は「アメリカの会社より購入された理化学器械が各府県に配布された」と記すものはあるが、詳しい調査はされていなかった (17)。さらに、中川による調査の結果、配布された機器目録 (上記の「物理機器目録」) の存在は明らかとなったが、機器そのものの存在は明らかではなかった (18)。そのために具体的に物理機器の同定作業は不可能であり、Ritchie 社の教育用機器のカタログ *School Apparatus* からの機器セットを購入したと推測する域でしかなかった。

今回の調査・分析により、本学に収蔵されていた旧第四高等学校の物理機器の中に、Ritchie 社の製品があることが確認され、さらに *School Apparatus (1869)* を元にした、文部省購入の機器も存在することが明らかとなった。文部省の「機器交付目録」と「引継目録」との比較から、表 1 2 に示した様に、58 点の物理機器が本学資料館と石川県立自然史資料館に現存することが初めて確認された。これは全国で初めての発見であり、物理学史学会への報告も行った (19)。金沢に保存されていたこの 58 点の機器のうち、Ritchie 社製ラベルのある機器は 2 点で、マグデブルグの半球と金属長径膨張試験器 *pyrometer for demonstrating linear expansion* である。残りの機器には製作所のラベルは認められない。これは文部省が機器セットを Ritchie 社より数セットのみ輸入して、これを元に東京の機械製作所に製造させていたからである。

\* Ritchie 社

1. Edward Samuel Ritchie(1814-1895)が 1850 年に N. B. Chamberlain と機械、電気機器の製造・販売のために Boston に設立した会社である。Chamberlain は直ぐに去り、Ritchie が一人で経営したが、その後、社名を E. S. Ritchie & Son (1866)及び E. S. Ritchie & Sons (1867)としていた。教育機器の他に船舶用コンパスなどの航海用機器の生産・販売を行って居た。現在も Ritchie Navigation, Pembroke, Mass.に存在する。(web, Wikipedia)

先に、中川は殆どの交付機器は輸入した機器を元に国産化していたものであったことを示唆していた。恐らく当時、東京には長田銀蔵ら数人の理化学器械製造業者が機器の製造をしていたことから、これらの機器は東京で製造されたものと推定した (18)。ところが、東京開成学校の「製作学教場」において、明治七年に教育カリキュラムとして理化学器械の製作が取り上げられていた

(20). ここでは翌八年には 140 余種、2400 余点が作られ、明治十年度には諸府県の囑託に応じて 21 組の中学・小学校用物理機器を製造して送って居た。また、この年の内国勸業博覧会には、東京大学理学部工作場の製品としてこれらの物理機器が出展された。その出品解説(20)に記載された機器名を文部省交付物理機器の目録と比較すると、同名の機器が多く確認出来る。先に触れた長田銀蔵はこの工作場の工作方であり、他に製作方 3 名と日雇い工作方手伝い 2 名がいたことが知られている。その後、長田は精錬社に入り、教育博物館(現・国立上野博物館)の依頼で教育用理化学機器の製作を行っていた(20, 21)。

これらの事実から、明治十一年の文部省交付物理機器 110 点は、この東京大学理学部工作場で Ritchie 社製の機器を基にして、製造されたものと考えられる。図 60 にその一部を示した。本学に現存する文部省交付物理機器と明治十五年に京都・島津製作所が発行した我が国で最初の「理化器械目録表」の機器図と比較すると、同名のものが多く認められるが、機器の構造では細部に多くの違いが認められ、同所で製作された機器では無いことは明らかである(22)。

図 60. 文部省交付物理機器目録に記載された現存する物理機器の一部。



上段：水分析器，電信器雛形，風琴管。

下段：眼球模型，透鏡一組，遠心力試験器。

これまで啓明学校の学風は文学系に偏りがちであり、理化学は「付属科」の様相であった。しかし、ホイトニーが着任して物理学と化学の授業をも担当して、実験を授業に取り入れたことにより矯正された。その結果、明治十一年十月四日午前九時四十分（金曜日）より北陸巡幸中の明治天皇が同校を視察された際には、第一教場（実験・実習室，図61）においてホイトニーの指導のもとに上等三級（3年後期）の生徒2名が「理学電気作用」および「通信並磁石ノ発生等」の実験（上等三級林文五郎，金子重太郎）を，他の2名が「化学，水素酸素定性試験，燐酸並び炭酸の発生及び水三両素拍合等」の実験（上等三等早崎信太郎，同四級米山高麗太郎）を天覧した（23）。両実験は交付された物理機器を用いて行われたものであった。前者は「電信雛形」（電信機模型）でのモールス電信の実験，後者は「デコンポーシングセル」（水分析器）での水の電気分解である。両実験では，これも交付機器である「ブンゼン電池」を電源として用いた。

図61はこの時の本校の建物の図面を写したものであり，部屋の大きさは「引継目録」に記載の値である（15，23）。第二教場においては武部直松教諭の指導で「英書フヲセツト氏経済学\*」から「富ハ開化ノ度ニ依テ増減スルノ論」を上等三級杉中利平次と同四級平岩佐一郎による翻訳を，第三教場においては井口済教諭の漢籍講義で「漢籍，唐宗八大家文章性情論」を下級一級篠田温良，同三田忠直のよる解説の授業が行われた。

\* M. G. Fawcett, "Political Economy, for Beginners," (1875).

この日は雨天であり，全生徒による天皇の出迎えおよび見送りは出来ず，教員代表者が本校の玄関前で行なったと記録には記されている（23）。

第4項．啓明学校，石川県中学師範学校の卒業生。

本校の卒業生のリストは存在せず，田中鉄吉「郷土数学」（24），上山小三郎，田中鉄吉編「関口先生小伝」（25）および文献（23）を元にし，さらに各個人をネット上で検索して調査した結果をまとめた（表13）。しかし，資料が錯綜して，特に中学師範学校と石川県専門学校にまたがって学んだ生徒については資料が十分では無く，本表は完成の域に及ばない。此の後のさらなる調査が必要である。

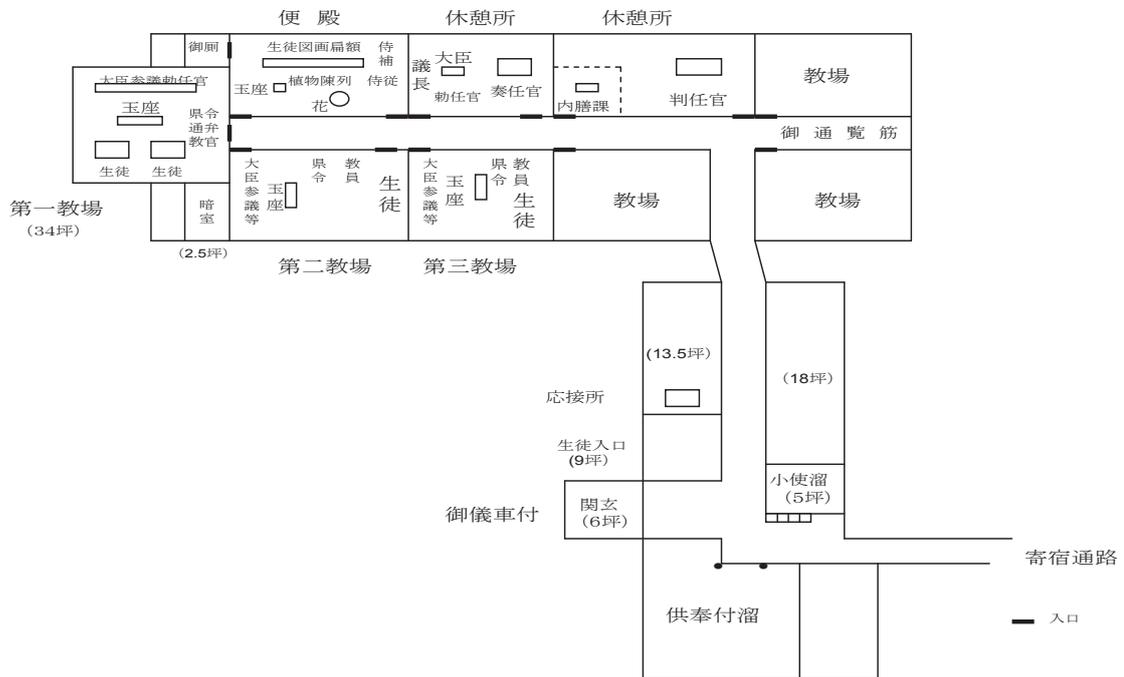


図 6 1 . 石川県中学師範学校の平面図. 文献 15 および 23 より作成.

以下に卒業生氏名と卒業後の職業を記載した.

表 1 3 . 啓明学校, 石川県中学師範学校の卒業生.

氏名	卒後の職業・地位	氏名	卒後の職業・地位
戸水寛人	帝国大学法科大学教授	河合十太郎	理博, 数学, 京都大教授
森外三郎	理学士, 第三高等学校教授	田中鉄吉	第四高等学校教授
大島熙	石川県専門学校教諭	加藤和平	石川県専門学校教諭
北条時敬	理学士, 学習院院長	上山小三郎	石川県中学師範学校助教諭
早川千吉郎	東京大法, 官僚, 実業家, 政治家	小幡文三郎	海軍造船少将
三宅雄二郎 (雪嶺)	東京大哲学, 哲学者	中橋徳五郎	法学士, 文部大臣
井口在屋	工学博士, 東京大学工学部教授	鈴木交茂	石川県専門学校教諭
浅木茂三郎 (中学師範学校数学専修科中退)		水島辰男	陸軍少佐
上原直松	石川県専門学校三等助教諭	堀 議太郎	岡山師範学校校長

明治 11 年 10 月当時の在校生 (23)

平岩才一郎\* 「英語階梯」 編者, 敬文館, 明治 37 年 4 月.

杉中利平次\* 「英国金融事情」, Walter Bagehot 著, 小池精一述, 杉中記, 経済学講習会  
経済雑誌社刊, 明治 16 年 9 月出版.

籠田信次\* 石川県立工業学校 4 代, 6 代校長, (明治 27 年—明治 28 年) 石川県職員.

渡辺義郎 石川県専門学校三等助教諭

福島和吉郎 陸軍大学卒, 少将, 壱岐要塞司令官.

林文太郎 軍人

林文五郎 岡山高梁中学校校長

篠田温良 石川県尋常中学校助教諭

鈴木馬左也 (宮崎) 啓明学校明治 9 年, 1 年間在学, 住友, 第三代総理事

横地石太郎 (明治 10 年 4 月の在校生) 後に上京して私塾, 第一高等学校, 東大理・化学  
に入学. 卒後, 山口高等学校教授 (28).

早崎信太郎 東大理学部進学, 卒後, 死亡.

土岐横 日本銀行重役.

金子重太郎 関西の高等女学校長.

竹村勇次郎 夭折.

---

三田忠直, 山崎勇, 北川正一, 野村 紀, 三宅菊三郎, 藤田松五郎,

松山五七郎 米山高麗太郎 不詳

---

\* 石川県専門学校卒業生の項にも記載.

以上記載した資料からも, この学校では設備および図書は十分なものではなく, また外国人に依存した教育であり, 高度な理科教育ではなかったことが分かる. 恐らく他の科目でも同様なものであったと見られる. その結果「校内外からの批判や書籍機器の充実の必要性」が強く求められ, これが高等専門学校への昇格運動へとなった (26).

しかし, 本校で特筆されるべきことは, 数学教師関口開が教鞭を取っていたことである. その門弟には北条時敬 (石川県専門学校教諭, 師範学校長, 東北帝国大学総長, 学習院長等を歴任) や中橋徳五郎 (特許局審判官, 文部, 商工, 内務大臣を歴任) らをはじめ多くの優れた人材がいたことである (表 10) (27). 明治十四年七月に本校は校名を「石川県専門学校」に改めて, 新しい高等教育が始まった。

### 第3編. 石川県専門学校

第1項 石川県専門学校の開校.

本校の設立について、『文部省第九年報付録』『石川県年報』（明治14年分）によれば（1），

「本校ハ旧金澤藩治ノ時ニ當リ 明倫堂及致遠挹知等ノ諸学校アリ 此学校ヲ合一シタルモノ即チ之ヲ本校ノ起源トス 爾来数次ノ沿革ヲ経テ 明治九年校名ヲ啓明ト称シ 大ニ旧觀ヲ改メ和漢洋ノ三学科ヲ教授ス 爰ニ始テ本校ノ基礎確定セリ（中略）爰ニ於テ又更ニ当初ノ目的ヲ改メ 英才優秀ノ士ヲ養成スル純然タル法理文ノ専門学校トナサントスルモ 其学科タル頗ル高尚ニ涉リ得失モ亦大ナルヲ以テ 先ツ其教則ヲ実施シ 成績如何ニ因リ決スル所アラントス 是実ニ明治十三年四月ナリ 同十四年七月 中学師範学校ヲ現今ノ校名ニ改メ学科ヲ改正ス」

とあり、英才優秀の士の養成することを目的とすることを基にして、中学師範学校を改めて石川県専門学校として明治十四年（1881）九月に発足した。校舎は従来のもを仙石町のもを引き継いでいた。本学では修業期限を6学年として、初めの3年間は予備科修業、後の3年間は各専門科修業として、専門科には法理文の三学科を置いた。教育は「学生ノ所志ニ任セ各一学科ヲ教授シ、併セテ広ク百家ノ著書ニ就キ其蘊奥ヲ探求セシメ、或ハ學術ヲ講談スルニ慣レシム」ことを主旨として、学生の意向を重んじていた。なお、予備科は明治十七年度（1884）に廃止されて、新たに初等中学科が設置され、8月に規則が改正されて施行された（2）。

本校は専門教育を目指したものであり、当時の公立学校としては全国的にも異色の存在であったが（3, 4）、明治十九年の「学校令」および二十年の「高等中学校の設置令」により、本校は僅か7年間で同年9月に第四高等中学校の発足となり、翌二十一年（1888）三月には閉校された（5）。

本校は当時の戸籍では石川県金沢区仙石町三十七番地に約千坪（3300 m<sup>2</sup>）の敷地（現在の金沢市中央公園の仙石町通りに面する一部）に、全校建物十棟（坪

数五百三十三坪二歩五厘，約 1763 m<sup>2</sup>）の建物があった．このうちには三十四坪（112 m<sup>2</sup>）の化学実験室，十二坪（40 m<sup>2</sup>）の博物室，九坪（30 m<sup>2</sup>）の物理実験室，百四十一坪（466 m<sup>2</sup>）の教室（全教室を合計したものと見られる）等があった（啓明学校の項の 111 頁，図 6 1 参照）(6)．「引継目録」には「地所建物図」と記載されているが，得られた目録には図面は付いていない．この建物は明治二十年に第四高等中学校に引き継がれ，明治二十三年に新しい建物が広坂通りに建築されるまで使用されていた．

本校の教職員は，初代校長は沼田采江\*で，教員は約 14 名（明治十四年）であり，その構成は教諭 2 名，助教諭 7 名，助手 2 名，他学校よりの教諭 2 名，助教諭 1 名であり，その学歴は法学士 1 名，理学士 1 名であった (7)．明治 18 年の石川県職員録（表 1 4）(8)，明治 20 年に第四高等中学校に移管された時に記るされた資料 (9) および「職員履歴，第一輯」(10) によれば（表 1 5），校長武部直松（金沢巽中学校卒，東京府下共慣義塾卒，3 等教諭），教諭本間六郎（文学士，東京大学文学部卒，2 等教諭，外国語，地理，歴史担当），今井省三（理学士，東京大学理学部化学科卒，2 等教諭，外国語，化学担当），北条<sup>ときゆき</sup>時敬（理学士，東京大学理学部数学科卒，2 等教諭，外国語，数学担当），田上省三\*\*（法学士，東京大学法学部卒，2 等教諭，外国語，法学担当）の四学士，ほかに外人英語教師（オルラント・ベントン）1 名と，博物学，倫理・漢文，数学，国語・漢文・歴史，外国語・物理・化学，地理，兵式体操等を教授する助教諭および助手が 16 名であり，事務官を含めた総数は 23 名であった．本校の特徴は，高齢であった井口，関口の二人を除くと，教職員の平均年齢は 23.7 才と非常に若いものであった（表 2）．漢文教諭は藩政期に加賀藩壮猷館で学んだ者（井口濟）であり，兵式体操の教員助手は大石篤治で明治十年の西南戦争で九州に出兵した者であった．また，石川県中学師範学校および石川県師範学校の卒業生 3 名，本校卒業生 5 名が助教諭あるは教員助手にいた．今井，本間，大石を除いた総てが地元・石川県の出身者で占められていた．中学師範学校から移った教諭の関口開（数学・三等教諭）と井口濟（漢文・三等教諭）がいたが，両人は明治 17 年に現役中に没した（11，12）．

\* 沼田采江（悟郎） 石川県専門学校初代校長（13）．

嘉永 4 年（1851）生，明治元年北越戦争へ従軍（18 才），2 年東京で勤学，3 年 11



石川県専門学校の職員

担当学科	氏名	生年月日	出身地	最終学歴	着任年月日	その他	年齢
校長	武部直松	嘉永4年12月	金沢区飛梅町	東京府下共済義塾、金沢巽中学校(明xx卒)	M14年12月26日	3等教諭	30
第一外国語	オルランド・N・ベントン		米国		M18年9月5日	校長	34
教諭							
第一外国語、地理、歴史	本間六郎	万延元年8月	静岡磐前郡平田町	東大・文・政治理財卒(明xx卒)	M18年7月11日	2等教諭	25
第一外国語、化学	今井省三(せいぞう)	安政2年1月	静岡、(生)江戸湯島	東大・理・化学卒(明14)	M20年2月10日	教諭	27
第一外国語、数学	北条時敬(ときゆき)	安政5年3月	金沢区観音町	東大・理・数学科卒(明18)	M14年9月	2等教諭	26
法学、第一外国語	田上省三			東大・法卒(明18)	M18年7月11日	2等教諭	27
博物学	大島多計比古	安政4年12月	金沢区尻垂坂通	東京師範・中学師範卒(明12)	M18年7月1日	3等教諭	28
数学	関口 開	天保13年6月	金沢区泉町	私塾	M14年12月	3等教諭	40
漢文	井口 濟	文化9年12月	金沢区	私塾	M14年12月	3等教諭	69
英語	杉中利平次						
助教諭							
倫理、漢文	大瀬直温					1等助教諭	
数学	鈴木交茂					1等助教諭	
	森巻耳					2等助教諭	
	林文五郎					2等助教諭	
数学	田中鉄吉(おのきち)	文久元年8月	金沢区土取場撞木町	石川・中学師範・数学科卒(明13)	M17年7月3日	3等助教諭	23
数学	得田 紘(たがへす)	安政4年5月	石川郡吉田漆島村	石川・師範・小学師範卒(明9)	M16年1月23日	3等助教諭	26
助教諭試験							
漢文	瀬尾健造					助教諭試験	
国語、漢文、歴史	三宅少太郎	安政元年3月	金沢区片町	石川県麥剛学校(漢学)(明6)	M16年3月9日	2等助教諭	29
漢文	大島熙(ひろし)	万延元年1月	金沢区笹ヶ町	石川中学師範・漢文専修卒(明13)	M14年12月26日	3等助教諭	21
	渡辺義郎			石川県専門学校文科卒(明16)	M16年	3等助教諭	
物理、化学?	駒井 寛			石川県専門学校理科卒(明治17)	M17年	教員助手?	
第一外国語、数学	奥田頼太郎	安政6年8月	金沢区巴町	石川県専門学校文科卒(明17)	M17年3月25日	教員助手	23
第一外国語	木村尚(たかし)	元治元年11月	金沢区大田町	石川県専門学校文科卒(明17)	M17年3月6日	教員助手	20
数学	小島 金六					助教諭試験	
第一外国語	石田鼎一(ていいち)	慶応2年12月	金沢区野田寺町桜木	石川県専門学校文科卒(明18)	M18年3月9日	教員助手	19
第一外国語	伊藤亥之吉	文久3年7月	金沢区下中島町	石川県専門学校文科卒(明18)	M18年3月9日	教員助手	22
第一外国語、物理、化学	上原直松	元治元年10月	金沢区仙石町	石川県専門学校理科卒(明治18)	M19年3月2日	教員助手	22
地理	藤井鏡(あきら)						
漢文、歴史	雲田平太郎	安政2年6月	金沢区松枝町	石川県師範学校小学授業卒(明8)	M16年7月1日	3等助教諭	28
教員助手						助教諭試験	
兵式体操	大石篤治	安政3年3月	富山射水郡加納村	後備郡駆員陸軍歩兵一等軍曹	M20年3月22日	教員助手	31
事務官	増野唯宣					書記心得	
	吉村政行	安政3年12月	金沢区新野町	東京開成学校(明8)	M16年5月	4等書記	27
					M17年9月	助教諭	

入学資格は「第二章 入学制限，第二条」によれば

「身体健康年齢十二年以上ノ男子ヲ初等中学科ニ，法学理学文学ノ三科  
デハ十六年以上ノ男子ニシテ 本校所定ノ附属初等中学科以上ノ学力  
ノアルモノ」

が入学を許可された。また，本科理学科への入学試験では，理科（生理学初歩，  
植物学初歩，普通物理学 問答，講義），数学（代数学，幾何学），図画（着色  
法，正写画初歩）が課せられたが，化学の試験は含まれていなかった。

次に「第五章 教授ノ要旨」（シラバス）が記されているが，ここには理科か  
ら物理学と化学，法科から本邦法律と英米法律，文科から英語，和漢文のシラ  
バスを挙げる。

#### 第一条 附属初等中学校各学科教授ノ要旨

##### 第十一款 物理

本科ハ両間万物ノ現象ヲ講明スルモノニシテ諸科ノ學術ト緊密ノ關係ヲ有  
シ百工技芸ヲ進歩スルニ与カリテ頗ル有益ナル故ニ其授業ヲ懇切ニシテ器  
械上ノ試験図画ノ説明ニヨリテ事理ニ明瞭ナラシムヘシ

とあり，予備科の第三級（2年生後期）の「物理学初歩」（週 4 時間）及び第  
一級（3年後期）の「物理学初歩」（週 6 時間）の学習要旨である。これに続き  
本科理学科の物理学講義では

#### 理学科 各学科教授ノ要旨

##### 第二款 物理

本科ハ両間万有ヲ講究スル學術ノ一大部ニシテ諸科ノ學術ト密着ノ關係ヲ  
有シ百般ノ工芸技術此学科ノ恵ニ由ル少ナカラス其用極メテ広大ナレハ教  
授ノ際ニ於テハソノ説明ヲ緻密ニシ其理義ヲ明瞭ナラシムルニ厚ク意ヲ注  
ク可シ而シテ教授ノ次序ニ於テハ先ツ始ニ学科ノ積義ヨリ運動ノ法則天然  
力及活力ノ諸性並ニ其循環ノ理ニ説キ及ホシ次テ諸種ノ活力ノ効用ヲ教授  
シ進ンテ物力動及水学等ヨリ序ニ順ヒ磁学電学等ヲ講究セシムルヲ要ス  
と記して，運動の法則，力学，水学（液体の物理的性質），磁気学，電気学を教  
授するとしている。

##### 第三款 化学

本科ハ万有学ノ一大部ニシテ万物ノ成分及其変化ノ理ヲ闡明スル学科ニシ

テ百般ノ製造技芸ヲ改良進歩セシムルニ与リテカアルノナレハ理学科中ノ物理ト並ヒテ專習セシム可キモノナリトス而テ教授ノ次序ハ化学ノ總論ニ於テ化学ノ積義区域及諸名義述語ノ解説ヨリ非金属ニ関スル諸論ヲ授ケ次テ塩基諸論ニ及ホシ有機化学ノ大意ニ通曉セシメ漸ク進ンテ更ニ高尚ナル無機化学ヲ教授シ之ヲ終ルノ後チ有機化学ニ入り後チ定性定量ノ分析術ニ熟練セシメ吹管分析ヲ修メシム

但本科ニ於テハ最モ実験ノ養成ニ意ヲ注キ唯ニ書籍上ニ理ヲ講スルノ弊ニ陥ルナカラン事ヲ要ス

化学では熟語の解説に始まり、非金属、塩基、無機化学、有機化学に及び、定性・定量実験および吹管分析実験を行っていた。当時はまだ機器分析は無かった。

法学科各学科教授ノ要旨

第二款 本邦法律

本科ハ本邦現行諸法規ニ通曉シ訴訟手續ニ習熟セシメ兼テ我国古代法律ノ端緒ヲ知ラシメ我邦固有ノ法律ヲ修学セシメン事ヲ要ス

第三款 英米法律

本科ハ本邦ノ諸法律ヲ講究スルノ資料ニ供センカ為メニ授クルモノニシテ其体ニ拘泥セス専ラ其精神ヲ利用シテ以テ大ニ本邦法律ヲ研究スルノ用ニ供セン事ヲ要ス

(以下略)

法学科では我が国固有の法律の学習及び英米の法律を学び、その精神を利用して我が国の法律を研究することを学んでいた。

第五条 文学科各学科樹上ノ要旨

第二款 和漢文

本科ハ支那歴代諸名家ノ文章ヲ讀ミ漢文ヲ作ルノ資材ニ富マシメマタ詳ニ篇章字句ノ法ヲ説キ支那古文ノ簡約ニテ意味深遠ナルヲ知ラシメ時々文題ヲ与エテ作文ノ巧拙ヲ試ミ漸ク進ンテ詩ヲ賦シ和歌ヲ詠スルノ法ヲ教ヘ又題ヲ与ヘテ之ヲ作ラシメ和漢文ニ長シ其志ヲ道ヒキ其辞ヲ達シ其筆ヲ執ルニ方リ惟意ノ向フ所投シテ可ナラザル無カラシメンヲ要ス

第三款 英語

本科ハ先ツ始メニ高尚ナル英文法ヲ課シテ精密ニ文法ヲ習熟セシメ次テ  
修辭法ヲ授ケ其文章ヲシテ雅致ナラシメ漸次高尚ナル名家ノ論文ヲ読マ  
シメ以テ正格ナル英文ヲ綴ラシメン事ヲ要ス

文学科では和漢文の学習および英語の学習を行い、高尚な有名作家の文章を読むことが出来るようになる様に教育することを心がけていた。



図 6 2. 代数学入門. トドハンター著.

Isaac Todhunter, Algebra for Beginners,  
With numbers examples, new edition.  
Macmillan and Co., London, 1883.

本校の蔵書印の印影を示す.

本学の文科の課程表（表 1 6）および理科の課程表（表 1 7）を次の挙げた。

表 1 6. 石川県専門学校の文学科の課程表

学科	時	第一級	時	第二級	時	第三級	時	第四級	時	第五級	時	第六級
和漢文	3	漢文 春秋左氏伝	3	漢文 春秋左氏伝	3	漢文 八大家文 読本	3	和文 八大家文 読本	3	和文 文章軌範	3	和文 文章軌範
英文	3	作文 諸大家名文	3	作文 諸大家名文	3	作文 諸大家名文	3	作文 修辭法	3	作文 修辭法	3	作文 修辭法
歴史	3	清鑑 易知録	3	明鑑 易知録	9	綱鑑易知論  大日本史 開化史	3	綱鑑易知録  大日本史 開化史	3	綱鑑易知録  大日本史 近世史	3	日本政記  太古史 中古史
論理学			3	ゼーボン氏 論理学	2	ゼーボン氏 論理学						
政治学	4	用書未定	4	全上			3	用書未定	3	全上	3	全上
経済学	6	ミール氏 経済学	4	ミール氏 経済学	4	ミール氏 経済学	3	ホーセット氏 経済学	3	ホーセット氏 経済学		
哲学	5	ベール氏 修身学 ミーレ氏 利学	4	ベーン氏 心理学 論語 孟子	3	ベーン氏 心理学						

この課程表に基づく講義では次の書籍が教科書として使用されていた。

この課程表に基づいて講義では次の書籍が教科書として使用されていた。

論理学：Stanley W. Jevons, Logic, 2<sup>nd</sup> edition, Macmilliam and Co., London, 1876.

経済学：John Stuart Mill, Principles of Political Economy, peoples edition. Longmans, Green, and Co., London, 1880.

経済学：Millicent Gawett Fawcett, Political Economy for beginners, Tokio Bookselling Company, Tokio, 1883. (翻刻版)

修身学：Alexander Bain, The Emotions and the Will, Longmans, Green, and Co., London, 1880.

心理学：Alexander Bain, Mental and moral Science, part 1, Psychology, and History of Philosophy, Longmans, Green, and Co., London, 1879.

哲学：John Stuart Mill, Utilitarianism, 7<sup>th</sup> edition, Longmans, Green, and Co., London, 1879.

これらの書籍は本校の図書室に架蔵されて、授業のために貸し出されていた。この様に原書を使用した講義が、本校では盛んに行われた。

フォーセットの経済書は当時、多くの学校で使用されたものであり、東京書籍出版社より翻刻版の書籍が製作されて販売されていた。この他に東京大学哲学科からも翻刻版書籍が製作されて教科書として使用されたものもあった。

次に理科の課程表(表17)を示した。この課程表で物理学について見ると、本科1年前期(第六級)では普通物理学,(週6時間),同後期(第五級)では普通物理学,(週6時間),2年前期(第四級)では物・力・動通論,重学,水学,(週6時間),同後期(第三級)では聴学,熱学,(週6時間),3年前期(第二級)では,視学,熱学,(週8時間),同後期(第一級)では,磁気学,電気学(週8時間)の授業があった。特に物理実験の記載は無いことから,講義での演示実験が行われていたと見られる。

また,地文学,地質学,金石学,動物学,植物学では,課程表に示されている様に,入門者用の洋書を用いて授業を行っていた。

本科の理系及び文系課程表はでは,学年は第六級より始まり,半年の学期毎に,

進級し、第一級が最高学年であった。

表 17. 理科 学科課程表

学 科	時	第一級	時	第二級	時	第三級	時	第四級	時	第五級	時	第六級
物理学	八	磁気学 電気学	八	視学 熱学	六	聴学 熱学	六	物・力・動 通論、重学 水学	六	普通物理学	六	普通物理学
化学	八	分析化学 製造化学	八	分析化学 製造化学	六	有機化学	六	無機化学	六	普通化学	六	普通化学
地文学												二 ギーカイ氏 地文学
地質学									二	ニコルソン 氏 地質学		
金石学								二	ダナー氏 金石学	二	ダナー氏 金石学	
植物学					二	グレー氏 植物学						
動物学					二	ホークル氏 動物学						
生理学								二	ホクスリー 氏 生理学			
星 学												二 ロックル氏 天文学
数 学	六	積 分	六	円錐曲線法 微 分	六	平三角 球三角	六	高等代数 高等幾何	六	高等代数 高等幾何	六	高等代数 高等幾何
図 画	二	製図式	二	諸器械模写 正写画法	二	地図法	二	写生法 着色法	二	実用平面 幾何画法	二	平行配置法 風景配置法

注. 表中の著者名の記載された教科書は、資料「洋書支給命令書」および「第4高等中学校洋書目録」、「引継目録」を用いて、各書籍を確認した。

この課程表の講義では、次の書籍が教科書として使用されていた。

- 地文学 Geikie, A., Elementary Lessons in Physical Geography, (1877) Macmillan, London.
- 地質学 Nicholson, H. A., Text Book of Geology, (1879)
- 金石学 Dana, E. S., Text Book of Mineralogy, (1887) New York.
- 植物学 Gray, A., Gray's Lessons in Botany and Vegetable Physiology, (1879) Ivison, Blackeman, Taylor, New York.
- 動物学 Hooker, W., Natural History, (1879) Harper & Brothers, New York.
- 生理学 Huxley, T. H., Lessons in Elementary Physiology, (1878) Macmillan, London.
- 星 学 Lockyer, J. N., Elements of Astronomy, (1878) D. Appleton, New York.
- 本専門学校の物理学を担当した教官についての資料は僅かである。明治14年に同校が開校した時には、物理学を担当する理学士はいなかった。助教論また

は助教諭補（試補）が、恐らく旧中学師範学校から移った者が担当していたと推察される。この人物も明治十六年には病没して欠員になっていた（1）。専任助手として上原直松（石川県専門学校理学科，明治 18 年卒）が勤めていた。明治二十年九月に第四高等中学校が発足して，専門学校の教官 21 名がこの新しい学校に移っているが，その中には物理学の教諭は含まれていなかった（9）。同中学校には物理学の飯盛挺造が東京大学より教頭として着任した（10）。

当時の講義は，主に洋書の翻訳・講読であった。同校で購入された物理学洋書の中で特に多数冊が購入されたのは，Stewart, B., Science Primers, Physics, 6<sup>th</sup> edition, Macmillan & Co, London, 8 冊であった（16）。これは予備科の物理学初歩でも使用されたものである。また，西田幾多郎は明治十九年九月から二十年十一月二十一日まで，同校附属中学校 3 年生であったが，彼はここで「教科書といっても，（中略）物理はスチュアート，化学はロスコ，（以下略）」と記していることが，先の事柄を裏付けている（17）。

ロスコーの化学入門書は，当時盛んに使用された教科書である。

H. E. Roscoe, Lessons in Elementary Chemistry, Inorganic and organic, new edition, Macmillan & Co, London, 1874.

### 第 3 項 書籍

本校で購入・収蔵した洋書は，総書籍は約 425 種で冊数は約 1400 冊であった（表 18）（6，16）。その中には，加賀藩が購入した洋書 56 点が含まれていた（表 19）。これらは壮猶館，軍鑑所，弾薬所，藩校に架蔵されていたものである。医学館に架蔵されていた医学書およびその他の書籍は，先に触れた様に甲種医学校の設置後は私立尾山病院に架蔵されていた。本病院が閉鎖された後は，官立金沢医科大学に移管されていた。

表 1 8 . 石川県専門学校 の 洋書 集計 . ( 16 )

分 野	石川県専門学校 引継目録		第四高等学校 支給命令票		第四高等学校 洋書目録	金沢大学附属 図書館	
	1. 種数	2. 冊数	3. 種数	4. 冊数	5. 種数	6. 種数	7. 冊数
数 学	38	106	3	8	31	28	36
物 理 学	38	51	1	1	35	33	39
化 学	26	70	0	0	29	28	34
生 物 学	49	78	1	1	59	58	69
鉱 物 学	12	26	0	0	10	14	20
星 学	4	15	1	1	5	5	6
航 海 学	1	1	0	0	2	2	2
小 計	168	347	6	11	171	168	206
倫理, 哲学, 教育学	40	75	2	2	38	35	41
歴 史 学	29	65	0	0	28	28	57
政治学, 法律学	38	59	2	2	36	37	47
経済学, 社会学	31	59	1	1	30	31	43
地 理 学	23	148	1	2	11	10	12
図 学	8	8	0	0	6	7	8
語学, 文学	73	587	0	0	67	53	73
辞 書	12	39	0	0	10	15	38
芸 術 学	3	3	0	0	3	2	2
小 計	257	1043	6	7	229	218	321
総 計	425	1430	12	18	400	386	527

表 1 9 . 石川県専門学校 に 架蔵 されて いた 加賀藩 購入 の 洋書

数学書	7	歴史書	13
物理学書	5	政治学書	1
化学書	5	法学書	1
星学書	2	語学書	7
地理書・地図	8	辞書	7
		合計	56冊

詳細は「加賀藩旧蔵洋書目録」(18)を参照のこと。

本校の「図書利用規則」によると、教科書は個人で購入する物ではなく、図書室で一括購入して、生徒には有料で貸し与えていたことが、図書室の規則に記載されている。

#### 第十章 教科用図書貸与規則

第一条 本校所蔵図書ノ内生徒ノ願ニ依リ課業用ノ分ニ限り貸渡ス

## ヘシ

### 第四条 図書借用中ハ毎日三十日限り制定ノ借料ヲ納金スヘシ

#### 第十一章 引用図書貸与規則

第一条 本校別ニ引用ノ為メ備置ク所ノ図書ハ本校吏教員元ト本校ニ奉職セン吏教員本校卒業生及ヒ法理文三学科生徒ニ限り借用閲読スルヲ得可シ

従って、教科書として使用された書籍は殆どが多量に購入されていたが、現存しているものは僅かである(16)。例えば先に挙げたロスコーの化学教科書は32冊が購入されていた。また、東京で翻刻版が作られ全国で使用されていた。フォーセットの経済学書はこの例である。

当時の予備科では「専ラ英書ヲ用イ諸學術ノ初歩ヲ授ケ以テ法理文ノ三学科ニ入ルヘキ階梯トス」(19)と記されている様に、各学科の講義は洋書(英語)の簡単な入門書を用いて行った。このことは前に触れたように本校で購入した洋書からも分かる。

本校の専門課程での物理学の教育には、どの教科書が使用されたのかは明らかではないが、既に飯盛挺造の『物理学』が出版されて(上篇, 明治12年12月, 中篇, 13年6月, 下篇, 13年12月に第一版が出版), 同校図書館でも購入されていたことから、これが使用されていた可能性は大きい(20)。本書はわが国で本格的な物理学教科書として初めて出版されたものであった。

この課程表によると講義時間が多く、一人の教官で総てを教授するのは大変であった。その事は年報にも「教員授業時間多キニ過ギ教授ノ十分ナラザル憾アリ」と記している(2)。

物理学関係の洋書は42種54冊が「引継目録」に記載されていた(6)。しかし「第四高等中学校洋書目録」(明治21年)では35種になっている(21)。今回の専門学校洋書の調査では40種47冊の物理学書籍が現存することが確認されている(表5)(16)。この中には、加賀藩や藩校で購入されたもの5点が含まれている。また、前に触れた様に中学師範学校で購入したもの5点がある。最も古いものは、Thoman T. Tate, “An Elementary Course of Natural and Experimental Philosophy” (1858)であり、「加州海軍局文庫之記章」の蔵書印

が捺印されている。この印影から、本書は明治二年頃に購入されたと推定される。藩政期に購入された物理学書の種類・冊数は化学書に比べると少ない。この書籍に関して詳しくは文献 18 を参照されたい。

\* 文部省第十二年報付録「石川県年報」（明治 17 年分）には「洋書 3043 部、3201 冊、価格 4857 円 5 厘」と記されている（22）。

#### 第 4 項 物理学教育と物理学機器

本校の物理機器については、先に資料館資料目録 3 「石川県専門学校物理機器図録」にその調査・研究した結果をまとめて刊行した（23）。

「引継目録」記載の石川県専門学校の物理機器の種類（種数）および点数（員数）は次の通りである。

物性論及び力学の部 24 種，61 点，熱学の部 16 種，23 点，気学の部 24 種，32 点，音学の部 13 種，19 点，光学の部 15 種，20 点，水学の部 15 種，20 点，電気及び磁器の部 50 種，74 点，総種数 157 種，総計 249 点。

これらを明治 11 年の「文部省交付機器目録」と照合すると、47 点が本専門学校で購入されたものであることが明らかとなり、書籍に比べて少なかった。

「引継目録」に記載された物理機器のうちの 104 点は第四高等学校物理教室助手であった岩井武雄により「第四高等学校物理機械図入目録」（第四高等学校物理室）（24）にスケッチされていた（図 6 3）。この図入目録に記載された機器名と「引継目録」の名前と照合することにより、専門学校が中学師範学校から引継ぎしたものと、新たに専門学校で購入したものを容易に選び出すことが出来た。それらの機器の存否を調査し、金沢大学資料館と県立自然史資料館のどちらに収蔵されているかを調査した。資料館に現存する機器 96 点については、その登録番号、カタログ名、英独名、台数、製造業者、購入年（中学師範学校の機器の場合はその使用された品名）、大きさ、及び「引継目録」に記載された評価額を調査して、「石川県専門学校物理機器図録」に記載した。また、破損破棄された機器はカタログや物理教科書から確認できたもの 25 点であった。



図 6 3. 岩井武雄著「第四高等学校物理機械図入目録」

(第四高等学校物理室) (24) より気学の実験器機の一部。

これらの本学の資料と比較出来るものは、旧第三高等学校（京都）の前身校である大阪中学校（明治 13 年 12 月～19 年）の「器械模型標本薬品目録」である。この目録には明治 17 年の記録に約 205 点の物理機器が存在していたことが示めされている (25)。但し、文部省交付機器が含まれているか否かは不明である。また、旧第三高等学校の物理機器で、明治 14 年から 20 年に購入されたもので現存する機器は 74 点である (26)。旧第四高等学校の物理機器は本学の城内キャンパスから角間キャンパスへの移転の際に、大学資料館と石川県自然史資料館に分割されて保管された。専門学校で使用された現存する物理機器のうち、石川県中学師範学校からのもの 4 点と専門学校で購入された 4 点は

学資料館に、残り 87 点（中学師範学校からのもの 65 点と専門学校購入のもの 22 点）は自然史資料館に現在は保管されている。これは大学資料館と石川県自然史資料館に器機を分割・譲渡するときに、十分調査されずに行われたために、この様な不自然な結果となったのである。

本専門学校での物理学の講義録は残っていないために、講義の実体を直接明らかにすることが出来る資料はこの物理機器のみである。先に挙げた飯盛挺造の『物理学』教科書は同時代に出版されたものであり（20）、これに記載された物理機器と本専門学校の物理機器とを比較すると、講義の内容について多くの知見は得られた。『物理学』の記載項目と本専門学校の物理機器名を比較したところ、専門学校の物理学教育はこの飯盛教科書の殆どの部分を網羅していたことが明らかとなり、飯盛が東京大学医学部の別科生に講義した物理学講義とは差の少ないものであったと見られる。

#### 第 5 項 化学教育と化学器機および薬品

引継目録に記載された化学薬品を表 2 0 にまとめた。総数 226 種であった。

表 2 0 . 石川県専門学校で購入した化学薬品

名称	員数（種）	名称	員数（種）
酸 類	3	青酸化合物	1 2
塩基類	3	磷酸化合物	1
硝酸塩類	2 1	硼酸化合物	3
硫酸塩類	2 1	格魯母酸化合物	2
炭酸塩類	1 7	満俺化合物	1
酸化物	1 3	モリブデナム化合物	1
造塩素化合物	2 7	炭素化合物・有機化合物	7 3
硫化物	8	元素類（単体）	2 0

多くの無機塩類と有機化合物を集めていたことが分かる。当時はこれらの薬品の殆どがイギリスからの輸入品であった。

次に化学実験器具のリストの一部を示す(表 2 1)。

名称	員数	評価 (円、銭)	名称	員数	評価 (円、銭)
垂直筒見メートル	1	1.500	瓦斯試験水槽	1	2.300
摂氏験温器	3	9.800	黄銅匙	3	0.150
化学天秤	2	110	小刀	1	0.050
比重壺	2	4.000	曲端伊箸	2	0.220
ピペット	3	2.300	コップ	3	0.240
ビュレット 浮子共	6	37.537	縁すりコップ	3	0.195
円錐形テストグラス	3	0.300	硝子板	10	0.260
天秤 小ノ分	1	5.000	秤 百二十匁掛	1	0.818
験光鏡	1	3.000	鉄火皿	7	0.540
レトルト	17	23.200	鍋 1升入	1	0.330
レトルト台	4	3.650	磁製大鉢	1	0.190
レトルト小台	1	0.350	コルク圧搾器	2	1.300
アイロン、クランプ	1	0.200	エ竹 バッス	1	2.000
吹火管	4	0.250	鉄製椀	2	0.800
ベルセリユス酒精燈	2	7.750	骨製匙	3	0.150
硝子製酒精燈	10	2.750	針金製増壺台	2	0.040
真鍮製酒精燈	2	0.300	篩	1	0.040
ルシヤン燈	2	7.250	木製屏風	2	0.200
七 葦	1	0.075	三稜鏡	4	0.880
陶製増壺 蓋付き	13	7.350	兩度円筒	3	2.150
磁製増壺 蓋付き	6	4.350	比重計	2	7.600

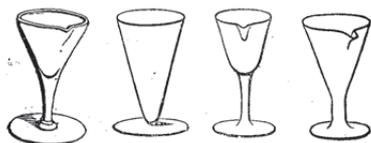
表 2 1. 化学実験器具の名前, 員数, 値段リスト (一部).

これらも和製試験管を除く総てが, イギリスからの輸入であった. そのために, 次のカタログが使用されていた (23).

John Joseph Griffin, Chemical Handicraft,  
a classified and descriptive catalogue of chemical apparatus,  
John Joseph Griffin and Sons, Chemical and Philosophical Instrument  
Makers, London. 1877.

上記の器具の内から幾つかの図をこのカタログからコピーを撮り示した (図 6 4).

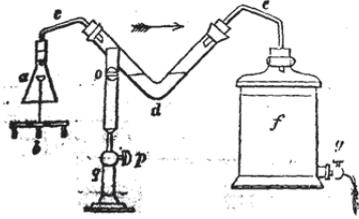
図 6 4. 化学器具の一部の図 (カタログより).



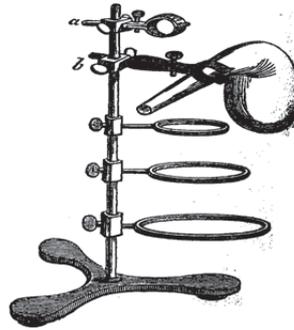
円錐形テストグラス  
Conical Test Glasses



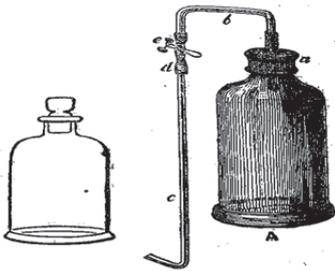
ポッタス・ボルブ  
Liebig's Potsh Bulb



アスピレーター Aspirator



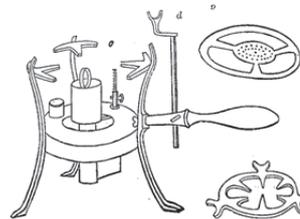
レトルト台 Retort Stand



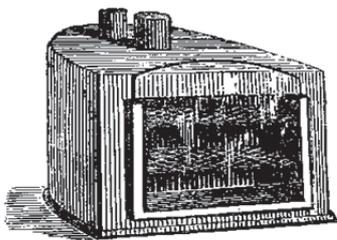
硝子集気鐘 Bell Gas Receiver

デフラグレーションボトル

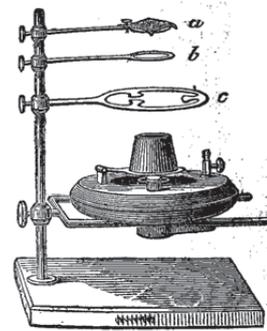
Deflagrating Jar



真鍮製酒精燈 Brass Spirit Lamp



エイヤ・バス Air Drying Bath



ベルセリウス酒精燈

Berzellius's Argand Spirit

これらの薬品と器具が今井省三の化学講義で使用されていたのである。

## 第6項 教科書

次に本校の理学科で教科書として使用した書籍類（推定）と購入冊数を記して置く。

## 数学

- Todhunter, I. Algebra for the use of colleges and schools 1885, 21 冊.  
Todhunter, I. Plane Trigonometry for the use of colleges and schools. 1864, 9 冊.  
Todhunter, I. Elements of Euclid, for the use of schools and colleges. 18xx, 6 冊.  
Reidt, F. Einleitung zum Mathematische Unterricht. 1886. 20 冊.

## 物理学

- Stewart, Balfour Science Primers, Physics, 6<sup>th</sup> edition. 1876, 8 冊.

## 化学

- Roscoe, Henry E. Lessons in Elementary Chemistry, Inorganic and Organic. 1874,  
32 冊

## 生物学

- Nicholson, H. A. Text Book of Zoology for Junior Students, 1880. 4 冊.  
Gray, Asa Gray's Lessons in Botany and Vegetable Physiology, 1879. 4 冊.

## 生理学

- Hutchinson, J. C., A Treaties on Physiology and Hygiene, 1879. 18 冊.

(学科表にはハックスリーと記載されているが、図書室には本書が18冊あり、これが教科書として使用されたと考えられる.)

## 鉱物学

- Dana, J. D. Manual of Mineralogy. 1877. 4 冊.  
H. H. Peck, N. Haven, N. H. Alleyne, Text Book of Geology, 1879. 8 冊.

## 星学

- L.J. Norman Elements of Astronomy. 1878. 10 冊.

なお、アンダーラインした著者の本は西田幾多郎の記述に見られるものである。講義用の掛け軸も購入されていたが、本稿では略す。

## 第7項 生徒数と卒業生の動向.

本校の生徒数は、明治14年1月には予備科と本科を合わせて77名であり、この年の在籍生徒数は132名であった(27)。明治15年度には予備科生徒は各級合わせて92名となり、本科生徒は各級合わせて法学科26名、理学科4名、文学科12名、合計42名、総計137名であった(28)。その後、生徒数は増加



卒業生の動向資料として、1.「石川県学事報告18年、第6号」(30)、2.「関口開」没後10年記念会編『関口開小伝』(31)、3.田中鉄吉『郷土数学』(32)に記載された卒業生の資料を使用した。さらに、各個人についてはネット検索により資料を収集した。

1. 明治18年調べ。(「石川県学事報告」18年、第6号)(30)

明治13年卒業 (\*を着けた人は啓明学校の卒業生のリストにも記載されている)

林 文五郎 中学師範科 石川県専門学校教員。 金子重太郎 同 金沢区中学校教員。

戸水 寛人\* 同 東京大学法学部撰科。 大島 熙\* 漢学専修科, 石川県専門学校教員。

平岩才一郎\* 同 在米国商事従事, 「英語階梯」編者, 敬文館刊, 明治37年。

明治14年卒業

籠田 信次\* 文学科, 北陸新報主筆, 雄弁家, 石川県工業学校長。

永山 鉄男 同 私立金沢学校教員。

斉藤徳五郎\*(中橋) 同 東京大学法学部撰科, 文部大臣。

明治15年卒業

拔山庄次郎 同 海軍省御用掛主計学舎兼幹事。

河合 辰太郎 同 東京大学法学部別課生, 印刷会社社長。

富山 久米吉 理学科 東京工科大学専科, 造船科, 海軍省。

小林 貫蔵 同 石川県師範学校教員。

高嶺 三吉 文学科 東京大学文学部撰科, 在学中に死去。(遺稿集は本学図書館に架蔵)

浅木茂三郎 理学科(数学) 中学校教員。

明治16年卒業

渡辺 義郡 文学科 石川県専門学校教員。 中島 忠朝 同 死亡。

河島 松太郎 同 金沢区中学校教員。 田中 涉 同 東京中学師範学校留学。

明治17年卒業

朝倉外茂鉄 文学科\* 東京法学院卒, 法学士, 「英国商船法」著。(1883-1927)

奥田頼太郎 同 石川県専門学校教員。

木村 尚 同\* 江沼郡遷明中学校教員。 篠田 温良 同 石川県師範学校教員。

西永 公平 法学科 在金沢 無職。 宇野 春二郎 同 私立金沢学校教員。

石川 政吉 同 在金沢 無職。 伊藤(東)愛敬 同東京留学, 金沢市会議員。

堀 義三郎 同 在金沢 無職. 駒井 覚 理学科 石川県専門学校教員.  
明治18年4月現在  
中谷 隆彦 法学科 在富山県 無職. 小杉 辰二 同 在金沢 無職.  
宮本 栄太郎 同 在金沢 無職. 寺尾 甚太郎 同 在金沢 無職.  
石田 鼎一 文学科 石川県専門学校教員. 伊藤 亥之吉 同 石川県専門学校教員.  
明治18年10月31日卒業 (石川県学事報告第八号, 18年9月—10月号, 492頁)  
鈴見 直任 法学科. 仁科 其吉 同 (高松町史 526頁).  
国枝 定次郎 同. 石坂 外次郎 同. 竹下 茂吉郎 理学科  
藤江 永孝 理学科, 東京職工学校卒, ワグネルに師事, 京都市陶磁器試験所初代所長.  
飛鳥井孝太郎 文学科, 名古屋製陶所取締役.  
上原 直松 同 石川県専門学校教員.  
中吉 忠太郎 理学科, 海軍大尉 (明治30年8月死亡).

## 2. 田中鉄吉「郷土数学」および「関口開小伝」に記載の卒業生 (31,32)

大瀬甚太郎 東京教育大, 教授, 教育学, 教育学史.  
藤井健次郎 東京帝大理学部, 生物, 遺伝学教授, 「遺伝子」を作る.  
大幸勇吉 東京帝大理学部化学教授, 物理化学, コロイド化学, 触媒化学.  
斉藤半六 海軍中将, 第二艦隊司令長官.  
近藤常松 水雷学校校長.  
藤岡作太郎 近代日本文学評論 東大文教授.  
吉田辰男, 水登錦男, 坂井乙吉, 香林小禄 三田村幸吉 不詳  
清水 澄 法学博士, 枢密院議長, 行政法, 学習院教授.  
木村 栄 東京帝国大学理科星学科卒, 理学博士, 万国緯度観測中央局長, Z項発見者,  
第1回文化勲章受章者.  
中川銓吉 数学, 東京帝大教授, 解析概論, 類体論.  
松井喜三郎 海軍兵学校文官教授, 数学.  
藤田外次郎 陸軍砲工学校, 数学教授, 「公算, 誤差学」.  
吉田好九郎 代数学, 学習院大教授.  
井上友一 東京帝大法学部卒, 法学博士, 東京府知事.  
金田良吉 (山本) 帝国大学文科哲学科選科終了, 武蔵高等学校第3代校長.

西田幾太郎 文学博士，山口高等学校，第四高等学校，学習院教授，京都大学名誉教授。  
 鈴木貞太郎（大拙）文学博士，仏教学者，仏教の海外紹介，文化勲章受賞。  
 河村善益 司法省法学校，関西大学学長，東京控訴院検事長，貴族院議員。  
 松寺竹雄 慶応義塾 法学部法理学教授，朝鮮総督府政務総監高等法院検事長。  
 前田孝階 法学博士，東京法学院卒，宮城控訴院長，判事。  
 金子治郎 金沢医学所，第四高等中学校医学部教授。  
 伊東治三郎 神戸商船大初代校長（大正7年）。  
 河合義文 数学，松江高等学校第3代校長。  
 森 外三郎 数学，第三高等学校第4代校長，方程式論。  
 堀 啓次郎 東京帝大法卒，三井大阪商船社長。  
 河北栄太郎 陸軍少将，台湾・基隆要塞司令官。  
 中村清二 理学博士，東京帝大理卒・物理学，光学。  
 山川勇木 横浜正金銀行取締役兼総支配人。  
 杉中利平次 経済学者，「致富要論」著者（明治22年5月），金沢実業会会員。  
 土谷鉄次郎，今村明恒 不詳  
 三田村幸吉 東北大学，理学博士。

この収集した資料は，多くの生徒が石川県専門学校を卒業後に社会で大いに活躍していたことを示している。特に目立つのは，多くの生徒が東京大学に進学していたことである。明治27年の集計によれば，東京大学の総学生数 1408人中，東京出身者 189名，石川出身者 83名，山口出身者 64名であり，東京以外では最も多数の学生が学んでいた（33）。彼らがその後社会に進出して，明治の社会の発展に大きく貢献した。また，研究者として大学に残り，後進の指導に当たったものも多くいたことを上記の調査結果は表している。特に，数学者が多く生まれたことは特筆すべきことである。これは関口開が幕末から明治にかけて早くから西洋数学書をもとに数学を研究し，また後身の指導に尽力したことが大きな理由と考えられる。明治初期に小学校，中学校が増設されて全国で数学教員の不足が起きたと云われている。しかし，石川県では教員数は十分に充足されていた。

## 史料 第1編 第1章 加賀藩の医学

- 史料1. 成瀬正居,「壯猶館御用日記」,安政二年,金沢市立玉川図書館近世資料館蔵.
- 史料2. 教育沿革史料第十一本,「旧加賀藩立壯猶館取調要項,旧加賀藩立医学校取調要項」,加越能文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料3. 成瀬正居,「壯猶館御用達留」安政二年改,18頁,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料4. 成瀬正居,「壯猶館御用日記」,安政二年,22頁,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料5. 「鈔録合集十五本」,都鄙の嵐(一),弘化元年,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料6. 黒川良安訳述「論英吉利斯病並治法,二家日記抜萃」,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料7. 「鈔録合集十七本」,「近敦日記」六抄,弘化三年,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料8. 「旧金沢藩事跡類纂」,第九本中,第三百九十二号,「近敦日記抄」,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料9. 「旧金沢藩事跡類纂」,第九本,「近敦日記」,弘化三年,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料10. 「鈔録合集十九本」,「諸事要用雜記」十七本,嘉永元年,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料11. 黒川良安,「蓮湖魚毒説」嘉永五年(写本),金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料12. 「抄録合集十五本」,都鄙ノ嵐 一抄,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料13. 「抄録合集二十五本」,諸事要用日記十抄,嘉永六年,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料14. 成瀬正居,「壯猶館隱密達留」,4頁,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料15. 『加賀藩史料藩末編下巻』,1205頁,(前田育徳会編)(1958).
- 史料16. 御医者溜編,「拝診日記」,元治元年,石川県立図書館蔵.
- 史料17. 「本多従五位殺害候仕抹一件等」,第五章 加賀藩治終末期,第八節,本多政均の遭難,『石川県史料』,1009頁,(1969).
- 史料18. 「御用鑑」文久二年六月十日,『加賀藩史料藩末編上巻』,123頁.
- 史料19. 「卯辰山開拓録」,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料20. 「渡辺松二の不破大兄にあてた書簡」(大正三年二月一日),金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料21. 「慶應三丁卯四月 病院仕法書」,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
- 史料22. 「卯辰山養生所の平面図」図面A,設計真柄組,慶応三年,金沢大学医学部記念館蔵.

史料 2 3. 「先祖由緒並一類附帳,明治三年,高峰昇」, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.  
史料 2 4. 高峰元稔,松原小四郎,「諸道具之願」, 成瀬正居「壮猶館御用達留」, 89-91,  
安政二年, 金沢市立玉川図書館近世資料館蔵.

#### 文献：第 1 章 加賀藩の医学

1. Dodonaeus, Rembertus, *Herbarius oft Cruydt-Boek. Antowerpen 1644*. 印影「壮猶館文庫」「金澤藩医学館」, 金沢大学医学部記念館蔵.
2. 『庶物類纂』, 加越能文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
3. 『日本教育史資料』, 旧藩学校沿革調, 明治十七年, 文部省.
4. 「学校図」, 天保九年, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
5. 「明倫堂, 経武館稽古割」, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
6. 「明倫堂御書物目録」, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
7. 加藤豊明, 「百年の覚え」, 『金沢大学医学部百年史』, 650 頁, 金沢大学医学部百年史編集委員会, (1972).
8. 板垣英治, 『北陸医史』, 第 32 号, 38-46, (2010).
9. 『稿本金沢市史』・学術編第二, 318-319, 金沢市編, 金沢市役所, 昭和 48 年刊.
10. 松田清, 「京古本や往来」, 第 37 号, 2-4, (1987).
11. 多留淳文, 「十全同窓会会報」, 第 120 号, 19-20, (2002). 同上, 第 121 号, 14-15, (2002).
12. 寺畑喜朔, 「十全同窓会会報」, 第 113, 16-17, (1999).
13. 寺畑喜朔, 『北陸医史』, 第 21 号, 56-66, (1999).
14. 芝哲夫, 『化学史研究』, 29, 125, (2002).
15. 津田進三, 寺畑喜朔, 『北陸医史』, 第 12 号, 73-80, (1991).
16. 寺畑喜朔, 「十全同窓会会報」, 第 118 号, 平成 13 年. : 同上, 同誌, 第 119 号, 平成 13 年.
17. 寺畑喜朔, 『北陸医史』, 第 11 号, 63, (1989). : 多留淳文, 十全同窓人物伝 [17], 「十全同窓会会報」, No.122, 24-25, 平成 14 年 10 月 15 日.
18. 「四名医伝」, 「石川県医学の沿革」, 『金沢市医師会医政史』, 金沢市医師会発行, 13-20, (1940).
19. 板垣英治, 『日本海域研究』, 第 40 号, 105, (2009).
20. 高瀬重雄, 『北前船長者丸の漂流』(清水書院), (1974).
21. 小西雅徳, 『銃砲史研究』, 第 367/368 号, 30-48, (2010).
22. 赤祖父一知, 『北陸医史』, 第 33 号, 28-35, (2011).
23. 板垣英治, 「加賀藩旧蔵洋書の目録作成」: 「壮猶館旧蔵洋書目録」, 『日本海域研究』, 第 38 号, 21-66, (2007).
24. 板垣英治, 『北陸医史』, 第 32 号, 20, (2010).

25. 嵯峨寿安,「治療薬報」,第33号,明治四十一年四月一日発行.
26. 寺畑喜朔著,「北陸における近代医学の源流」石川県,『医界風土記中部篇』,酒井シヅ監,日本医師会編,思文閣,(1994).
27. 寺畑喜朔編「金沢の医学百年」,(1976).
28. 高安右人編著,「石川県金澤病院沿革」,明治三十六年:寺畑喜朔複製,昭和59年1月,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
29. 日置謙著,「心学所」,『加能郷土辞彙』,(金沢文化協会)429,(1942).
30. 藤本純吉,「石川県医学沿革史」,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
31. 板垣英治,文献23.48頁.
32. 高峰元稔抄訳,「麝香混ト幾那鉄塩」,蒼龍館文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
33. 赤祖父一知,「富山病院高峰精一履歴上申」,『石川医報』,42-43,平成5年4月1日(1993).
34. 「高峰診療所の広告」,北国新聞,明治十七年七月十八日.

#### 文献と史料 第2章 第1項 金沢医学館 および 第2項 スロイスの経歴.

1. 藤本純吉,「石川県医学沿革記」,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
2. 伍堂卓爾,「一世紀事」,加越能文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
3. 板垣英治,『日本海域研究』,第39号,63-78,(2008).
4. 『石川県史料』,第三編,政治,学校,衛生,明治四年~七年,197-198,(石川県編)1974年刊.
5. 「金沢医学所写真」,宮内庁より医学部記念館に譲りうける.
6. 金子次郎,「母校の沿革」,大正14年,東京十全会講演記録.
7. 赤祖父一知,「幕末明治初期における富山の医学」(資料)(2002).
8. 津田進三,宗田一編,『医学近代化と来日外国人』8,(世界保健通信社,1988),42頁.
9. 寺畑喜朔,石田純郎,『北陸医史』,第九卷,35-37,(1988).
10. 正橋剛二,篠原治道,松田健史,『北陸医史』,第11卷,49-52,(1990).
11. 石田純郎,H. ボイケル,『北陸医史』,第7号,2-6,(1985).
12. 北国新聞記事(大正九年五月二十一日),マイクロフィルム,石川県立図書館蔵.
13. 板垣英治,『北陸医史』,第28号,80-85,(2006). 14. 『石川県史』,第三編,506,(1974).
14. 日本化学会編『日本の化学百年史—化学工業のあゆみ』(東京化学同人,1978),79-98.

史料1.「金沢絵図」(明治初年),金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.

史料2.「金沢医学館平面図」,金沢大学医学部記念館蔵.

史料3.「スロイス及門弟写真」,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.

- 史料4.「スロイス及門弟写真」,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.  
史料5.「スロイス子息名刺」,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.  
史料6.「伍堂卓爾履歴書」,尾山病院関係史料,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.

文献. 第3項 スロイス講義.

1. 板垣英治,『日本海域研究報告』,第35号,1~20,(2004).
2. Müller,J., Lehrbuch der Physik und Meteorologie, 8. umgearb. & verm. Aufl. bearb. von Leop. Pfaundler, Friedrich Vieweg und Sohn, 1881. の旧版と見られる.
3. 藤本純吉筆記「究理学」卷之四,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
4. 藤井貞為筆記「舎密学」,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
5. 板垣英治,『化学史研究』,第29卷,第3号,28-38,(2002).
6. 藤本純吉筆記「舎密学」,卷一,卷二,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
7. Fresenius, R. C., Handleiding tot de Qualitative Chemische Analyse, vertaald door C. F. Donnadieu, H. Koster, Delft, 1857. 金沢大学附属図書館蔵.
8. Lubach, D., Erste Grondbeginselen der Dierkunde, vooral leerlingen aan gymnasiën, instituten, enz., tot zelfonderrigt. Vierde druk. H.C.A.Campagne, Tiel, 1870. 金沢大学附属図書館蔵.
9. 藤本純吉筆記,「動物学」卷之中,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
10. スロイス講述,大田美農里翻訳,『スロイス氏講義官許動物学』石川県蔵梓,明治七年. 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
11. 板垣英治,『日本海域研究』,第39号,63-78,(2008).
12. 藤本純吉筆記,「植物学」,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
13. Oudemans, C.A.J.A., Natuurlijke Historie van Nederland, De Flora,1-2, G.L.Funke, Amsterdam,1869. 金沢大学附属図書館蔵.
14. 藤本純吉筆記,「生理学」卷之中,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
15. 藤本純吉筆記,「普通病理学」,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
16. 板垣英治,『北陸医史』,第33卷,36—48,(2011).
17. 藤本純吉筆記,「健康学」,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
18. スロイス氏講述,稲坂謙吉筆記,岸田吟香校閲『スロイス氏衛生新編』上卷,下卷,東京江島喜兵衛発行,明治十二年,東京白楽圃上梓.
19. 橋本和夫,『北陸医史』,第13号,24-31,(1991).
20. 藤本純吉筆記,「解剖学」上,中,下,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
21. 藤本純吉筆記,「各自病理学」,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
22. スロイス氏講述,馬嶋健吉通弁,津田淳三校正『スロイス氏講述内科全身病論』,石川県病院蔵版,明治十年,益智館(金沢),金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
23. Niemeyer, F. von, Leerboek der Bijzondere Pathologie en Therapie, vooral met

- het Oog op Physiologie en Pathologische Anatomie, Tweede druck, Erste deel. H. C. A. Campagne en D. B. Centen. Tiel en Amsterdam, 1868. 金沢大学附属図書館蔵.
24. 藤本純吉筆記,「薬剂学」卷之一～卷之三,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
25. 板垣英治,『北陸医史』,第33号,73-88,(2011).
26. 板垣英治,『化学史研究』,第31卷,1号,1-13,(2004).
27. 藤本純吉筆記,「スロイス氏方叢」,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
28. 金子治郎,「母校の沿革」,大正十四年,(東京十全会の講演記録).
29. 板垣英治,『加賀藩旧蔵洋書総合目録』,金沢大学資料館,(2006).
30. 板垣英治,『日本海域研究』,第38号,21-66,(2007).

### 文献. 第3章 石川県立金沢病院とホルトルマンの医学教育.

1. 「文部省報告」,明治八年,13頁,「文部省第十一号布告」.
2. 『石川県史料』,第二卷,政治部,学校・衛生(明治八年),295-296頁.
3. 『石川県史料』,第二卷,政治部,学校・衛生(明治八年),289-290頁.
4. 『石川県史料』,第二卷,政治部,学校・衛生(明治九年),389頁.
5. 『石川県史料』,第二卷,政治部,学校・衛生(明治九年)390頁.
6. 『金沢市医師会医政史』,第一章 沿革,第三節 四名医伝,(金沢市医師會発行,1940)19頁.
7. 石田純郎,H. ボイケルス,『北陸医史』第7号,2-6,(1985).
8. 藤本純吉,「石川県医学沿革記」,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
9. ホルトルマン講述,藤本純吉筆記 講義録 全,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
10. 津田進三,『金沢大学医学部百年史』,671-689,(1972).
11. 田中義雄,「杏林今昔の感」,『順天堂医事会雑誌』,大正15年,28-47,(1926).
12. 『尾山神社誌』,尾山神社社務所編,明治四八年十月刊,130頁.
13. 「石川新聞」新聞マイクロフィルム,明治十一年十月五日,石川県立図書館蔵.
14. 文献11. 30頁.
15. 金子治郎,「母校の沿革」,大正十四年,(東京十全会の講演記録).
16. 赤祖父一知,今井美和,堀井美里,『北陸医史』,第30号,1-17,(2008).
17. 「金沢医学校通則」明治十三年二月改正,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
18. 「製薬録,老烈氏方叢」,藤本純吉筆記,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵. : 赤祖父一知,今井美和,『北陸医史』,第23卷,1-8,(2002).
19. ホルトルマン,「有機化学」,藤本純吉筆記,藤本文庫,金沢市立玉川図書館近世史料館蔵. : 板垣英治,『化学史研究』,第31卷,第1号,1-13,(2004). 同誌,第31卷,第2号,96-107,(2004).

20. スロイス, 「有機化学」第1巻・第3巻, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
21. スロイス, 「薬剂学」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
22. 矢部辰三郎訳補, えち. クレードル氏原書, 『ばくてりあ病理新説』, 前編, 明治20年, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
23. 藤野恒三郎, 『日本細菌学史』(近代出版, 1984), 130頁.
24. ホルトルマン, 「実験舎密学」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
25. ホルトルマン, 「普通中毒学」全, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
26. Hasselt, A. W. M. van, Handleiding der Vergiftleer. Ten gebruike bij het onderwijs aan 'sRijks Kweekschool voor Militaire Geneeskundigen, Tweede Druk, J. G. van Terveen & Zoon, Utericht, 1855-58. 金沢大学附属図書館蔵.
27. ホルトルマン, 「各自中毒学」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
28. ホルトルマン, 「産科学」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
29. Karl Schroeder, "Lehrbuch der Geburtshülfe mit Einschluss der Pathologie der Schwangerschaft und des Wochenbettes." 4, aufs, neue durchgearbeitete Aufl. Bonn, Cohen, 1872. 第6版, 1880年出版は金沢大学附属図書館に架蔵されている.
30. ホルトルマン, 「医事小言」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
31. 『智児曼斯氏外科総論』田代義徳訳述, (明治30年), 99-111頁.
32. ホルトルマン, 「組織学」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
33. ホルトルマン, 「組織学図解」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
34. ホルトルマン, 「保爾篤児満氏方集」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
35. ホルトルマン, 「局所解剖学」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
36. ホルトルマン, 「外科各論」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
37. ホルトルマン, 「外科手術学」, 藤本純吉筆記, 藤本文庫, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
38. 『医事雑誌』第六号, 明治十年九月, 「乳房纖維性肉腫切除後治癒セシ経験」: 寺

- 畑喜朔，『医譚』復刊第五六号，通卷第七三号，（昭和 63 年 5 月 20 日発行），「石川県金沢病院編輯の医事雑誌について」。
39. ホルトルマン，「眼科外科学」，藤本純吉筆記，藤本文庫，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
40. ホルトルマン，「眼科手術学」，藤本純吉筆記，藤本文庫，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
41. ゴフレス著，田中信吾翻訳「繙帯学」：Goffres, M., *Handboek van de Leer der Verbanden en Verband-instrumenten*, 1858. 金沢大学附属図書館蔵。
42. 藤本純吉筆記「繙帯学」，藤本文庫，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。

#### 文 献 第 4 章 甲種医学校

1. 藤本純吉，「石川県医学沿革記」，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
2. 赤祖父一知，今井美和，『北陸医史』，第 27 号，69，(2006)。
3. 赤祖父一知，今井美和，堀井美理，「田中信吾記『東遊日記』」，『北陸医史』，第 29 号，1-17，(2008)。
4. 「金沢医学校通則」明治十三年二月改正，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
5. 「石川県学事報告」，第六号，八丁，340 頁（明治 18 年 5，6 月），『石川県史資料』近代篇（8），石川県立図書館。
6. 「石川県学事報告」，第十号，十丁，107 頁（明治 19 年 1，2 月），『石川県史資料』近代篇（9），石川県立図書館。
7. 三迺俊一，汲泉談叢，『日本医事新法』，昭和 11 年 3，4 月，汲泉社。
8. 『第四高等中学校一覽』（明治 27-28 年），付録 4，第四高等学校編纂，金沢大学付属図書館蔵。
9. 「文部省達第四号（輪廓附き）医学校通則」，明治十五年五月，『文部省布達全書』，第 7 冊，明治十五年，3-9 頁，国立国会図書館蔵。
10. 「明治十四年官立大学及び官立府県町村立専門学校一覽」，国立国会図書館蔵。
11. 「職員録，乙，明治十九年-四五年」，内閣官報局発行。
12. 小関恒雄，「明治中期東京大学医学部卒業生動静一覽」，『日本医史学雑誌』，第三十三卷，第三号，32-45，昭和 62 年。
13. 「甲種医学校規則」，『石川県史料』 第三卷，明治十七年，政治部 学校，1，石川県立図書館，昭和 48 年。
14. 『石川県職員録』，明治十八年一月三十一日改訂，金沢・池善平，国立国会図書館蔵。
15. 「私立尾山病院設立願」，明治十八年一月三十一日，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
16. 「勅令第十五條，中学校令，第四條」，『学令全書』，明治二十年十一月刊，東京府学務課，99-101 頁，国立国会図書館蔵。

17. 『石川県甲種医学校規則』, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
18. 板垣英治, 「石川県甲種医学校の医学教育」, 『日本海域研究』, 第40号, 91-103, 2009.
19. 『医学部百年史』, 金沢大学医学部百年史編集委員会, 1972.
20. 『石川県類聚公報』, 明治17年, 国会図書館蔵.
21. 田口和美著『解剖攬要』, 国立国会図書館蔵.
22. 田口和美著『人体組織攬学』, 金沢大学附属自然科学系図書館蔵.
23. チーゲル「生理学」; Tiegel, E., Physiologische Vorträge. Tokyo, 1878-1879.  
木村孝蔵寄贈, 金沢大学附属自然科学系図書館蔵.
24. 『医科全書生理学, 卷之一〜八』, 橘良俤ら翻訳・編輯 (明治12年-15年刊), 東京大学医学部, 全9冊, 金沢大学附属自然科学系図書館蔵.
25. 『詳訳薬物学』, 鈴木孝之助訳補, 乾 (上巻), 坤 (下巻), 明治14年刊行, 金沢大学附属自然科学系図書館蔵.
26. Guttmann, von Paul, Lehrbuch der klinischen Untersuchungs-Methoden für die Brust- und Unterleibes-Organen: mit Einschluss der Laryngoscopie. Berlin, 1884.  
金沢大学附属自然科学系図書館蔵.
27. 『病理総論』三宅秀訳著, 東京, 明治14年, 国立国会図書館蔵.
28. Rindfleisch, E., Lehrbuch der pathologischen Gewebelehre. Leipzig, 1878. 金沢大学附属自然科学系図書館蔵.
29. 佐藤進, 『外科通論』, 東京, 明治15年, 国立国会図書館蔵.
30. Billroth, T., & Winiwarter, A., Die allgemeine chirurgische Pathologie und Therapie, Berlin, 1876. 金沢大学附属自然科学系図書館蔵.
31. Schulze, W., Vorträge der Ophthalmologie, Druck von insatzu-kioku, Tokio, Meiji 14-15. 金沢大学附属自然科学系図書館蔵.
32. Schulze, W., Vorträge der speciell Chirurgie, Krankheiten der Haut; Syphilis und Ulcus Molle, Tokio, Meiji 14. (1881).
33. 安井宏, 『ベルツの生涯, 近代医学導入の父』, p16, 思文閣出版, 1995.
34. Schröder, K., Lehrbuch der Geburtshülfe: mit Einschluss der Pathologie der Schwangerschaft und des Wochenbettes. Max Cohen & Fr. Cohen, Bonn, 1872.  
金沢大学附属自然科学系図書館蔵.
35. ホルトルマン, A. C., 「普通中毒学」全, 藤本純吉筆記, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
36. ホルトルマン, A. C., 「各自中毒学」全, 藤本純吉筆記, 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
37. van Hasselt, A. W. M., Handleiding tot de Vergiftleer, tweede druk, Utrecht, 1855-58. 金沢大学附属自然科学系図書館蔵.
38. ローレツ『断訟医学』, 田野俊貞口訳, 石井英三筆記, 明治19年. : 田中英夫, 『御雇外国人ローレツと医学教育』, 名古屋大学出版会, 206-207頁, 1995.

39. 飯盛挺蔵纂訳、『物理学』上編，下編，丸屋善七，東京，明治13-15年。
40. Müller, J., Lehrbuch der Physik und Meteorologie, Braunschweig, 1877-1881.  
金沢大学附属自然科学系図書館蔵。
41. Eisenlohr, W., Lehrbuch der Physik, Stuttgart, 1863.
42. 丹波敬三，下山順一郎纂訳、『無機化学』一卷，二卷，丸屋善七，東京，明治12年。
43. Pinner, A., Repitorium der anorganischen Chemie, Berlin, 1875.  
1883年版，金沢大学附属自然科学系図書館蔵。
44. Gorup-Besanez, von E., Lehrbuch der anorganischen Chemie, Braunschweig,  
1873. 1876年，6版は金沢大学附属自然科学系図書館蔵。
45. 丹波敬三，下山順一郎纂訳、『有機化学』前編，後編，丸屋善七，東京，明治13年。
46. Pinner, A., Repitorium der organischen Chemie, Berlin, 1876.
47. Gorup-Besanez, von E., Lehrbuch der organischen Chemie, Braunschweig, 1873.  
1881年，6版は金沢大学附属自然科学系図書館蔵。
48. 松原新之助，『講筵筆記薬用植物篇』，東京，明治12年，国立国会図書館蔵。
49. スロイス口述，藤本純吉筆記「動物学」，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
50. 『ス魯斯氏講義動物学』（別名『官許動物学』）初編，大田美農里訳述，石川県学校蔵  
梓，明治7年。金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
51. Lubach, D., Erste Grondbeginselnen der Dierkunde, vierdedruk, Tiel, 1870.  
金沢大学附属自然科学系図書館蔵。
52. 板垣英治，『北陸医史』，第31号，24-30，(2009).: 板垣英治，「石川県甲種医学校の医学教育，医学教科書と参考書から医学教育を見る」，『日本海域研究』，第40号，  
91-104，(2009)。
53. 「甲種医学校卒業証書授与式」，「石川県学事報告」，第十七号，22頁，(明治20年3，  
4月)，『石川県史資料』，近代篇(10)，石川県立図書館。
54. 「文部省告示第六号」，「石川県学事報告」，第十九号，9頁，明治二十年，『石川県史  
資料』，近代篇(11)，石川県立図書館。
55. 「石川県告示第三十号」，「石川県学事報告」，第二十三号，7頁，明治二十一年，『石  
川県史資料』，近代篇(12)，石川県立図書館。
56. 「甲種医学校卒業式・閉校式」，明治二十一年三月三十一日，「石川県学事報告」，第  
二十三号，42頁，明治二十一年，『石川県史資料』，近代篇(12)，石川県立図書館。
57. 『石川県衛生第8次年報』・附録。「医師並び薬剤師名簿」，明治26年2月。
58. 『東京医事新誌』No 502，明治20年11月12日。

## 文 献 第 5 章 尾 山 病 院

1. 「尾山病院一件書類」11-1「本院開設許可物等」，明治18年2月，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
2. 藤本純吉，「一代記」，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
3. 「尾山病院写真」，藤本文庫，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
4. 板垣英治，『日本海域研究』，第40号，91-104，(2009)。
5. 板垣英治，『北陸医史』，第32号，72-81，(2010)。
6. 『石川県統計書』衛生之部，明治13年—明治30年，第10冊，石川県，国会図書館蔵。
7. 「第四高等学校医学部図書原簿」(明治21年—22年)，金沢大学付属図書館医学部分館蔵。
8. 『石川県医学専門学校図書目録』，金沢大学付属図書館医学部分館蔵。

## 文 献 第 6 章 薬 学 教 育

1. 辻豊儀，履歴書，「尾山病院設立願」，明治十八年二月，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
2. 堤縦清，履歴書，金沢大学附属資料館蔵。
3. 『石川県史料』第二卷，政治部，学校・衛生，(明治9年)，390頁。
4. 旗善蔵，履歴書，金沢大学附属資料館蔵。
5. 「金沢医学校通則，薬学科」(明治13年2月改正)，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
6. 藤本純吉編著，「石川県医学沿革記」，明治十七年，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
7. 『石川県甲種医学校規則』，明治十七年，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
8. 「石川県学事報告」第六号，『石川県史資料 近代編』，十卷，明治18年5月，学務課刊行。
9. 「石川県学事報告」第十号，『石川県史資料 近代編』，十二卷，明治19年1，2月，学務課刊行。
10. 「石川県学事報告」第十二号，『石川県史資料 近代編』，十二卷，明治19年5，6月，学務課刊行。
11. 示村良吉，履歴書，「尾山病院一件書類」，明治十八年，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
12. 『石川県衛生第八次年報』附録，「医師・薬剤師名簿」，明治26年。
13. 『第四高等中学校一覽』 明治22-23年，付録，1-8頁，第四高等中学校編纂。
14. 『金沢大学五十年史，通史編』，金沢大学五十年史編纂委員会，平成13年。
15. 『金沢大学薬学部百年史』，金沢大学薬学部編纂，昭和42年。
16. 「渡辺松二の不破大兄あて書簡」(大正三年二月)，金沢市立玉川図書館近世史料館

蔵.

17. 『石川県史料』第二卷，政治部，学校・衛生，明治4-9年，176-178頁.
18. 「医学館職員」，「学校沿革取調書」明治4年12月調べ，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
19. 藤本純吉，履歴書，「尾山病院一件書類」，明治十八年，金沢市立玉川図書館近世史料館蔵.
20. 赤祖父一知，平成16年，「明治初期の医育期間と医師制度」講演資料.
21. 「金沢理化学学校」，『稿本金沢市史 学事編第二』，(昭和48年)，493-495頁，金沢市役所.
22. 文献15，参照.
23. 文献6，参照.
24. 文献12，参照.
25. 文献12，参照.
26. 「文部省達第六号 薬学校通則」，『文部省布達全書』第七冊，明治15年，11頁.
27. 「石川県学事報告」，第八号，『石川県史資料 近代編』，十卷，明治18年，学務課刊行.
28. 納富喜博，履歴書，金沢大学附属資料館蔵.
29. 「石川県学務沿革略記」，「石川県学事報告」，第八号，56-57頁，『石川県史資料 近代編』，八卷，明治18年，学務課刊行.
30. 文献17，参照.
31. 『石川県教育史』，年表，昭和49年，258頁，石川県教育委員会.

## 文 献 第 2 編 第 1 項 啓明学校

1. 『石川県史料』第二卷，政治，学校（明治九年）303頁.
2. 「石川県学事報告」第19号，『石川県史資料 近代編』第10卷，(明治)，「石川県学務沿革略記」1-82頁，第二部学務課刊行.
3. 『石川県教育史』，第一卷，石川県教育史編纂委員会，昭和49年，304頁.
4. 『石川県史料』第二卷，政治，学校・衛生（明治十年）413頁.
5. 「石川県学事・第四年報」，(明治9年分)：文献1.
6. 『金沢市教育史稿』，石川県教育会金沢市会，大正八年，267頁.
7. クララ・ホイットニー著，一又民子訳『クララの日記』下，(講談社，昭和51年)33頁.
8. 『石川県教育史』，第一卷，石川県教育史編纂委員会，昭和49年，308頁.
9. ホイトニー夫人，梶夫人共著，『ドクトル・ホイットニーの思い出』伝記叢書184，大空社，昭和5年.

- 1 0. 『日本の使徒トマス・ウイン伝』中沢正七編，改訂版，新教出版社，1952.
- 1 1. 「北条時敬先生」『郷土先賢叢書』（二），木佐貫重元著，日本文化協会石川県支部，1938.
- 1 2. 文献 1. 309－310 頁.
- 1 3. 『石川県専門学校洋書目録』金沢大学資料館目録 2，板垣英治編，金沢大学資料館，2004.
- 1 4. 『文部省布達全書』，第五冊，明治 11 年－12 年，文部省発行，4－15 頁.
- 1 5. 「旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及目録」，（第四高等学校，明治 21 年 8 月），金沢大学資料館蔵.
- 1 6. 『石川県専門学校物理機器図録』，金沢大学資料館目録 3，板垣英治編，金沢大学資料館，2005.
- 1 7. 堀七蔵，『日本の理科教育史』第三，（福村書店，1961），690 頁.
- 1 8. 中川保雄，「明治初期における理化学器械製造業の形成」，日本科学史学会編集「科学史研究」第二期，第 17 卷（No.126）（1978），101－110 頁.
- 1 9. 物理学史資料紹介「日本における物理学史資料の保存状況」  
板垣英治，「第四高等学校物理実験機器」，日本物理学会，物理学史資料委員会会報 No.6，（2005，12），14 頁.
- 2 0. 『明治前期産業発達史資料』第 7 集（3），「明治十年内国勸業博覧会出品解説」（高鋭一纂輯），第二区製品，第十六類，教育器具，明治文献資料刊行，昭和 38 年 3 月刊.
- 2 1. 高橋智子，「明治期の科学機器とその製作技術」，『東北大学大学院国際文化研究科論集』，第 5 号，（1998），121－140 頁.
- 2 2. 島津製作場蔵校「理化器械目録表」明治十五年六月刊.
- 2 3. 明治十一年御巡幸之件，「石川県報告」第三十号，（明治 11 年 11 月 13 日発行）「中学師範学校」，石川県立図書館蔵。（頁数の記載ない）
- 2 4. 田中鉄吉，『郷土数学』，昭和 12 年.
- 2 5. 『関口先生小伝』，上山小三郎，田中鉄吉編，大正 8 年.
- 2 6. 『文部省第九年報付録（明治 14 年分）石川県年報』，464 頁，金沢大学附属図書館蔵.
- 2 7. 江森一郎，「明治中期までの石川県教育の一面」『市史かなざわ』，第十号，75－83，2004.
- 2 8. 横地石太郎，「余の実歴に係る加賀藩末の教育」，『加越能時報』，大正 2 年.

### 文献 第 3 編 石川県専門学校

1. 『文部省第九年報付録』「石川県年報」（明治 14 年分）464 頁.
2. 『文部省第十二年報付録』「石川県年報」（明治 17 年分）279 頁.
3. 大野郁夫，『近代日本高等教育研究』（玉川大学出版部，1998），105 頁.

4. 西田幾多郎,「山本晃水君の思出」,『西田幾多郎全集』(岩波書店,昭和40年)12巻,245頁.
5. 『官報1137号』(明治20年4月18日),「文部省告示第三号」,石川県専門学校旧蔵,金沢大学附属図書館蔵.
6. 「旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及目録」,(第四高等学校,明治21年8月),金沢大学資料館蔵.
7. 『文部省第九年報付録』「石川県年報」(明治14年分),465頁.
8. 『石川県職員録』,明治18年,出版人 池善平,国立国会図書館.
9. 『第四高等中学校第四高等学校一覽自明治二十年至明治二十一年』,46-50頁,金沢大学附属図書館蔵.
10. 「職員履歴,第一輯,庶務掛」(第四高等中学校,第四高等学校職員履歴書),金沢大学資料館蔵.
11. 上山小三郎,田中鉄吉,『関口開先生小伝』,(1919),1頁.
12. 『稿本金沢市史学事編 第三』(金沢市役所,大正10年),667頁.
13. 『石川県史』第4編,1076頁:「金沢墓誌」上 16頁.
14. 『石川県史料』第二巻,(明治十四年),政治部 学校・衛生,689-695頁.
15. 『文部省第十二年報付録(明治17年分),石川県年報』,297頁,金沢大学附属図書館蔵.
16. 『石川県専門学校洋書目録,明治日本の近代化に貢献した洋書』,金沢大学資料館,(2004).
17. 西田幾多郎,「四高の思出」,『西田幾多郎全集』(岩波書店,昭和40年)12巻,164頁.
18. 『加賀藩旧蔵洋書総合目録』,金沢大学資料館,(2009).
19. 『文部省第十三年報付録石川県年報』(明治18年分),558頁,金沢大学附属図書館蔵.
20. 飯盛挺造纂訳,丹波敬三,柴田承桂校補,『物理学』上編(明治12年12月),中編(明治13年6月),下編(明治13年12月).
21. 『第四高等中学校本部洋書目録』(明治27年,第四高等中学校),金沢大学資料館蔵.
22. 文献15,229頁.
23. 『石川県専門学校物理機器図録』,金沢大学資料館資料目録3,金沢大学資料館,(2005).
24. 岩井武雄「物理機械図入目録,第四高等学校物理室」(昭和20年頃と推定)(複写),金沢大学資料館蔵.
25. 永平幸雄,川合葉子編著,『近代日本と物理実験機器,京都大学所蔵明治・大正期物理実験機器』,京都大学学術出版会,(2001),41頁.
26. 文献25,331-332頁.
27. 文献7,464頁.
28. 『文部省第十年報付録石川県年報』(明治15年分),556-558頁,金沢大学附属図書館蔵.

29. 『文部省第十三年報付録石川県年報』(明治 18 年分), 297-298 頁, 金沢大学附属図書館蔵.
30. 「石川県学事報告」第六号, 『石川県史資料 近代編』, 十卷, 明治 18 年 5 月・6 月, 学務課刊行. 342-343 頁.
31. 文献 11.
32. 田中鉄吉, 『郷土数学』, 大正 12 年.
33. 江森一郎, 「明治中期までの石川県教育の一面」, 『市史かなざわ』, 第十号, 75-82, 2004.
34. 高木亥三郎, 「北条廓堂先生を憶ふ」, 『北条時敬先生』. 尚志同窓会, 1929.

## 後記

金沢大学創基150年記念事業の一つとして、昨年10月に筆者は特別講演会「金沢大学の150年の歴史をふりかえる。～加賀藩医学館，石川県甲種医学校，石川県専門学校～」を講演した。この時の講演の録音テープから文章を越し，資料館紀要に掲載するとのお話があったが，講演からではどうしても部分的な内容となり，安政時代からの加賀藩の西洋医学の取り込みから，明治20年の第四高等中学校の発足までを十分に網羅することは不可能と考え，予てからの考えであった書籍として刊行して頂くことを御願した。館長からの了解のもとに本書の執筆作業を本格化して，この程，刊行することができたことは，多くの方々のご協力，ご支援があったからである。

元々，理系教官であった筆者がなぜ，本学の前身校の歴史を語る様になったかには深い訳がある。2000年3月に定年退官後，長年の計画であった加賀藩の硝石の調査・研究を本格化して，金沢市立図書館，石川県立図書館に通い，関係史料の調査を行った。2003年に論文「加賀藩の火薬，Ⅰ，Ⅱ」を発表後，硝石に関する調査範囲を広めるために，金沢市立近世史料館で，図書カードを検索していた時に，金沢医学館の講義録「スロイス口述，藤本純吉筆記，舎密学」のカードを見付けた。このことが，著者のその後の運命を大きく変えた。これが藤本文庫に保存される金沢医学館でのスロイス及びホルトルマンの全ての講義の記録の調査・研究と発展した。その結果，本学医学部創立150年記念事業の「記念誌」の編纂に参加することになり，通史編では，藩政期から明治20年までの西洋医学の導入とその発展を執筆する事になった。一方，当時資料館で展示されていた医学館に関する事柄から，本館に出入りすることになり，当時の館長笠井純一先生からの依頼で，旧第四高等学校物理機器の整理を行う事になった。城内から角間に移転の際に，これらの物理機器が集められたが，長い間，整理は全く行われて居なかった。92点の器機を調査して，分類して展示を行い，さらに簡単な説明カードを作成した。この事が発展して「金沢大学資料館収蔵，第四高等学校物理機器図録」を2004年に刊行した。次いで，「旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及び目録」（第四高等中学校，明治21年8月）との出会いから，石川県専門学校について調査・研究することになり，さらに啓明学校の調査・研究と発展した。両前身校については，「金沢大学50年史，通史編」では僅かに触れるのみであった。そのためにゼロからの史料調査であった。この調査・研究の結果，「石川県専門学校物理機器図録，明治10年代の物理学教育と文部省交付物理機器」を2005年に刊行した。本図録により，明治11年に文部省からの物理機器110点のセットの交付を受けて居たこと，さらにその53点の器機が現存することが確認された。この事から全国的には金沢にのみ，この「文部省交付物理機器」が保存されていることが明らかとなる大きな成果となった。さらに，同校の洋書の調査を行い，「石川県専門学校洋書目録」を2004年に刊行し，さらに，「加賀藩旧蔵洋書総合目録」を2006年に刊行した。この様に藩末期から明治初期の多数の学術的，教育的史料の調査と研究により，本学の前身校の姿が初め

て詳しく浮かび上がってきたのである。これらの目録の作成に協力していただいた笠井元館長をはじめ元資料館職員、在田則子氏および田島万希子氏（旧姓）には深謝する次第である。付け加えると、この調査が基になり石川県立図書館の特殊文庫に「藩学校蔵書」が生まれ、加賀藩収蔵洋書約 100 冊が集められた。

特にスロイスの講義録の調査から多くの新たな知見を得た。例えば、近代化学は従来、大坂舎密局のハラタマ、リッテルによって紹介されたと化学史では云われていたが、スロイスの舎密学講義とハラタマ、リッテルの講義を比較することにより、明治4年3月から行われたスロイスの講義では現在、世界で使用されている分子式の記述法が教えられており、この講義により我が国に近代化学が導入されたのであった。学術用語「動物学」は金沢で明治3年に作られた言葉である。これまでは「動学」と云われていたが、それが動物学と云われ、先ずスロイスの講義名に「動物学」が使用された。さらに、明治7年5月に大田美農里翻訳『スロイス氏講義 動物学』が石川県により出版された。これが我が国最初の「動物学書」である。さらに、C. Dawin の進化論が、我が国で最初に紹介されたのは、明治5年のスロイスの生理学講義であった。

明治初期に来日外国人により長崎、東京と金沢で高等教育が始まったが、最も先進的な教育が行われたのは、この金沢の医学館、医学所であった。明治初期の北陸地方の人々の健康を預かったのはここで医学を学んだ若者達であった。また、石川県専門学校の教育レベルも高く、卒業生の多くが東大に進学した。その結果、彼らはその後の社会に大きな足跡を残した。現在、金沢市立偉人館で顕彰している木村栄をはじめ多くの偉人達はこの専門学校の卒業生であった。

従来の金沢大学の沿革には、第四高等中学校以前の事柄が欠けていた。「金沢大学50年史」も「金沢大学医学部100年史」にも、明治20年より以前の歴史の記述は僅かである。本書によりこの重要な部分の歴史を補足することが出来ることは、筆者として望外の喜びであり、また、同時に通史を書くことへの責任も痛感している。本書は資料集の性格もあることを付け加えておく。本書の内容が末永く本学の沿革に語り継がれていくことを願ってやまない。これまでに多大なご指導、ご協力を賜りました各図書館および史料館の職員の方々には感謝申しあげる。

平成24年8月

板垣 英治  
金沢大学名誉教授

## 板垣 英治

### 略 歴

名古屋大学理学部化学科卒業  
大阪大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士  
米国・イリノイ大学化学工学部生物化学科博士研究員  
金沢大学薬学部助手、同理学部化学科教授、  
同大学院理学研究科生命科学教授  
金沢大学名誉教授 平成 12 年定年退官  
有限会社金沢大学 TLO 代表取締役

### 退官後

加賀藩の火薬に関係した事柄を調査・研究  
五ヶ山塩硝と土清水薬合所での火薬製造  
鈴見鑄造所での大砲の製造  
加賀藩の台場と大砲の配備  
加賀藩の西洋医学の導入に関する調査・研究、  
と明治初期の金沢での高等教育に関する調査・研究  
金沢医学館でのオランダ医学教育  
石川県甲種医学校での医学教育  
石川県啓明学校、石川県中学師範学校、石川県専門学校での高等教育  
「加賀藩旧蔵洋書目録」の編輯、刊行  
金沢大学医学部創立 150 周年記念誌編纂 など多数

---

金沢大学資料館紀要 創基 150 年記念別冊

## 金 沢 大 学 の 淵 源

加賀藩医学館から甲種医学校まで、および  
石川県啓明学校・石川県専門学校の歴史

平成 24 年 10 月 印刷  
平成 24 年 10 月 発行

著 者 板垣英治 (金沢大学名誉教授)  
編集・発行 金 沢 大 学 資 料 館  
920-1192 金 沢 市 角 間 町  
TEL (076) 264-5215  
FAX (076) 234-4050  
印 刷 能 登 印 刷 株 式 会 社

---



金沢大学  
創基150年